



# Sustainability Report 2008

サステナビリティレポート2008

**NISSAN**



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## はじめに

日産は、「人々の生活を豊かに」することをビジョンに掲げ、グローバルなあらゆる事業活動を通じて社会のさらなる発展に貢献していくことを目指しています。そのためには、日産の持続的な利益ある成長と、社会の持続可能な発展、この2つの方向性をつねに一致させた経営を行うことが重要であり、この方向性の一致には、CSR\*の概念を経営に取り込むことが有効です。そして、これはさまざまなステークホルダーとの信頼関係の醸成につながると考えます。

日産では、2005年度に「日産CSR方針」と「日産CSR重点9分野」を設定しました。また、全社視点でCSRの進捗を管理するために、「CSRステアリングコミッティ」という委員会を設置しました。2006年度以降、このコミッティにおいて、「日産CSRスコアカード」を管理ツールとし、

CSR重点9分野ごとの進展状況・目標などを議論しています。本レポートでは、昨年に引き続きこのスコアカードを掲載し、2007年度のCSRの進捗状況をご報告しています。スコアカードを社会と共有することで透明性を高め、社会からフィードバックを頂き、それを再び社内に取り込み、各機能を強化していきたいと考えています。（詳細は27ページをご覧ください）

なお、環境配慮の観点から2006年版をもって冊子印刷を廃止し、インターネット上で電子データ（PDFファイル）をダウンロードしていただく開示方法に変更しています。

※CSR：Corporate Social Responsibility 企業の社会的責任

## 日産自動車 グループ概要

**設立** ■ 1933年12月26日  
**連結売上高（2007年度）** ■ 10兆8,242億円  
**日産グループ従業員数（2008年3月末現在）** ■ 224,784人  
 （東風汽車有限公司を含む）

**構成・事業内容** ■  
 日産グループは、日産自動車株式会社とその子会社、関連会社等で構成されています。「自動車」「フォークリフト」「マリーン」およびそれぞれの「部品」の製造・販売を主な事業内容としており、さらに同事業に関連する「物流」「金融」をはじめとした各種サービス活動を展開しています。

**ビジョン** ■  
 日産：人々の生活を豊かに  
**ミッション** ■  
 わたくしたち日産は、独自性に溢れ、革新的なクルマやサービスを創造し、その目に見える優れた価値を、すべてのステークホルダー\*に提供します。それらはルノーとの提携のもとに行っていきます。

※ステークホルダーとは、お客さま、株主、社員、販売会社、部品メーカー、そして私たちが働き、事業を営む地域社会を指します



### 関連ウェブサイトのご紹介

- |  |  |   |  |
|--|--|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 企業情報<br/><a href="http://www.nissan-global.com/JP/COMPANY/">http://www.nissan-global.com/JP/COMPANY/</a></li> <li>■ 環境への取り組み<br/><a href="http://www.nissan-global.com/JP/ENVIRONMENT/">http://www.nissan-global.com/JP/ENVIRONMENT/</a></li> <li>■ IR情報<br/><a href="http://www.nissan-global.com/JP/IR/">http://www.nissan-global.com/JP/IR/</a></li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 商品情報（国別）<br/><a href="http://www.nissan-global.com/JP/GLOBAL/">http://www.nissan-global.com/JP/GLOBAL/</a></li> <li>■ 商品情報（日本）<br/><a href="http://www.nissan.co.jp/">http://www.nissan.co.jp/</a></li> <li>■ 社会貢献活動<br/><a href="http://www.nissan-global.com/JP/CITIZENSHIP/">http://www.nissan-global.com/JP/CITIZENSHIP/</a></li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 品質への取り組み<br/><a href="http://www.nissan-global.com/JP/QUALITY/">http://www.nissan-global.com/JP/QUALITY/</a></li> <li>■ 安全への取り組み<br/><a href="http://www.nissan-global.com/JP/SAFETY/">http://www.nissan-global.com/JP/SAFETY/</a></li> <li>■ 最新の技術<br/><a href="http://www.nissan-global.com/JP/TECHNOLOGY/">http://www.nissan-global.com/JP/TECHNOLOGY/</a></li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ デザインへの取り組み<br/><a href="http://www.nissan-global.com/JP/DESIGN/">http://www.nissan-global.com/JP/DESIGN/</a></li> <li>■ 企業情報ライブラリー<br/><a href="http://www.nissan-global.com/JP/IR/LIBRARY/">http://www.nissan-global.com/JP/IR/LIBRARY/</a></li> </ul> |
|--|--|---|--|

はじめに	001
<b>CEOメッセージ</b>	<b>002</b>
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## CEO Statement

## CEOメッセージ

日産が考えるサステナビリティ(持続可能性)の本質は、一貫性を持った継続的な前進にあります。端的に言えば、明日の活力を確かなものとするよう、今日の活動を設計していくことです。

いかにして、今日のクルマを未来のお客さまにふさわしいものへと進化させていくか。将来の地球環境を、少なくとも今日と同じ状態、あるいはさらに改善するために何をすべきか。品質向上には何が必要か。収益を維持していくにはどうすればよいか——持続可能性に関するこうした問いに答えを出していくことが、前進するための重要な鍵となります。

日産の前進において大きな節目となるのが、中期経営計画です。これまでも、会社の発展の各段階で直面した諸課題に対処するため、私たちはさまざまな戦略を策定してきました。すべての経営計画に共通するのが収益性です。収益を上げられなければ、企業は未来を確かなものとする資源を確保できません。社会意識がいかに高くても、財政的に行き詰まった企業に持続的な価値は生み出せないのです。もちろん、持続可能性というコンセプトが利益のみに帰するわけではありません。日産の雇用や商品、イノベーションが生み出す価値に加え、私たちの未来はまた、企業イメージやガバナンス(企業統治)、環境への取り組みなど、企業の営みをめぐるさまざまな側面に結びついているのです。

2008年度から実施する新たな中期経営計画「日産GT 2012」は、こうした包括的な構想を具体的に示したものです。Gは成長(Growth)、Tは信頼(Trust)を意味しており、日産の成長への道筋と、事業のあらゆる側面で健全な持続可能性を引き続き実現していくための戦略を明確にしています。

信頼を経営計画の中核に据えたことには意図があります。私たちは、企業の業績と社会への貢献との間にはプラスの相関があると考えています。長期にわたって優れた業績を上げている企業は、すべてのステークホルダーとの間に高い信頼を築くことができる企業です。信頼とは、持続可能性、社員の忠誠心、株主への利益還元、商品・サービスやマネジメントの質などをすべて網羅するものであり、そうした優れた面が「信頼」というひとつの重要な言葉で表されているのです。

日産では社員、サプライヤー、ディーラー、パートナー企業のすべてがこうした認識を共有しています。アライアンスパートナーであるルノーと日産では、企業文化や歴史の違いから、持続可能性に対するコミットメントの示し方が違って見えるかもしれませんが、その本質は同じです。アライアンスによって、私たちは持続可能性を効果的に追求することが可能となります。たとえば電気自動車などの開発ブ



picture by mattphoto.co.uk

日産自動車株式会社  
社長兼最高経営責任者  
カルロス ゴーン

はじめに	001
<b>CEOメッセージ</b>	<b>002</b>
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

プロジェクトでは、アライアンスの協働体制によってより早く、効率的な方法で商品を市場に投入することができます。両社の力を結集させ、持続可能なビジネスを互いに促進することができるのです。

持続可能性は、日産のビジネスパートナーの業務にも深く関わっています。当然のことながら、サプライヤーの協力なしに電気自動車のような開発プロジェクトを進めることはできません。また、日産の環境に対する取り組みをお客さまに直接伝えるのは販売店です。日産の中で起こっていることをこれらのパートナーが認識しているからこそ、私たちは互いに協力し合い、相互の前進に貢献できるのです。

日産とステークホルダーの関係は、透明性の上に築かれています。透明性なくして信頼関係は成り立ちません。どの会社も何らかの課題を抱えているものですが、重要なのはその現状をステークホルダーにきちんと示し、対応策に関する説明責任を果たすことです。透明性は一貫性のある、積極的なものでなければなりません。

日産が現在取り組んでいる主要な課題は、「安全」「品質」「環境」という3つの分野です。1つ目は安全です。安全性とは、クルマの安全性とドライバーの運転技術の双方の向上によって成り立つものです。安全性は人間の行動に大きく左右されるため、日産はドライバーの運転技術の向上を支援する活動に力を入れています。同時に自動車メーカーの責務として、お客さまにより安全性の高いクルマを提供できるよう、新技術の開発に取り組んでいます。日産は安全技術を重点分野と位置づけ積極的な投資を行っており、技術研究チームによってさまざまな開発を進めています。

2つ目の課題は品質です。日産にとっての品質とは、お客さまのニーズを最優先し、その要望に非常に高いレベルで応えることを意味します。実際に「日産GT 2012」では、品質領域でリーダーになることを第1のコミットメントに掲げています。品質領域とは、商品はもちろんのことサービス、ブランド、マネジメント、そして会社全体としての質を指しています。日産ブランドの品位を守り、お客さまの信頼を維持していくうえで、品質は欠かすことのできない要素です。

3つ目は環境への取り組みです。日産は、世界に異変が起きていること、そして地球環境の改善を求める声が高まっていることを十分に認識しており、解決策の提供を目指しています。「日産GT 2012」を通じて、私たちはルノーとともにゼロ・エミッション車で世界のリーダーとなることを目標としています。また、クリーンディーゼル車、独自のハイブリッド技術、燃料電池車、小型低燃費ガソリンエンジンの開発など、中期環境行動計画「日産・グリーンプログラム2010」で掲げた目標にも引き続き取り組んでいきます。日産は、工場や事業所における環境負荷についても注力しています。米国・テネシー州にある北米日産会社の新本社と横浜市に建設中のグローバル本社は、いずれも厳しい環境基準のもとで設計されています。持続可能性に対する私たちのコミットメントは、包括的な見地に立ったものなのです。

日産は、世界最大の自動車メーカーのひとつとして大きな影響力を持つ存在です。しかしながら、私たちが独力でできることには限りがあります。自動車業界が一丸となり、行動と言葉の両面で社会の持続可能な成長に貢献していかなければなりません。

はじめに	001
<b>CEOメッセージ</b>	<b>002</b>
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

自動車業界は、商品のデザインや安全性、お客さまに提供できる価値などにおいては、一般的にプラスのイメージを持たれています。しかし環境面となると、自動車メーカーは総じて努力が足りず、環境保全とは相いれない商品をつくっているという印象を持たれることもあります。私たちは具体的な活動を通じて、商品、サービス、技術そして投資によって正しいことをしていると業界全体で社会に示さなければなりません。

これに関して、日産は自動車業界が良い意味で注目されるような、さまざまな計画を打ち出しています。その一例が、ゼロ・エミッション車を量販するというコミットメントです。市場投入までに10年以上かかる試作車をつくるのではなく、2010年度にまず米国と日本市場へ投入し、2012年度にはグローバル市場で電気自動車を量販するという具体的な取り組みです。開発はルノーとのアライアンスによって進められており、両社の技術を共有できるため実現の可能性は非常に高いといえます。これはきわめて現実的な開発プロジェクトなのです。私たちはお客さまの期待に応え、環境負荷を低減するためのソリューションを生み出そうと努力しています。

行動は大切ですが、言葉もそれに劣らず重要です。自らが社会に提供したメリットを語ることによって、消費者の理解と信頼を築くことができます。私たち自動車メーカーは、世界中でどれほどの投資を行い、新技術を開発し、雇用を創出して世界に貢献しているか、という点で多くを語らない傾向があります。しかし、ロシア、インド、中国などの国々が自動車産業の保有を望んでいるのは、それだけの理由があるからです。自動車はそれほど重要な産業なのです。自動車産業による社会的影響が非常に大きいだけに、私たちは環境面だけでなく世界全体の経済的成長や発展のために何を行っているか、言葉で発信する必要があります。

環境保護と経済発展という2つの目標は、密接な関係を持っています。私たちは、社会に提供する価値のひとつとして「すべての人びとにモビリティ(移動すること)を」というコンセプトを掲げています。インド市場で投入予定の超低コスト車がきわめて重要なのは、これまで移動の自由を享受してこなかった人びとにモビリティを提供するからです。しかも私たちは、環境面の目標に沿って進めています。

ステークホルダーに提供する「価値」の定義は、年々進化しています。10年から20年前には企業のブランド力やクルマの品質、価格、再販価値などを意味していたのに対して、最近では従来の定義に加え、企業イメージや環境に対する姿勢までも含むものとなりました。消費者の考え方にこうした広がり生まれ、良き企業市民と認められている企業から商品を買いたいという願望につながっています。

日産は「人々の生活を豊かに」というビジョンのもと、より良い社会づくりに貢献できるよう尽力しています。そうした活動は、教育支援、多様性(ダイバーシティ)の推進、自然災害時の援助などの形で行われています。私たちは実行したことを言葉で発信し、活動内容を報告することによってステークホルダーの関心を高めています。

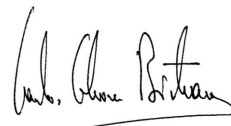
ステークホルダーごとに関心事は異なります。ダイバーシティを重視するステークホルダーもあれば、CO<sub>2</sub>排出量を削減する活動に関心を抱く向きもあるでしょう。しかし、いずれのステークホルダーも、私

はじめに	001
<b>CEOメッセージ</b>	<b>002</b>
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

たちの活動や成果の内容を具体的に知りたいと望んでいる点は同じです。日産がサステナビリティレポートを、毎年株主総会の時期に発行しているのには理由があります。人びとの生活を豊かにするために日産が積極的に取り組んでいる分野について、社員やビジネスパートナー、一般市民の皆さまを含むあらゆるステークホルダーにお伝えする良い機会だからです。こうした今日の行動が、日産の確かな未来につながっています。

20年ほど前、多くの人びとにとって持続可能性は退屈な話題でしかありませんでした。しかし今、ステークホルダーは持続可能性を重視し、企業に対して持続可能なビジネス手法を選択するよう強く求め、うながす声が高まっています。持続可能性はもはや専門家の領域にとどまらず、あらゆる人が注目し、貢献しうるものとなりました。

こうしたプロセスに参画していることは、日産の誇りです。本報告書をご覧いただき、私たちの持続可能性に対する活動を、ぜひ皆さまにご理解いただきたいと思います。



**カルロス ゴーン**  
社長兼最高経営責任者  
日産自動車株式会社

はじめに	001
CEOメッセージ	002
<b>CSR対談</b>	<b>006</b>
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## CSR対談

### 「品質」「安全」「環境」を軸にCSRを推進 ～社会の声に耳を傾け、信頼され続ける企業に～

地球環境や社会的な諸問題がクローズアップされる中、企業の社会的責任（CSR）への取り組みにますます注目が集まっています。日産では企業戦略と社会のニーズをバランスよく保つことに力を注いでいます。2007年にはCSR重点分野の目標や進捗度を示した「スコアカード」を初めて公開しました。中でも、クルマづくりの基盤となる「品質」「安全」「環境」は重要な項目です。いかにして環境・社会的課題に向き合い、日産ならではの価値を創造していくか——こうした課題について、当社最高執行責任者（COO）の志賀俊之と、企業のCSR活動に詳しいピーター D. ピーダーセン氏が対談しました。

#### CSRスコアカードを公開

**ピーダーセン：**企業の社会的責任（CSR）の定義は、ようやく世界で共通なものとなりつつあります。主に「社会が求めるものと自社の経営戦略のベクトルを合わせる経営」「あらゆるステークホルダーにバランスよく価値を提供する経営」「短期視点と長期視点のバランスに配慮した経営」といった定義が可能ですが、日産ではこうしたCSR的な視点をどのように日常のビジネスに反映させていますか。

**志賀：**まずは企業としての事業計画があり、その一方で企業に対する社会的要請を十分に認識し、企業戦略と社会のニーズをつねにバランスよく保つことが重要だと考えます。日産ではCSRを「企業にとってのオポチュニティとリスクの芽の集まり」ととらえ、社内横断組織であるCSR ステアリング コミッティを軸に、社外からのフィードバックを組み込んだPDCA（計画、実施、評価、改善の循環プロセス）を回しています。具体的には、さまざまな社会的課題について、企業戦略のベクトルに合っているかという観点から社内で議論し、取り組むべきものについては関係部門で対応します。そしてその進展を社外に広く発信します。すると次は格付機関などから社会のベクトルに合った取り組みかどうかという視点でチェック・評価され、そのフィードバックを再び社内に取り入れる、というサイクルです。2007年からは日産の



日産自動車株式会社  
最高執行責任者

志賀 俊之（右）

株式会社イースクエア  
代表取締役社長

ピーター D. ピーダーセン（左）



はじめに	001
CEOメッセージ	002
<b>CSR対談</b>	<b>006</b>
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

CSR分野における目標・進捗状況を示したスコアカードの一部をウェブサイト上に公開しています。これによって、私たちが目指す企業活動と社会要請のベクトルを一致させていきたいと考えています。

**ピーダーセン**：一方で、株主からいわゆる経済的指標を第一に求められることはありませんか。

**志賀**：企業である以上、短期的な結果も着実に出さなくてはなりません。日産は社会のさらなる発展に貢献していくことを目指して中期的な経営目標を定めています。そして、その方向性の中で短期的にも結果を出せるよう努めています。短期には結果を出していても社会の要請とベクトルが合っていないような企業に対して、株主が納得するとは思えません。最近、日産の技術戦略の中で「環境」や「品質」に対する価値を評価してくださる株主の方々が非常に増えています。企業や社会の持続可能性に対する認識、理解が徐々に高まってきていることの表れではないでしょうか。

### ステークホルダーとの相互発展

**ピーダーセン**：最終的にはお客さまに日産車を買ってもらい、価値を提供することなくして日産のサステナビリティという軸は成り立ちません。お客さまへの価値提供を最大化するために、お客さまを取り巻く「社員」や「サプライヤー」、あるいは「販売会社」といったステークホルダーに対してはどのような取り組みをされていますか。

**志賀**：社員はもちろん、サプライヤーさんや販売会社も私たちのパートナーです。たとえば社員は、仕事にチャレンジする中でさまざまな価値を創造して会社に貢献しながら、自分自身も成長していく。サプライヤーさんの場合も、お互いに切磋琢磨しながら技術力を向上させ、品質やコスト競争力をアップしていく。販売会社は、お客さまとのタッチポイントを担っており、質の高いサービスなどを通じてお客さまへの価値を創造しています。つまり日産と一緒にチャレンジすることで、相互の価値を高めながら持続的な成長を果たしていく。そうした取り組みがとても重要だと考えています。

**ピーダーセン**：中期経営計画「日産バリューアップ」の3年間を振り返って、その成果はありましたか。

**志賀**：自動車業界にとってこの数年間はもっとも厳しい環境でしたので、困難も数多くありました。厳しい状況下でも、経営の意識を変えていくこと、現場力を向上させること、販売の第一線で働く社員のスキルを高めていくことで、互いに良い結果を得られるように努めてきました。困難を皆で乗り越えたことが必ず力になっていくと思います。





はじめに	001
CEOメッセージ	002
<b>CSR対談</b>	<b>006</b>
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

**ピーダーセン**：少し厳しいことをお聞きますが、サプライヤーに対してはまずコスト削減を要請されました。そのうえでCSRも重視するとなると、さらなる要求として受け止められませんか。

**志賀**：それはどうでしょうか。社会や環境側面に配慮しながら事業活動をするのは、コスト削減にも通じることだと思います。本質は、あくまでも正当な企業活動をする事です。パートナーとしてサプライヤーさんを選定させていただく際、日産はいろいろな視点から評価をします。コストや品質はもちろん、企業としての社会的姿勢も当然選定条件の中に入ります。調達先はいつそうグローバルに広がり、社会や環境面も視野に入れたサプライチェーン・マネジメントの必要性が高まっていることを受けて、日産は、サプライヤーさんと一体となったCSRマネジメントを遂行するためのプロセスを構築し、2008年1月に取り組みをスタートさせました。

### クルマづくりの土台

**ピーダーセン**：日産は9つのCSR重点分野を掲げていますが、自動車メーカーとしては「品質」「安全」「環境」がとりわけクローズアップされるのではないかと思います。これらの領域で、日産が過去1年間にとくに力を入れてきたことは何でしょうか。

**志賀**：「品質」「安全」「環境」はいずれも、クルマをつくるうえでの基盤になるものです。安全については、2015年までに日産車に関わる交通事故の死亡・重傷者数を半減（1995年比）するという大きな目標を定めています。すでにさまざまな先進技術を開発しており、商品化しています。2007年度は、アラウンドビューモニターやレーンデパーチャープリベンションなどを商品化しました。

品質については、製品への信頼感とサービスへの安心感を高めるため、品質管理方針を定めて推進しています。2007年7月には品質改善の拠点となる「フィールド・クオリティ・センター」を本格稼働させました。

環境分野においては、2010年に向けた中期環境行動計画「日産・グリーンプログラム2010（NGP2010）」を2006年12月に発表しました。NGP2010はIPCC（気候変動に関する政府間パネル）が2001年に発表した第3次評価報告書に基づいて策定したものです。昨年末には最新版となる第4次報告書が発表され、気候変動に対する危機感を世界全体で共有化し、対策を急ぐ必要性がよりいっそう明らかとなりました。日産では早急に取り組むべき課題は適宜前倒しし、項目によってはさらに厳しい目標に挑戦していく姿勢で取り組んでいます。

具体的には、CO<sub>2</sub>排出量削減に向けた取り組みとして、欧州や日本市場へのクリーンディーゼル車の投入、電気自動車や燃料電池車といった電動車両の普及促進に力を注ぎます。また、エミッションのクリーン化や資源循環など、NGP2010の3つの重要課題について、社内の各部門を有機的に連動させ、互いに協力しながら確実に実行していきたいと考えています。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
<b>CSR対談</b>	<b>006</b>
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 誠実かつ革新的な環境対策

**ピーダーセン**：「環境」についてさらに詳しくお聞かせください。NGP2010発表の際に「シンシア・エコイノベーター (Sincere Eco-Innovator)」というビジョンが打ち出されました。このビジョンの根底にある日産の姿勢についてお聞かせください。また、NGP2010の発表から1年が経過し、手ごたえはいかがですか。

**志賀**：環境の代表的な技術は「ハイブリッド車」とわれがちですが、日産が取り組んでいるのは、お客さまや社会のニーズに合わせた「4 Rights (適切な技術を、適切な市場に、適切なタイミングで、適切な価値とともにお客さまに提供する)」を実現した環境技術・商品を提供することです。たとえば、2008年1月発売の「ノート」は、お客さまが実際に使用される際の燃費を改善することに着目して開発したクルマです。そうした地道な取り組みが「シンシア (誠実である)」であり、一つひとつのパーツに日産の技術の粋を込めて、従来よりもさらに環境に配慮した、革新的なクルマをつくる「イノベーター」になることを強調したかったのです。

日産はこの1年間で、大きな自信を手にしたと思います。環境への取り組みに対して、さまざまな専門機関から高く評価していただきました。たとえば、気候変動に関する戦略・情報開示において先進企業が選ばれるクライメート・ディスクロージャー・リーダーシップ・インデックスに初めて選定されました。また、エコドライブをサポートするカーウイングス・システムが2007年度エコプロダクツ大賞の国土交通大臣賞、そして省エネ大賞の資源エネルギー庁長官賞を受賞しました。企業の活動を注意深く見ている専門家の方々からは、当社のシンシアな取り組みを認めていただいていると思います。

ただ、社会の変化は早く、環境に対する人びとの意識もずいぶん変わってきています。私たちはつねに切迫感を持って臨まなければなりません。

**ピーダーセン**：日産が今後、どのような環境商品のストーリーを語っていくのか、とても興味深いのですが、新しい動きはありますか。

**志賀**：先ほど申し上げたとおり、私たちはクルマづくりの土台として「環境」「安全」「品質」にしっかり取り組むことが不可欠であると考えます。そのうえで、お客さまにはクルマが本来持つ「ときめき感」を十分に楽しんでいただきたい。単なる移動の道具にとどまらず、お客さまが求めている魅力や付加価値を提供していきながら、なおかつ「環境に配慮した」クルマをつくっていきたいと思います。お客さまのニーズに合わせた環境技術の商品化、それぞれの生活スタイルに合った質の高いサービスが提供される状態が肝要ではないでしょうか。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
<b>CSR対談</b>	<b>006</b>
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

**ありたい姿を明確に示す**

**ピーダーセン**：CSRの取り組み、中でも環境においては、社会やお客さまに分かりやすいメッセージを絶えず発信して、日産の価値を継続して伝えていくことが重要です。これについて、一部には日産のメッセージ不足を指摘する声もあります。

**志賀**：コミュニケーション強化の重要性については、外部有識者を交えた環境アドバイザー・ミーティングの場でも多くのアドバイスを頂きました。排気ガスのクリーン化やリサイクルへの取り組みなど、大きな成果を出してはいるのですが、強いメッセージを発信するという意味では確かに足りないかもしれません。「〇〇といえば日産だ」と言われるよう、企業としての大きな柱、フラッグシップとなるものを持つべきではないかと思っています。現在、社内のさまざまなリソースを特定の課題に集中させることによって、他社に先駆けた独自の技術やサービスを提供していけるように準備を進めています。

5月に発表した新中期経営計画「日産GT 2012」は、そうした環境の柱となる要素も反映させて内容を策定しました。シンシア・エコイノベーターとして、すべての項目に取り組んでいくことも大事ですが、より進んだものに一段と注力し、社会のニーズに応えると同時に社会をリードしていくことも重要だと思っています。

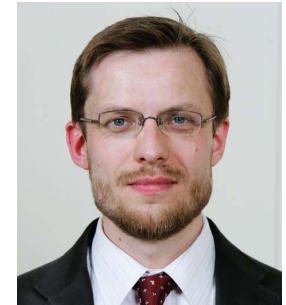
**ピーダーセン**：新中期経営計画の「日産GT 2012」のポイントについてお聞かせください。

**志賀**：「日産180」や「日産バリューアップ」を通じて、今後の成長を支える基礎固めができたと考えています。「日産GT 2012」は「成長」と「信頼」を軸とした5か年計画で、健全な収益力をベースに、今後はより長期的な展望で会社の成長と社会の発展に寄与していくことを目指しています。成長にとめない、すべてのステークホルダーとの信頼関係をさらに強化していきたいと思っています。

**ピーダーセン**：環境に関しても大きなコミットメントを掲げましたね。

**志賀**：はい。3つのコミットメントのひとつに「ゼロ・エミッション車でリーダーになること」を掲げました。具体的には、2010年度に米国および日本に電気自動車を投入し、2012年度にはグローバルに量産する予定です。グローバルな市場の拡大と地球環境の保護は、バランスをとっていくことが求められます。私たちは、ゼロ・エミッション車を手ごろな価格で量販することこそ、自動車メーカーとしてもっとも重要な取り組みであると確信し、ルノーとともにこの分野のリーダーになることを目指します。

**ピーダーセン**：「リーダーになる」というのは、社会に対する力強いメッセージですね。ぜひ、その志に負けないだけの、今後の日産の行動に期待したいものです。



株式会社イースクエア  
代表取締役社長

**ピーター D. ピーダーセン**

CSR分野におけるグローバルでの知見、企業のビジョンを引き出すファシリテーション能力を生かし、グローバル企業に対し戦略的コンサルティングを行う。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006

## 日産のCSR 011

日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

Nissan's Approach to CSR

# 日産のCSR

短期視点と長期視点のバランスを追求



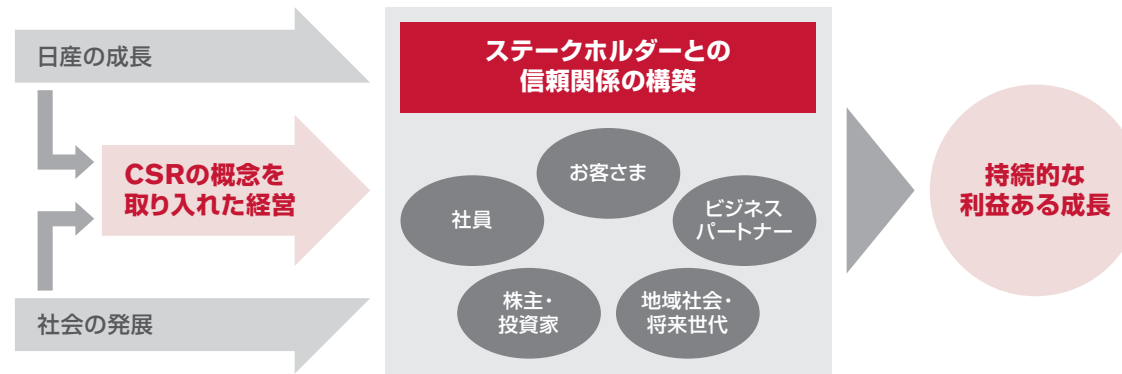
はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
<b>日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」</b>	<b>012</b>
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

Nissan's Approach to CSR

# 日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」

## 社会の声に耳を傾け、オポチュニティとリスクの芽を見出す

日産は「人々の生活を豊かに」することをビジョンに掲げており、製品・サービスの提供を通じた価値の創造はもとより、グローバルなあらゆる事業活動を通じて、社会のさらなる発展に貢献していくことを目指しています。そのためには、日産の持続的な利益ある成長と、社会の持続可能な発展、この2つの方向性をつねに一致させた経営を行うことが重要であり、この方向性の一致には、CSRの概念を経営に取り込むことが有効です。そして、これはさまざまなステークホルダーとの信頼関係の醸成につながると考えます。



### 日産の考えるCSRとは

近年、企業に対してCSR（企業の社会的責任）の視点に立った経営活動が求められており、多くの企業がそうした声に応えるために、CSR活動の推進を強化しています。

しかし、CSRのとらえ方や推進手法については、国や企業、各種団体ごとにさまざまなものがあり、グローバルに議論され続けています。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
<b>日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」</b>	<b>012</b>
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

日産では、CSRを以下のようにとらえています。

CSRとは、さまざまなビジネスの領域において、次の3つのバランスを追求するプロセスマネジメントツールである。

1. 短期視点と長期視点のバランス
2. 企業の成長と社会の発展のバランス
3. 企業が提供する価値のステークホルダー間のバランス

そしてCSRとは、

自社の事業活動が生み出しているかもしれない社会的課題、  
自社の事業活動が影響を受けるかもしれない社会の変化を、早期に認識・感受し、  
そこにオポチュニティあるいはリスクを見出して、日々のビジネスの変革を図ること。  
これにより社会の持続可能性を高め、同時に自社の持続可能性を高めることである。

### 中期経営計画「日産バリューアップ」期間中のCSR発展プロセスを振り返る

日産では、2005年度から実施してきた中期経営計画「日産バリューアップ」の中で、CSRを次のようなプロセスで発展させてきました。

2005年度：日産のCSRを定義づける年

2006年度：日産のCSRを体系化する年

2007年度：体系化した日産のCSRを社会に伝えていく年

#### 2005年度の振り返り：日産のCSRを定義づける年

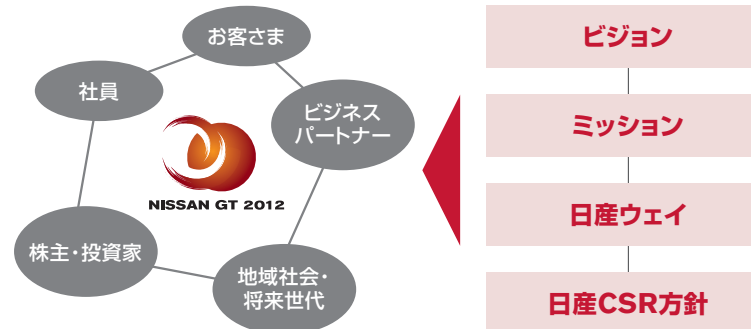
発展プロセス初年度の2005年度は、「日産CSR方針」「日産CSR重点9分野」を定めることで日産のCSRの定義づけを行い、さらにその重点9分野の進展を管理するために「CSR ステアリング コミッティ」を設置しました。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
日産独自のCSR推進手法「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダーエンゲージメント2007	031
事業活動報告・コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考えるサステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 日産CSR方針

- ・日産のあらゆる活動は、倫理的行動、高い透明性に裏打ちされたコーポレートガバナンス（企業統治）、そして多様性の尊重のうえに成り立っています。
- ・私たちが目指すのは、企業として持続的な利益ある成長を追求すると同時に、持続可能なモビリティと社会の実現に向けて積極的に貢献していくことです。
- ・世界中のステークホルダーの声に耳を傾け、協力し合うことで、信頼と機会を生み出し、価値を創造し続けていきます。

日産CSR方針は、「ビジョン」「ミッション」「日産ウェイ」のもとにおかれ、さまざまなステークホルダーへの価値創造に貢献します。



※「ビジョン」「ミッション」は1ページ、「日産ウェイ」は38ページ参照

CSR方針の策定と重点9分野の設定にあたってまず行ったことは、社内外からフィードバックを集めることでした。社内からのフィードバックは、役員層と部次長層に分けて集約。役員層においては、経営陣の頭の中にあるCSR観点で見た日産の強みと弱みを把握するために、「CSR自己診断インタビュー」を取締役を含む12名の役員を対象に実施しました。続いて、部次長層を対象に、同じくCSR観点で見た日産の強みと弱みを把握するために、海外拠点の代表者を含むさまざまな部門の責任者約50名を集めて、「CSRワークショップ」を開催しました。

## 日産CSR重点9分野

<p><b>誠実</b></p> <p>公平・公正を旨とし、社員は日産グローバル行動規範に則って、事業を営むあらゆる場所で倫理的に行動します。</p>	<p><b>品質</b></p> <p>世界で高品質が認められる製品やサービスを創造します。</p>	<p><b>安全</b></p> <p>技術の革新に加え、安全推進活動に積極的に取り組み、クルマ社会をより安全なものにしていけます。</p>
<p><b>経済的貢献</b></p> <p>持続的な利益ある成長を目指します。そして社会全体の経済的発展にも貢献します。</p>	<p><b>環境</b></p> <p>クルマのライフサイクルから生じる環境負荷を低減し、持続可能なクルマ社会の実現に貢献します。</p>	<p><b>バリューチェーン</b></p> <p>サプライチェーンのあらゆる段階において、倫理的で環境に配慮した行動がなされるよう促進していきます。</p>
<p><b>ブランド</b></p> <p>人、環境、そして事業を営む地域社会への配慮で知られる、信頼されるブランドを創造します。</p>	<p><b>社員</b></p> <p>多様な人財が自らの成長を実感できる、魅力的な組織となることを目指します。</p>	<p><b>社会貢献</b></p> <p>NGOとのパートナーシップにより、地域社会や人びとの繁栄に寄与します。</p>

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
日産独自のCSR推進手法「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダーエンゲージメント2007	031
事業活動報告・コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考えるサステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

一方、社外からのフィードバックに関しては、世界各地の格付機関の評価、メディアの評価、他社ベンチマークをそろえました。以上の社内外からのフィードバックを分析・統合し、「日産CSR方針」「日産CSR重点9分野」を策定、「CSR ステアリング コミッティの設立」とあわせて、2005年度末（2006年3月）の経営会議において機関決定しました。

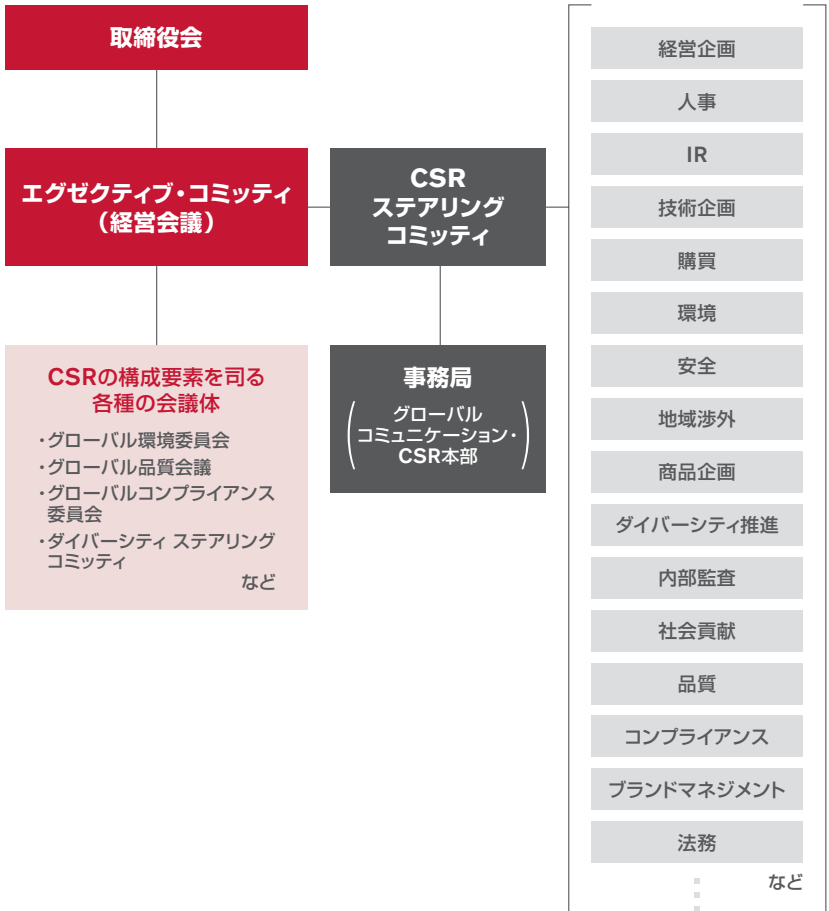


### CSR ステアリング コミッティのミッション

重点9分野において、CSRで求められる3つのバランスを追求すること

1. 短期視点と長期視点のバランス
2. 日産の成長と社会の発展のバランス
3. 日産が提供する価値のステークホルダー間のバランス

### CSR ステアリング コミッティに関する組織図





はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
<b>日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」</b>	<b>012</b>
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 役員層向け「自己診断インタビュー」

日産では2005年秋に、12名の役員層を対象に自己診断プログラム「CSRイノベーション」を実施しました。これは、日本・北米・欧州の経営者からなるグローバルネットワーク「経済人コー円卓会議」\*により開発されたツールで、1994年に同会議により策定された「企業行動方針」に基づいて設計されています。このプログラムでは、各役員がインタビュアーとの直接対話を通して、多様な切り口による49の設問に答え、その結果を分析して役員層がどのような認識を持っているかを客観的に把握します。この「CSRイノベーション」の実施は、本来の目的に加え、役員層が

CSRの視点からあらためて自社の経営のあり方を考える機会にもなりました。

この自己診断を通じて、右記のような強みと課題が抽出されました。

\*経済人コー円卓会議 (Caux Round Table : CRT) は、各国のビジネスリーダーらにより1986年にスイスのコーに創設され、主に企業倫理やCSRといった経済・社会関係の健全な発展に寄与するために活動しています。

### <強み>

- ・ダイバーシティ(多様性)の取り組み
- ・透明性の確保に向けたさまざまな取り組み
- ・クルマの高リサイクル率の実現と業界におけるリーダーシップの発揮 など

### <課題>

- ・社会全体の発展への貢献がまだ不十分
- ・ビジネスと環境・社会面の取り組みの両立
- ・日本、北米、欧州以外の地域での対応 など

## 部次長層向け「CSRワークショップ」

日産の社会的責任という観点から、各部門で日々行われている業務を見つめ直し、課題を認識する機会として、2005年秋に社内ワークショップを行いました。

このワークショップには、欧州、北米の代表者を含む関連部門の部次長約50名が参加。グローバル社会において企業の役割がどのように変化しているか、ステークホルダーが企業に期待することは何かなど、基本的な考えや世界動向についての情報を共有した後、日産の強みと課題、将来に向けての目指すべき方向、重点的に取り組むべき分野などについて議論を行いました。

このワークショップにおける議論の結果は、CSR方針および重点9分野の設定に生かされました。

### <ワークショップ参加部門>

経営企画、ブランドマネジメント、購買、技術企画、品質、マーケティング、アフターセールス、物流、生産、環境・安全、ダイバーシティ推進、社会貢献、関係会社管理、販売会社支援、産業機械事業、リサイクル推進、ニッサン・セールス・アンド・サービス・ウェイ推進、中国事業、欧州日産、北米日産、一般海外市場、地域渉外、人事、広報、IR、経理、内部監査、法務 など



社内ワークショップ

## 2006年度の振り返り：日産のCSRを体系化する年

2006年度は、前年度に策定した日産のCSRの定義である「日産CSR方針」「日産CSR重点9分野」に基づいて、「日産のCSRを体系化する年」でした。

4月に重点9分野に関係する部門の部次長約20名からなる「CSR ステアリング コミッティ」を組織化し、5月に第1回目となる「2006年度上半期 CSR ステアリング コミッティ」を開催。重点9分野ごとに、CSR視点で見た将来のオポチュニティおよびリスクについての議論を行いました。CSR ステアリング コミッティでは、「CSRスコアカード」(27ページ参照)を管理ツールとして用い、重点9分野ごとに議論を進めています。

6月には、サステナビリティレポートの2006年版を前年に続き株主総会にあわせて発行。総会の会場では、CSR活動に関するパネルを展示し、総会後はステークホルダー エンゲージメントの一環として、ゴーン社長はじめ役員全員が出席し、株主との懇談会を実施しました。



6月：CSR活動に関するパネルを展示

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
<b>日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」</b>	<b>012</b>
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

7月には、SRI（社会的責任投資）の動向を探るイベント「SRIファンドマネジメントカンファレンス」（東京）に筆頭スポンサーとして協賛し、CSR担当役員による講演や、グローバルな有力CSR格付機関各社との意見交換を行いました。

8月には、数ヵ月間にわたって東京の大手キーテレビ局の夜のニュース番組に取材協力し、上記のSRIファンドマネジメントカンファレンスの模様とあわせて、日産のCSRへの取り組みを取り上げた特集が放映されました。

10月には、社外のCSR有識者3名（写真）を招き、CSR ステアリング コミッティ メンバーとの意見交換会を開催。サプライチェーンにおけるCSRマネジメント、中でも人権マネジメントをテーマに議論を行いました。



アムネスティ・  
インターナショナル  
日本  
寺中 誠 氏



経済産業研究所  
藤井 敏彦 氏



新日本監査法人  
久保 和孝 氏

同じく10月には、世界各地から環境の有識者を招き、環境アドバイザー・ミーティングを開催。日産のグローバル環境統括委員会（現：グローバル環境委員会）議長である志賀COOをはじめ関係者が参加し、意見交換を行いました。ここで得られたフィードバックも反映して策定した中期環境行動計画「ニッサン・グリーンプログラム2010」を、同年12月に発表しました。

11月には、2年に一度発表されるCSRに関する企業情報開示の格付である「グローバルレポーターズ」において、ワールドベストプラクティス50社に選定されました。「グローバルレポーターズ」は、サステナビリティ社、スタンダード&プアーズ（S&P）、および国連環境計画（UNEP）の3者が共同で進めているイニシアティブです。

2007年2月に、「2006年度下期 CSR ステアリング コミッティ」を開催。2007年度より初公開するCSRスコアカードについて、公開前にメンバー全員で確認を行いました。また、有力CSR格付機関のひとつであるイノベストの方を招き、日産への評価に関する意見交換を行いました。

### 管理ツール「CSRスコアカード」

CSR ステアリング コミッティでは、年間を通じて「CSRスコアカード」を管理ツールとしたうえで、会議などでの議論に活用しています。



7月：SRIファンドマネジメントカンファレンス



10月：意見交換会



10月：環境アドバイザー・ミーティング

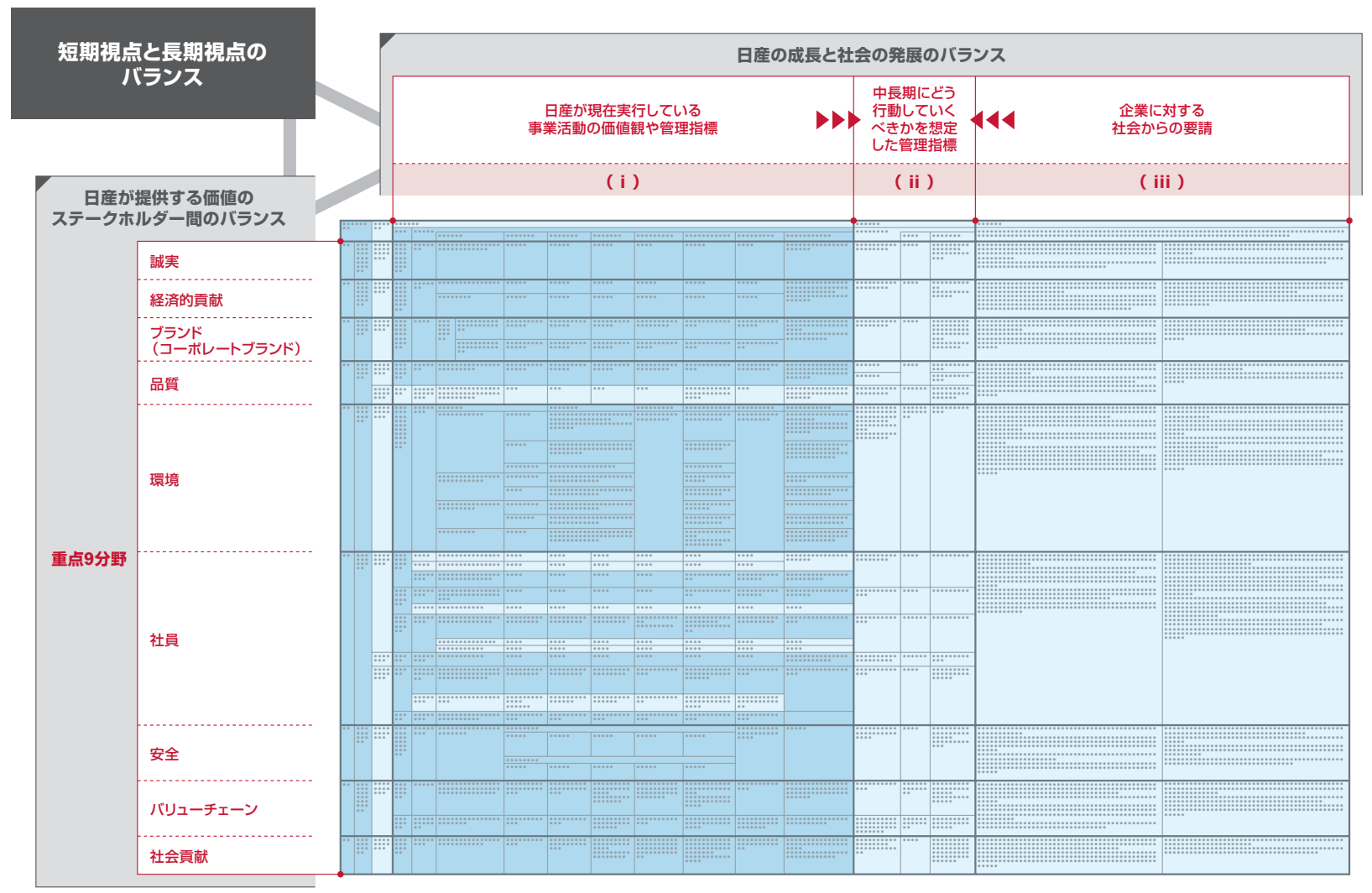


2月：CSR ステアリング コミッティ

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

CSRスコアカードでは、重点9分野ごとに、( i ) の欄に日産が現在実行している事業活動の価値観や管理指標を、( iii ) の欄に企業に対する社会からの要請を記載しています。( ii ) の欄には、( i ) と ( iii ) のバランスを保つためには、将来、どのような価値観や管理指標が想定されるかを検討し、記載しています。CSRスコアカードの横軸で、日産の成長と社会の発展のバランスを追求していくことを狙い、設計しています。一方、縦軸では、日産が提供している価値のステークホルダー間でのバランスの追求を目指します。横軸と縦軸の両軸を踏まえ、全体として、短期視点と長期視点のバランスを追求していきます。

管理ツール「CSRスコアカード」



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
<b>日産独自のCSR推進手法「日産CSRマネジメントウェイ」</b>	<b>012</b>
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 2007年度の振り返り：体系化した日産のCSRを社会に伝えていく年、 そして「日産CSRマネジメントウェイ」の骨格をつくる年に

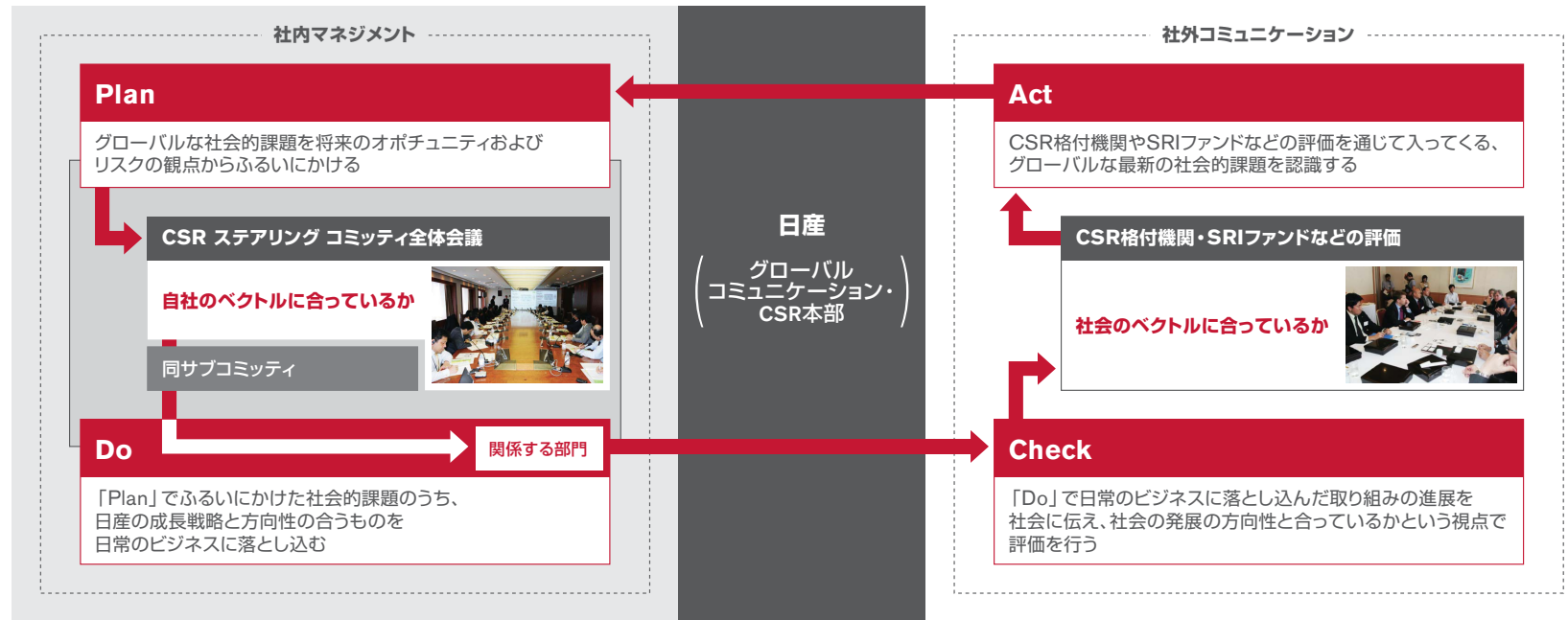
2007年度は、前年に社内外で議論を深めて体系化した日産のCSRを社会に伝えていく年と位置づけ、サステナビリティレポート上でCSRスコアカードを掲載し、一般公開を開始しました。

また2007年度は、私たちが目指す日産独自のCSR推進手法「日産CSRマネジメントウェイ」の構築に向けて、その骨格をつくる年にもなりました。

### 日産独自のCSR推進手法「日産CSRマネジメントウェイ」の骨格

「日産CSRマネジメントウェイ」の骨格の真髄は、「社会の声に耳を傾け、オポチュニティとリスクの芽を見出す」ということです。

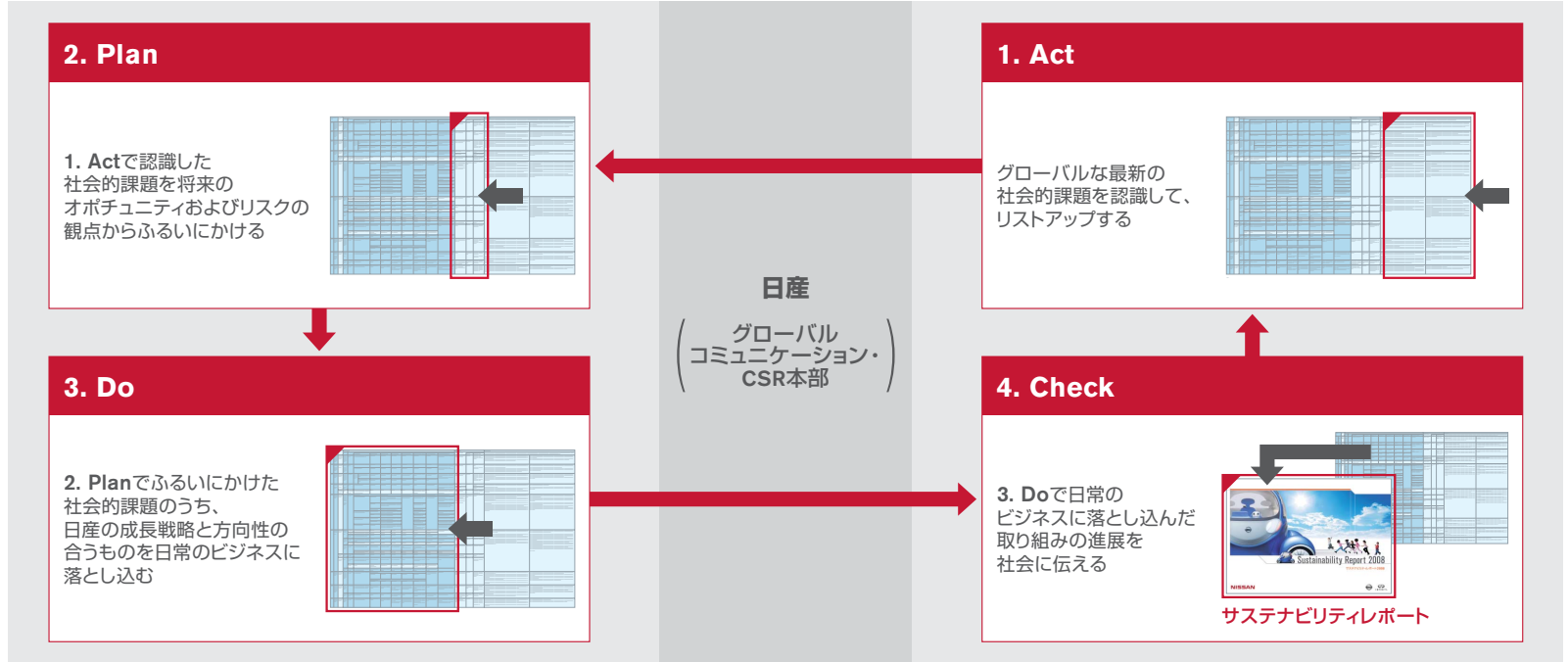
その骨格は、以下のPDCA (Plan-Do-Check-Act：計画、実施、評価、改善) で構成されています。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
日産独自のCSR推進手法「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダーエンゲージメント2007	031
事業活動報告・コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考えるサステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

このPDCAサイクルと管理の流れが合うように設計しているのが、先述した日産のCSR推進管理ツール「CSRスコアカード」です。

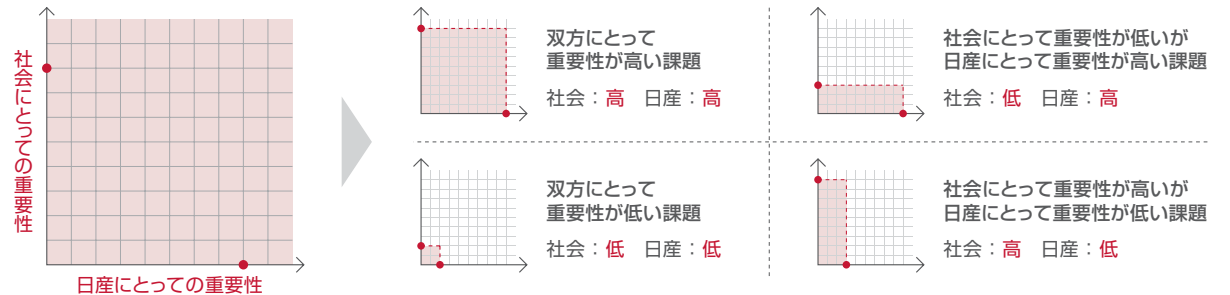
### PDCAサイクルとCSRスコアカードのリンク



オポチュニティとリスクの芽をふるいにかけるにあたっては、昨今、専門家間で頻繁に議論されている「マテリアリティ」の概念を導入し、分析を行っています。

### 日産のマテリアリティ分析

社会と日産にとっての重要性の高低を指標とし、オポチュニティとリスクの芽を分析します。縦軸と横軸のバランスがとれていて面積が大きいほど、優先度が高く重要な課題となります。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
<b>日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」</b>	<b>012</b>
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## PDCAサイクルを回転させた実例を積み上げる

今後私たちが目指していくのは、19ページのPDCAサイクルを回転させた実例を積み上げ、日産CSRマネジメントウェイの骨格に、実例という肉付けを行っていくことです。実際に、このPDCAサイクルを何度も回転させて進展を図ってきた事例のひとつである「CSR調達」を具体的に紹介します。

CSRに配慮した調達を求める声が従来より社会で高まってきている中で、日産では、関係役員間でのディスカッション、CSR ステアリング コミッティの全体会議や購買部門を中心としたサブコミッティでの検討、社外有識者との意見交換など、さまざまな議論を重ねてきました。そのうえで、世界中の1次取引先とCSR視点を盛り込んだ調達ビジョンの共有を図るなど、徐々に日常のビジネスに具体的な施策を落とし込んできました。

2008年1月、その流れを大きくまとめる形で、主要な1次取引先200社・約300名の方々に対し、日産が目指すCSR調達について、本格的に展開を開始しました。2008年度以降は、この展開を踏まえた具体的な施策を推進し、サプライチェーンにおけるCSRマネジメントの充実を図っていきたく考えています。

## 日産CSRマネジメントウェイの骨格づくりのためにさまざまな社内・社外活動を実施

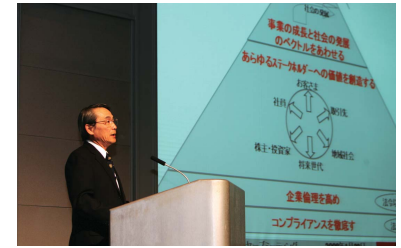
2007年度は、日産CSRマネジメントウェイの骨格づくりのために、社内マネジメント軸と社外コミュニケーション軸の両軸において、さまざまな活動を行いました。そのうちのいくつかを以下にご紹介します。

### 社内マネジメント

2007年7月	2007年度上期 CSR ステアリング コミッティを開催
2007年9月 —10月	CSR ステアリング コミッティ全メンバーを対象に CSR自己診断プログラムを実施
2007年10月	日産テクニカルセンターの製品開発本部と意見交換会を開催
2007年10月	日立製作所自動車事業部門のCSR ステアリング コミッティと 意見交換会を開催
2007年12月	第3回環境アドバイザー・ミーティングを開催
2007年12月 —2008年2月	CSR ステアリング コミッティの全メンバーを対象に 社会要請重要度分析を実施
2008年1月	購買部門と共催でCSR調達に関するサプライヤーミーティングを開催
2008年3月	2007年度下期 CSR ステアリング コミッティを開催
2008年3月	「ニッサン・グリーン調達ガイドライン」に関する サプライヤーミーティングを開催

### 社外コミュニケーション

2007年5月 —2008年1月	ロシア・サンクトペテルブルグ大学、青山学院大学、早稲田大学で 日産CSRマネジメントウェイについて講演
2007年6月	サステナビリティレポート2007を発行、CSRスコアカードの公開を開始、 株主総会でCSRパネル展を実施
2007年8月	日産CSRマネジメントウェイに関するメディア懇談会を開催
2007年8月 —9月	欧州の有力格付機関へプレゼンテーションを実施、 日産CSRマネジメントウェイをPR
2007年10月	米国の有力格付機関へプレゼンテーションを実施、 日産CSRマネジメントウェイをPR
2007年10月 —2008年3月	経済同友会のCSR委員会（日産の高橋忠生副会長が副委員長を務める） で日産CSRマネジメントウェイを紹介
2008年1月	エグゼクティブ・コミッティのメンバーがダボス会議に参加
2008年3月	志賀COOが個人投資家向けのCSRパネルディスカッションに参加



1月：CSR調達に関する  
サプライヤーミーティング



3月：「ニッサン・グリーン調達ガイドライン」  
に関するサプライヤーミーティング

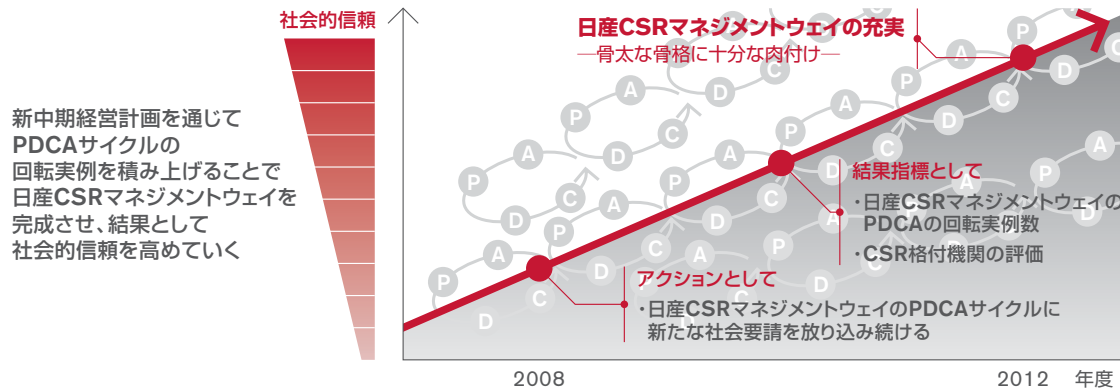
はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
<b>日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」</b>	<b>012</b>
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 新中期経営計画「日産GT 2012」期間中のCSR発展計画

2008年5月、日産は2008年から2013年まで実施する新5ヵ年経営計画「日産GT 2012」を発表しました。「日産GT 2012」のGは成長(Growth)、Tは信頼(Trust)を意味しています。日産は、今後の会社の成長と、モビリティ社会の持続可能な発展に寄与するという私たちが目指す姿の両立を、より長期的な展望で追求していきます。

「日産GT 2012」の期間においては、日産CSRマネジメントウェイのPDCAサイクルの回転実例を積み上げていきます。それにより、日産CSRマネジメントウェイの骨格に、PDCAサイクルの回転実例という肉付けを行い、実例をともなったCSR推進手法の完成を目指していきます。CSR進展の確認指標には、「目標ではなく結果としての指標」として、「PDCAサイクルの回転実例数」「格付機関の評価など社会の声の変化」などを設定していきます。

### PDCAサイクルの積み上げと社会的信頼の醸成(イメージ)



このようなプロセスを経て、PDCAの回転実例を豊富にともなった日産独自のCSR推進手法「日産CSRマネジメントウェイ」を構築し、ひいては社会の発展の方向性とベクトルを合わせた、社会から信頼され続ける企業を目指していきます。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## CSR ステアリング コミッティ議長からのメッセージ



日産自動車株式会社  
グローバルコミュニケーション・CSR本部  
執行役員

サイモン スプロール

今年のサステナビリティレポートは、日産のCSR活動を進展させるうえで、またひとつ重要な節目となります。2007年版のレポートで、私たちは「CSR重点9分野」の全社的な進捗度を示す「CSRスコアカード」を初めて公表しました。CSR ステアリング コミッティの議長である私の責務は、この9分野においてステークホルダーの皆さまへの責任を確実に果たすようにすることです。昨年来の取り組みで、程度の差はあるものの、すべての分野で進展があったことを皆さまにご報告いたします。今年も2009年に向けて目標を更新したCSRスコアカードを公開していますので、ぜひご覧ください。

私たちは、積極的な情報開示によって皆さまとの信頼関係をさらに強めていきたいと考えています。今年5月に発表した新5ヵ年経営計画「日産GT 2012」はそうした決意を表明したもので、名称のGが成長 (Growth)、Tが信頼 (Trust) を表すとおり、日産と社会が直面する重要課題に対する新たな道筋を示しています。

自動車産業の先行きは不透明です。燃料や原材料価格が高騰し、先進国市場の需要が減退する一方、新興国市場では自動車への関心が高まっています。インドや中国で自家用車を求める消費者が増える中、環境に大きな負荷をかけずにこうした状況に対応するためには新たな解決策を探る必要があります。日産は、ゼロ・エミッション車の量販が求められる時代の到来を感じています。このため、私たちは2010年度に電気自動車を投入し、2012年度には世界中に提供する計画を打ち出しました。これは日産にとって大きな転換へのスタートとなります。

日産は、いつでも自発的にCSRを進めてきました。私たちは自らの事業目標に皆さまの意見やニーズを取り入れ、双方にとって有益な結果を出すことを目指しています。日産のCSR活動がすべての分野において最良とは申し上げません。私たちは潜在的な課題にも積極的に対処しつつ、事業活動から得られた利益をステークホルダーの皆さまに引き続き還元していくよう努力いたします。

本レポートが皆さまにとって興味深く、有意義な情報となれば幸いです。ご意見・ご感想もお待ちしております。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
<b>日産CSR重点9分野</b>	<b>024</b>
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## Nissan's Approach to CSR

### 日産CSR重点9分野

誠実	品質	安全
経済的 貢献	環境	バリュー チェーン
ブランド	社員	社会貢献

#### 日産CSR重点9分野

「CSR ステアリング コミッティ」では、「CSRスコアカード」を管理ツールとして、「CSR重点9分野」ごとの活動の進捗状況を確認し、レビューを行っています。ここでは、重点9分野の各オーナーが語る「2007年度実績のポイント・2008年度計画の課題」をご紹介します。

#### CSR重点9分野のオーナーからのメッセージ

**誠実**



コンプライアンス事務局  
(人事部  
報酬・労務担当部長)  
**上野 敏夫**

コンプライアンス違反の防止を目指し、第1ステップとして日産グループ全体のグローバルなコンプライアンス体制や規範の整備などの活動を積極的に推進してきました。次のステップでは、経営トップを含めた社員一人ひとりへの規範のさらなる浸透を図ります。2008年度の目標は、コンプライアンス違反未然防止活動の評価システムをグループ・グローバルに導入し、活動内容を定量的に評価しながら、その質の向上に努めることです。これにより、コンプライアンス違反案件がタイムリーに報告され、適時的確に対応されることで、コンプライアンス違反を未然に防ぐ体制が強化されることを目指します。

**経済的貢献**



執行役員  
(IR部、財務部担当)  
**田川 丈二**

日産は、新中期経営計画「日産GT 2012」において、社内目標としてフリーキャッシュフローを管理指標に掲げました。今までも営業利益率や投下資本収益率(ROIC)などで、経済的貢献を確かなものにするように活動してきましたが、フリーキャッシュフローは、より広範囲に企業活動の成果が反映され、社内でも各地域や各機能の目標としてブレイクダウンしやすいというメリットがあります。比率ではなく金額ですので、今後の社会貢献への投資や配当、また成長市場やセグメントへの投資の原資としての目標管理も行いやすくなります。こうした活動をさらに充実させ、ステークホルダーの信頼とともに、長期的な成長を目指していきたいと考えています。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
<b>日産CSR重点9分野</b>	<b>024</b>
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## ブランド



ブランドマネジメント  
オフィス  
次長  
奥田 飛功

2007年度は、NISSANとインフィニティの2つのブランドについて、それぞれの存在意義とお客さまに提供する具体的な価値を明確に定義しました。そして、その価値を商品企画やデザインという上流工程から、日産ファンを増やすためのコミュニケーションという下流工程まで、一貫して行うための仕組みを確立しました。2008年度は、新中期経営計画「日産GT 2012」の大事な初年度になりますので、全世界の日産社員がブランドを理解し、高いモチベーションと志を共有することによって、確実にこの仕組みを実行に移してしていきたいと考えています。

## 品質



トータル カスタマー  
サティスファクション本部  
部長  
若林 彰

すべてのお客さまに心からのご満足を提供する誠実なブランドであり続けたい—そんな想いを実現するため、日産は新中期経営計画「日産GT 2012」のコミットメントのひとつに、「品質領域でリーダーになること」を掲げました。商品魅力、製品、営業・サービス、マネジメント、それぞれに最高の品質を実現します。2007年度は社内にて7つのクロスファンクショナルなNEP (Nissan Excellence Program) チームを立ち上げ、先行して活動を進めてきました。2008年度はさらに同活動を加速するとともに、2007年度にフル稼働を開始した全世界4拠点のフィールド・クオリティ・センターを最大限に活用し、品質改善をスピードアップします。リコールやサービスキャンペーンに対しても、引き続き透明性を持って迅速に対応します。

## 環境



企画室  
グローバル環境  
企画オフィス  
次長  
岩本 和明

2006年12月に「ニッサン・グリーンプログラム2010」を発表し、2007年度は3つの重要課題「CO<sub>2</sub>排出量の削減」「エミッションのクリーン化」「資源循環」について成果を公表できました。2008年度は、7月開催のG8北海道洞爺湖サミットにおいてCO<sub>2</sub>排出量の削減が主要テーマになるなど、ますます気運が高まっています。その中で、新中期経営計画「日産GT 2012」において、ゼロ・エミッション車で世界のリーダーになることを宣言しました。その挑戦は容易ではありません。しかしながら、私たち日産は、低炭素社会の実現に向けて、クルマと事業活動に関わるあらゆる段階においてCO<sub>2</sub>排出量の削減を着実に革新的に推進していきます。

## 社員



人事部  
人事企画担当部長  
高橋 利明

日産にとって人財はもっとも重要な財産です。人財の能力が最大限に発揮されるよう、日産はダイバーシティ(多様性)を推進するとともに、教育・研修をはじめとした人事施策の実践とマネジメント力の向上を通じた自律的なキャリア形成をサポートします。この土台となるのは「日産ウェイ」のコアメッセージ「The power comes from inside (すべては一人ひとりの意欲から始まる)」の実践であり、社員一人ひとりの意欲こそが持続的な成長の源泉です。そして「日産ウェイ」の浸透度合いや社員のモチベーション、上司のマネジメントレベルについては、継続的に社員意識調査で測定・分析し、改善を図っていきます。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
<b>日産CSR重点9分野</b>	<b>024</b>
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 安全



環境・安全技術渉外部  
部長  
長谷川 哲男

前年度同様、2015年に日産車が関わる交通事故における死亡・重傷者数の半減（1995年比）を目指し、クルマ、人、社会面から総合的な安全向上に向けた活動を継続しています。2007年度は、事故の未然防止に寄与する世界初の先進技術「ディスタンスコントロールアシスト（インテリジェントペダル）」（日本）、「レーンデパーチャープリベンション」（米国）などを市場に導入しました。また、より多くの皆さまにシートベルトを快適に着用いただく技術も実用化しました。今後も、クルマが人を守る「セーフティ・シールド」という考え方に基づき、安全に寄与する技術の導入と、安全意識向上の啓発活動を融合させ、より安全なクルマ社会の創造を目指した活動を行ってまいります。

## バリューチェーン



購買管理部  
主管  
上原 成司

購買部門では、サプライヤーと共有する価値理念を規定し、2005年度に「The Renault-Nissan Purchasing Way」というブックレットにまとめ、グローバルレベルでサプライヤーに展開しました。CSR調達の理念は、CSRは企業の利益ある持続的成長に不可欠な要素であり、サプライチェーン全体のCSRがお客さまへ価値提供をするうえで重要であり、CSR順守は調達活動のQCD達成の大前提ととらえています。サプライヤー選定プロセスにおいて、CSR視点の対応を確認するとともに、2007年度にはサプライヤー説明会を実施し、あらためてCSRへのいっそうの理解を深めてきました。これらを通じて、CSRの理念が浸透し、サプライヤーと一体となったCSRマネジメントが確立されることを期待しています。

## 社会貢献



グローバルブランド  
コミュニケーション部  
部長  
野口 恭平

日産では「人々の生活を豊かに」というビジョンのもと、「教育への支援」「環境への配慮」「人道支援」の3つの領域を中心に、企業市民としての活動を行っています。2007年度は、前年度に立ち上げた「社会貢献 ステアリング コミッティ」を通じて、グローバルな一貫性やベストプラクティスの共有をさらに一歩前進させました。日本国内では、神奈川県地域の小学生を対象に、モノづくりの楽しさを体験してもらう独自のプログラム「日産モノづくりキャラバン」を新たに立ち上げました。このプログラムは、他の事業所への拡大を計画しています。これからも、グローバルな考え方と各地域に最適な活動のバランスをとりながら、日産らしい社会への貢献を推進していきます。

## CSR ステアリング コミッティ事務局からのメッセージ



広報・CSR部  
課長  
菅 慶太郎

2007年度は、2006年度に社内外で議論を深めて体系化した日産のCSRを社会に伝えていく年と位置づけ、サステナビリティレポート上でCSRスコアカードの一般公開を開始しました。また、日産独自のCSR推進手法「日産CSRマネジメントウェイ」の構築に向けて、その骨格を形づくる年となりました。「日産CSRマネジメントウェイ」の骨格の真髄は、「社会の声に耳を傾け、オポチュニティとリスクの芽を見出す」ことです。CSR ステアリング コミッティを軸にPDCAサイクルを回し続けることで、社会の発展の方向性とベクトルを合わせた、信頼され続ける企業となることを目指していく所存です。



## 日産CSRスコアカード(1)

「CSR ステアリング コミッティ」では、「CSRスコアカード」を管理ツールとして、「CSR重点9分野」ごとの活動の進捗状況を確認し、レビューを行っています。ここでは、「CSRスコアカード」のうち、日産が現在実行している事業活動の価値観や管理指標についてご紹介します。

誠実	品質	安全
経済的貢献	環境	バリューチェーン
ブランド	社員	社会貢献

日産CSR重点9分野

[ 2007年度目標に対する達成度 ] ◎：達成 ○：ほぼ達成 △：未達成 —：未集計

フォーカスアイテム	重点活動(価値)	適用範囲	進捗確認指標例	2005年度実績	2006年度実績	2007年度目標	2007年度実績	2008年度目標	長期ビジョン
<b>誠実</b> 公平・公正を旨とし、社員は日産グローバル行動規範に則って、事業を営むあらゆる場所で倫理的に行動します	コンプライアンス違反案件が確実に報告される仕組みの確立	連結会社	世界全地域のコンプライアンス組織の整備と行動規範の展開	86.0%完了	97.8%完了	100%完了を目指す	◎ 100%完了	コンプライアンス違反未然防止活動の評価システムをグループ・グローバルに導入し、今後の活動の定量的な目標を設定	グローバルにコンプライアンス違反未然防止の仕組み(プロセス)が機能している
<b>経済的貢献</b> 持続的な利益ある成長を目指します。そして社会全体の経済的発展にも貢献します	中期経営計画「日産バリューアップ」の実行によるステークホルダーへの価値創造と社会への貢献	連結会社	売上高営業利益率(%) 2008年度からは売上高を記載	9.2% (トップレベル)	7.4% (トップレベル)	グローバルな自動車業界の中でトップレベルの営業利益率を維持する	◎ 7.3% (トップレベル)	「持続的な利益ある成長」 中期経営計画「日産GT 2012」期間中、5年間平均で売上高を5%増大 2008年度売上高：-4.4%を計画(前年度比)	持続的な利益ある成長を果たす。そして、お客さま、株主、社員、ビジネスパートナー、地域社会といったあらゆるステークホルダーに、長期的な価値を提供し続ける
			株式配当(円/株)	29円/株	34円/株	40円/株	◎ 40円/株	42円/株	
<b>ブランド(コーポレートブランド)</b> 人、環境、そして事業を営む地域社会への配慮で知られる、信頼されるブランドを創造します	ステークホルダー意識におけるブランドの価値向上	世界中のお客さま(右は日本のケース)	日経「企業イメージ調査」のCSR関連指標(一般個人) 「信頼性がある」という指標 社内の独自ブランド管理指標を通じて間接的に参照 「社会の変化に対応できる」という指標	33.7点 約1,000社中31位	36.1点 約1,000社中29位	信頼性の構築を図り、スコアのさらなる向上を目指す	△ 28.6点 約1,000社中86位	信頼性の構築を図り、スコアのさらなる向上を目指す	本指標を、社会が求める価値がどれだけ企業活動に反映できているかを測定する外部指標のひとつとして位置づけ、継続的かつ安定的なスコアの上昇を目指す
				15.6点 約1,000社中2位	14.5点 約1,000社中7位	市場が求める価値を事業活動に迅速に反映し、スコアのさらなる向上を目指す	△ 10.2点 約1,000社中39位	市場が求める価値を事業活動に迅速に反映し、スコアのさらなる向上を目指す	
<b>品質</b> 世界で高品質が認められる製品やサービスを創造します	お客さまに安心してお使いいただくための品質である「当たり前品質」	連結会社(右は米国のケース)	外部調査機関によるお客さまへの新車初期品質調査結果	NISSAN系：12位 インフィニティ系：7位 2005年より調査内容が変更された	NISSAN系：19位 インフィニティ系：9位	該当するカテゴリにおいて、さらなる順位の向上を目指す	◎ NISSAN系：19位 インフィニティ系：2位	該当するカテゴリにおいて、さらなる評価の向上を目指す	国や地域ごとのマーケットで公開される、お客さまの購入動機にもっとも影響のある外部品質指標(インフルエンシャル・インジケーター)でリーダーを目指す

## 日産CSRスコアカード(2)



[ 2007年度目標に対する達成度 ] ◎：達成 ○：ほぼ達成 △：未達成 —：未集計

フォーカスアイテム	重点活動(価値)	適用範囲	進捗確認指標例	2007年度実績	2008年度目標	2010年度目標(NGP2010)
<b>環境</b> クルマのライフサイクルから生じる環境負荷を低減し、持続可能なクルマ社会の実現に貢献します	ニッサン・グリーンプログラム2010(NGP2010)の実行・推進	グローバル	CO <sub>2</sub> 排出量の削減	商品・技術分野 ◎ 商品・技術を導入：VVEL(バルブ作動角・リフト量連続可変システム)、7速AT、EURO4規制に適合したクリーンディーゼル(欧州)、「アルマーダFFV」(米国) ・CVT搭載車の2007年度グローバル販売台数が108万台 ・バイオ燃料普及を目指す「とかちE10実証プロジェクト」に参加 ・カーウイングス最適ルート検索とエコ運転アドバイスの組み合わせで「エコプロダクツ大賞 国土交通大臣賞」および「省エネ大賞 資源エネルギー庁長官賞」を受賞(日本)	NGP2010(右記)の確実な実行と達成	・各国燃費基準の着実な達成とさらなる燃費向上の推進 ・日産独自のシステムを搭載したハイブリッド車を、2010年度を目標に北米、日本で発売 ・2010年度に米国、日本に電気自動車を投入し、2012年度にはグローバルで量産 ・3リッターのガソリンで約100km走行できるクルマ(3リッターカー)を2010年に発売
				生産分野 ◎ グローバル台あたりCO <sub>2</sub> 排出量：10%減(2005年度比)	2010年度までに全工場から排出されるCO <sub>2</sub> を2005年比7%減(グローバル台あたりCO <sub>2</sub> 排出量)	
				販売・オフィス分野 ◎ 排出量を把握し、2008年度より開始するCO <sub>2</sub> マネジメントのスキームを確立	2007年度までに排出量を把握し、2008年度から管理を開始	
			エミッションのクリーン化(大気・水・土壌の保全)	商品・技術分野 ◎ 「平成17年基準排出ガス75%低減レベル適合車(SU-LEV)」の販売比率(ガソリン乗用車中)：85%以上を達成(日本)	生産分野 ○ 日本国内VOC排出量：4.2%減(2005年度比、ボディ+バンパー)	・各国の将来排気規制適合車の早期導入 ・大気並みにクリーンな排出ガスを目指した技術開発の実施
				資源循環(リデュース・リユース・リサイクルの推進)		生産分野 ○ 日産(国内4工場と1事業所)および連結製造会社3社で再資源化率100%を達成
			市場および販売会社におけるリサイクル活動の推進	市場および販売会社におけるリサイクル活動の推進 ○ リサイクル実効率：94.9%を達成(日本)	生産分野 ○ 日産(国内4工場と1事業所)および連結製造会社3社で再資源化率100%を達成	グローバル：各国で工場再資源化率ベストレベル 日本：工場再資源化率100%(日産および連結製造会社、日産算出基準による)
				マネジメント ◎ 対象をグローバルに拡大した「ニッサン・グリーン調達ガイドライン」を発行 ・環境e-ラーニング：日産自動車(株)社員受講開始、「日本e-Learning大賞 経済産業大臣賞」受賞 ・NECと電動車両用リチウムイオンバッテリー製造・開発・販売会社を設立 ・プロジェクト・ベター・プレイス社とルノー・日産アライアンスが初の量販電気自動車へ向けた準備を開始 ・クライメート・ディスクロージャー・リーダーシップ・インテックスに選定	生産分野 ○ 日産(国内4工場と1事業所)および連結製造会社3社で再資源化率100%を達成	グローバル：主要4市場でリサイクル実効率95%を目指す 日本：2010年度にリサイクル実効率95%達成(2015年法規を5年前倒しで達成)
			マネジメント	社会との協働	◎ 対象をグローバルに拡大した「ニッサン・グリーン調達ガイドライン」を発行 ・環境e-ラーニング：日産自動車(株)社員受講開始、「日本e-Learning大賞 経済産業大臣賞」受賞 ・NECと電動車両用リチウムイオンバッテリー製造・開発・販売会社を設立 ・プロジェクト・ベター・プレイス社とルノー・日産アライアンスが初の量販電気自動車へ向けた準備を開始 ・クライメート・ディスクロージャー・リーダーシップ・インテックスに選定	・ビジネスパートナーにおける環境マネジメント強化 ・事業活動全般における環境マネジメント強化 ・社員の環境マインド向上 ・他セクターと連動した総合的な取り組みの推進 ・環境情報の開示とステークホルダーとのコミュニケーションの充実

# 日産CSRスコアカード(3)



[ 2007年度目標に対する達成度 ] ◎ : 達成 ○ : ほぼ達成 △ : 未達成 — : 未集計

フォーカスアイテム	重点活動(価値)	適用範囲	進捗確認指標例	2005年度実績	2006年度実績	2007年度目標	2007年度実績	2008年度目標	長期ビジョン
<b>社員</b> 多様な人財が自らの成長を実感できる、魅力的な組織となることを目指します	学習する企業文化の醸成	日産自動車(株)	教育受講者満足度 年1回の教育受講者に対するアンケート。スコアは各教育における平均スコアのうちの最低のもの(5点満点)	4.0以上	4.0以上	社員一人ひとりの能力向上につながる教育の実施。教育受講者満足度の維持・向上	◎ 4.3以上	社員一人ひとりの能力向上につながる教育の実施。教育受講者満足度の維持・向上	学習する企業文化を醸成し、社員一人ひとりが自らの成長を実感できる組織の実現
	社員意識調査を踏まえたマネジメントの質およびモチベーションの向上	グローバル	Quality of ManagementおよびEmployee Motivationのスコア 社員意識調査における設問の肯定回答率	Quality of Management : 51% Employee Motivation : 55%	Quality of Management : 54% Employee Motivation : 55%	社員意識調査結果を反映した、経営の質の向上、および企業文化変革への取り組み推進。Quality of ManagementおよびEmployee Motivationのスコア向上	— 2007年度は未実施(次回サーベイは2008年5月予定)	社員意識調査結果を反映した、経営の質の向上、および企業文化変革への取り組み推進。Quality of ManagementおよびEmployee Motivationのスコア向上	マネジメントの質を向上させ、社員の意欲を引き出し、向上させる組織の実現
	自律的キャリア開発サポート	日産自動車(株)	オープンエントリー制度とシフトキャリア制度の合格者数 オープンエントリー制度：ポストの募集があれば自ら自由に応募できる制度 シフトキャリア制度：ポストの募集有無に関係なく、自ら自由に希望する部署や職種に応募できる制度	96名 (オープンエントリー制度+シフトキャリア制度)	111名 (オープンエントリー制度+シフトキャリア制度)	オープンエントリー制度とシフトキャリア制度などを通じた適材適所の人財配置のいっそうの推進	◎ 121名 (オープンエントリー制度+シフトキャリア制度)	オープンエントリー制度とシフトキャリア制度などを通じた適材適所の人財配置のいっそうの推進	社員一人ひとりの自主性を重んじたキャリア形成の支援
	安心して働ける安全な職場を目指して	日産自動車(株)	労働災害全度数率 (全度数率=全災害件数÷延べ労働時間×100万)	0.26	0.24	0.27	○ 0.27	度数率0.27+重大災害ゼロ	安心して働ける安全な職場の構築と維持
	女性の能力活用を通じたダイバーシティの推進	グローバル	女性管理職比率	日本(日産自動車(株)) : 3% 北米・中南米 : 15% 欧州 : 7%	日本(日産自動車(株)) : 4% 北米・中南米 : 14% 欧州 : 10%	日本(日産自動車(株)) : 5% 北米・中南米 : モニタリング 欧州 : 11%	◎ 日本(日産自動車(株)) : 5% 北米 : 13% 欧州(主要拠点) : 11%	女性管理職比率の維持・向上	多様性によるお客さまへのより大きな価値の提供
	クロスカルチャーを通じたダイバーシティの推進	日産自動車(株)	外国籍社員比率	2006年度から集計開始	1%	多様なお客さまに、より大きな価値を生み出す組織の実現	○ 1%	1%	

# 日産CSRスコアカード(4)



[ 2007年度目標に対する達成度 ] ◎ : 達成 ○ : ほぼ達成 △ : 未達成 — : 未集計

フォーカスアイテム	重点活動(価値)	適用範囲	進捗確認指標例	2005年度実績	2006年度実績	2007年度目標	2007年度実績	2008年度目標	長期ビジョン
<b>安全</b> 技術の革新に加え、安全推進活動に積極的に取り組み、クルマ社会をより安全なものにしていきます	日産車に関わる交通事故死者数などの定量的低減目標値を設定し、リアルワールドでの事故分析をもとに、安全なクルマづくりと安全啓発活動の実施	日本、米国(右は日本のケース)	日産車に関わる交通事故における死亡・重傷者数の1995年比低減率  公共データをもとに算出するため、実績の把握は当該年度の約2年後	日本(日産自動車(株)): 34% (2005年1~12月)	日本(日産自動車(株)): 41% (2006年1~12月)	2015年半減に向けて、日産の安全の考え方「セーフティ・シールド」に基づき、安全技術の開発、実用化に取り組む	— 2007年1~12月の比率は、データが公表され次第算出	2015年半減に向けて、日産の安全の考え方「セーフティ・シールド」に基づき、安全技術の開発、実用化に取り組む	2015年に50%減少
<b>バリューチェーン</b> サプライチェーンのあらゆる段階において、倫理的で環境に配慮した行動がなされるよう促進していきます	日産・ルノーが尊重するバリュー、法令、規範の順守をサプライヤーに展開し共有	日産・ルノー共同購買会社*の世界中の全1次取引先サプライヤー  ※日産とルノーの年間合計購買額の83%を扱う(2007年度実績)	サプライヤーと共有する価値観・規範の展開プロセスおよび浸透度合い	価値観・規範をまとめたサプライヤー向けブックレットを発行し、日産・ルノー共同購買会社の世界中すべての1次取引先サプライヤーに展開	日産・ルノー共同購買会社の取引先サプライヤー選定時に、CSR視点のコミットメントを頂く仕組みを導入	サプライヤーから頂いたコミットメントをもとに、サプライヤーにおけるCSRの方針や体制を評価する評価項目を定め、ビジネスパートナーと一体となったCSRマネジメントの推進を開始	◎ ビジネスパートナーと一体となったCSRマネジメントの推進を開始(2008年1月、サプライヤーミーティングにおいて方針展開)	サプライヤーに対するCSR方針・考え方の浸透	サプライヤーへの浸透状況を踏まえたうえで、サプライヤーのCSR体制強化、取引契約への織り込みなどによりマネジメントの強化を図る
	グリーン調達活動を通じた、製品の環境負荷低減を推進	世界中の全1次取引先サプライヤー	日本でのグリーン調達基準に基づく納入部品の環境負荷物質把握活動の完了と、グローバルグリーン調達基準に基づく同活動の推進	日本のほぼ100%のサプライヤーと活動済み	グリーン調達活動のグローバルな展開に関し、展開準備を完了	グリーン調達ガイドラインを世界中の全1次取引先サプライヤーに順次展開	◎ 対象をグローバルに拡大した「日産・ルノーグリーン調達ガイドライン」を発行(2008年3月、日本においてサプライヤーミーティングで展開)	「日産・ルノーグリーン調達ガイドライン」を世界へ展開開始(①欧州②中国③米国の順に開始)	サプライヤーにおける環境負荷が目標値をもって削減され、ライフサイクルを通して日産車の環境負荷が低減される
<b>社会貢献</b> NGOとのパートナーシップなどにより、地域社会や人びとの繁栄に寄与します	日産の社会貢献活動方針の明文化、社内運営体制の整備および活動内容の充実	グローバル	日産の社会貢献活動方針、推進体制、社内各機能の役割の構築	グローバルな社会貢献活動方針を策定し展開	社内横断組織として「社会貢献ステアリング コミッティ」を設置、より有機的に連携した活動を開始	教育または環境をテーマとした日産独自のプログラムを確立	◎ 小学生を対象とした「日産モノづくりキャラバン」を開始(日本)	国や地域を超えた社会のニーズを把握し、統一的なプログラムの検討・実施	「教育への支援」「環境」「人道支援」の分野を中心に、グローバルな考え方と各地域に最適な活動のバランスをとりながら、日産らしい社会貢献プログラムを継続的に実施していく

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
<b>日産のCSR</b>	<b>011</b>
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
<b>ステークホルダー エンゲージメント2007</b>	<b>031</b>
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## Nissan's Approach to CSR

# ステークホルダー エンゲージメント2007

日産では、2007年度もステークホルダーの皆さまと対話する機会を設け、頂いたさまざまなご意見を各事業活動に生かしています。



### 株主の皆さまとの懇談会



2002年より、毎年定時株主総会終了後に、全役員が出席し株主懇談会を開催しています。株主の皆さまとオープンに意見交換できる場として定着しています。詳細は56ページ。  
(2007年6月20日、パシフィコ横浜にて実施)

### 社員との意見交換会



年間を通して、経営者層が社員と直接対話する場を設けています。また、経営者層が国内や海外拠点に出張した際にも、各拠点や工場の社員と意見交換を行っています。詳細は59ページ。

### 環境アドバイザー・ミーティング



学会、ビジネス界の第一線でグローバルに活躍する環境分野の有識者を招き、毎年開催しています。詳細は88ページ。  
(2007年12月、日産自動車(株)本社にて実施)

### サプライヤーミーティング



年間を通して、テーマごとにサプライヤーミーティングを開催しています。また、毎年7月には「グローバル サプライヤーアワード」の表彰式を行っています。詳細は69ページ。  
(2007年7月12日、東京にて実施)

### 販売会社社員との意見交換会



ゴーンCEO、志賀COOが販売会社を訪問する際は、販売会社社員(カーライフ・アドバイザー、テクニカル・アドバイザーなど)と商品やサービス、お客さま対応などについて、活発な意見交換を行っています。

### 中国自動車技術研究センター(CATARC<sup>※</sup>)との共同研究プロジェクト



日産(中国)投資有限公司と日産は、2005年7月から2年半にわたり、CATARCと「歩行者保護共同研究プロジェクト」を実施しました。詳細は123ページ。  
※中国の自動車国家研究機関



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
<b>事業活動報告・ コーポレートガバナンス</b>	<b>032</b>
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

Performance and Corporate Governance

## 事業活動報告・ コーポレートガバナンス

長期的な利益ある成長を目指して



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
<b>事業活動報告・ コーポレートガバナンス</b>	<b>032</b>
<b>2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」</b>	<b>033</b>
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」

### 成長と信頼を軸に目指す3つのコミットメント

#### 2007年度 決算概況

日本、米国の全体需要が落ち込む中で、日産の2007年度のグローバル販売台数は377万台に達し、前年から8.2%伸びました。2007年度はグローバルで11車種の新型車を投入しました。

日本では全体需要が5.3%減となり、日産の販売台数は前年比2.5%減の72万1,000台、市場占有率は13.6%に増加しました。米国の全体需要は前年から3.5%減少する一方で、日産は105万9,000台と前年から3%増加し、市場占有率は6.7%に達し、過去最高を記録しました。欧州の販売台数は前年比17.9%増の63万6,000台となり、市場占有率は2.9%に増加しました。一般海外市場の販売台数は、前年比22%増の106万1,000台に達しました。中東の販売台数は前年比36%増の19万8,000台を記録し、一方、中国の販売台数は全体需要が前年比22%増加する中で、同26%増の45万8,000台となりました。

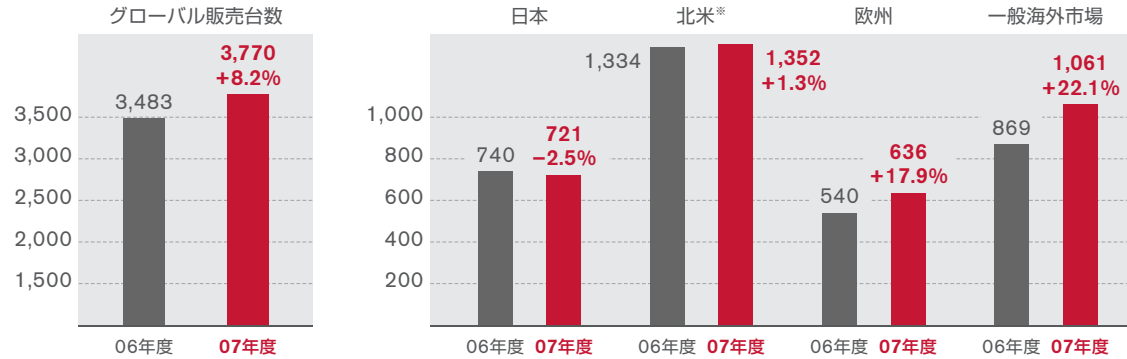
#### ■ 2007年度 財務実績(億円)

	2006年度	2007年度	差異
連結売上高	97,010	108,242	+11.6%
連結営業利益	7,555	7,908	+4.7%
連結売上高営業利益率	7.8%	7.3%	-0.5ポイント
営業外損益	-129	-244	-
経常利益	7,426	7,664	+3.2%
特別損益	-608	+16	-
当期純利益	4,492	4,823	+7.4%
設備投資	5,090	4,289	-
研究開発費	4,648	4,575	-
減価償却費	3,561	3,709	-
実質手許資金(自動車事業)	2,547	1,803	-

2007年度 為替レート ¥114.4/\$  
¥161.6/€

- はじめに 001
- CEOメッセージ 002
- CSR対談 006
- 日産のCSR 011
  - 日産独自のCSR推進手法「日産CSRマネジメントウェイ」 012
  - 日産CSR重点9分野 024
  - 日産CSRスコアカード 027
  - ステークホルダーエンゲージメント2007 031
- 事業活動報告・コーポレートガバナンス 032**
  - 2007年度決算概況・新中期経営計画「日産GT 2012」 033**
  - コーポレートガバナンス 038
  - ステークホルダーへの価値の向上 046
    - お客さまのために 047
    - 株主・投資家の皆さまとともに 055
    - 社員とともに 058
    - ビジネスパートナーとともに 067
    - 社会とともに 073
  - 地球環境の保全 083
  - 安全への配慮 114
  - 社員一人ひとりが考えるサステナビリティ 126
  - パフォーマンスデータ 132
  - 事業等のリスク 134
  - 第三者意見書 135

■ 2007年度 販売状況(千台)



※カナダ、メキシコを含む

2007年度の業績を前年度と比較するにあたり、2006年度に実施した、主に欧州やメキシコなどの海外子会社の会計期間を統一したことにともなう一時的な第5四半期の影響を2006年度実績から除いています。

2007年度の連結売上高は10兆8,242億円となり、前年から11.6%増大しました。連結営業利益は7,908億円となり、2006年度の7,555億円に対し、4.7%上回りました。売上高営業利益率は7.3%、当期純利益は4,823億円となり、2006年度の4,492億円から7.4%増加しました。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
<b>事業活動報告・ コーポレートガバナンス</b>	<b>032</b>
<b>2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」</b>	<b>033</b>
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

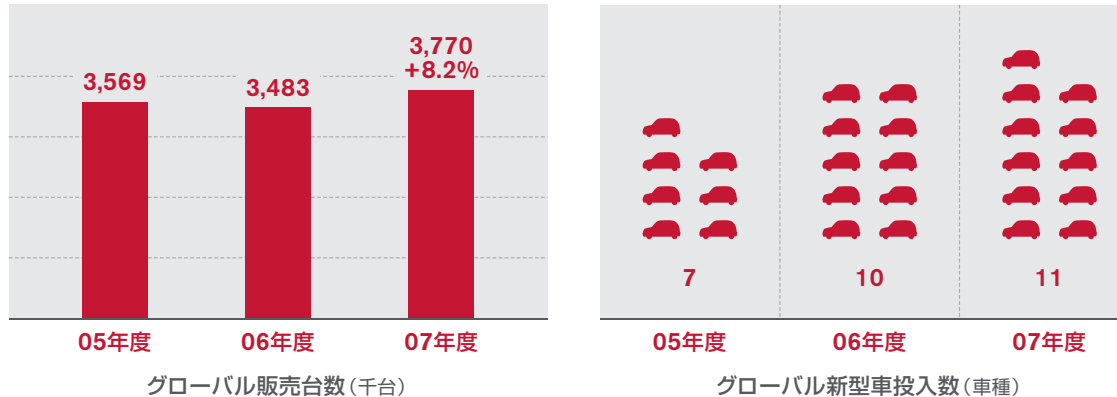
## 「日産バリューアップ」の進捗状況

日産の中期経営計画である「日産バリューアップ」には、3つのキー・コミットメントがあります。

1. 2005年度から2007年度にかけ、グローバル自動車業界の中でトップレベルの売上高営業利益率を維持する
2. 2008年度に販売台数420万台を達成する
3. 3年間平均で投下資本利益率20%を確保する

また、「日産バリューアップ」では4つの主要なブレークスルーを目指しています。

1. インフィニティを世界で名立たるラグジュアリー・ブランドにする
2. 小型商用車(LCV)のプレゼンスをグローバルに強化する
3. リーディング・コンペティティブ・カントリー(競争力のある国々)からの部品、機械、設備、ベンダー・ツーリング(取引先の型、治工具)、サービスの新たな調達ソースを確立する
4. 新興国での新しい生産設備、流通網、販売金融会社を整備することで地理的拡大を強化する



「日産バリューアップ」の1つ目のコミットメントは、グローバル自動車業界トップレベルの営業利益率の達成でした。実績は当初の期待には届かなかったものの、引き続き業界最高水準の収益性を確保しています。2つ目のコミットメントはグローバル販売台数420万台の達成でしたが、2007年に発表したとおり、達成時期を2009年度末に延期し、次期経営計画の通過点における指標のひとつとしました。3つ目の投下資本利益率(ROIC)\*は17%にとどまり、3年間平均で20%以上を達成するというコミットメントには届かなかったものの、グローバル自動車業界トップレベルの数字を維持しました。

$$\text{※ROIC(自動車事業)} = \frac{\text{連結営業利益}}{\text{(固定資産+運転資金)}}$$



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
<b>事業活動報告・ コーポレートガバナンス</b>	<b>032</b>
<b>2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」</b>	<b>033</b>
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 新中期経営計画「日産GT 2012」

日産が2008年4月1日から2013年3月31日まで実施する新たな5ヵ年経営計画「日産GT 2012」は、成長（Growth）と信頼（Trust）を主眼としています。すべてのステークホルダーの信頼とともに、長期的な成長を目指すことに焦点を当てています。

「日産GT 2012」には、3つのコミットメント、そしてそれらを支える5つのブレークスルーが含まれます。

## 3つのコミットメント

## 1. 品質領域でリーダーになる

商品品質に注力するとともに、サービスの質、ブランドの質、およびマネジメントの質における改善への取り組みを加速する。

## 2. ゼロ・エミッション車でリーダーになる

日産は、2010年度に米国および日本に電気自動車を投入し、2012年度にはグローバルに量産する予定である。

## 3. 2008年度から2012年度の5年間で売上高を平均5%増大させる

売上高の増加を支える商品投入計画では、2012年度までに60の新型車の発売を予定している。また、2009年度から毎年15以上の新技術を投入する予定である。

上記3つのコミットメントは、以下の5つのブレークスルーによって支えられます。

- ・品質領域でリーダーになる
- ・ゼロ・エミッション車でリーダーになる
- ・事業の拡大：インフィニティ、小型商用車（LCV）、および新規投入するグローバル・エントリー・カー
- ・市場の拡大：インド、中東、ブラジル、ロシア、および中国
- ・コスト領域におけるリーダーになる

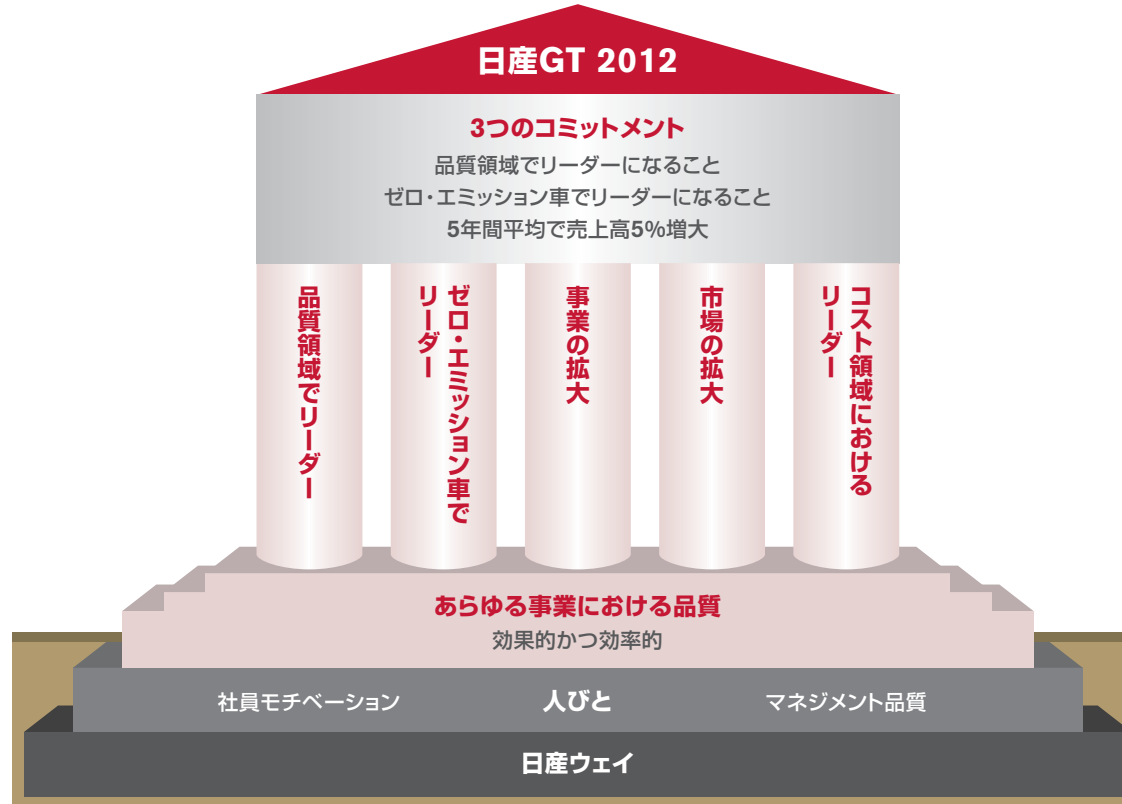
「日産GT 2012」は、日産が持続可能なモビリティ社会の実現において、主要な役割を果たすという決意を示すものです。また、グローバルな市場の拡大と地球環境の保護は、バランスをとっていくことが求められています。日産は、ゼロ・エミッションのクルマを手ごろな価格で量販することこそが、自動車メーカーとして実行できるもっとも重要な取り組みであると確信し、ルノーとともにゼロ・エミッション車におけるリーダーとなることを目指していきます。



NISSAN GT 2012

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
<b>事業活動報告・</b> <b>コーポレートガバナンス</b>	<b>032</b>
<b>2007年度決算概況・</b> <b>新中期経営計画「日産GT 2012」</b>	<b>033</b>
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

■ 5つのブレークスルー



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
<b>事業活動報告・ コーポレートガバナンス</b>	<b>032</b>
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
<b>コーポレートガバナンス</b>	<b>038</b>
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## コーポレートガバナンス

### 事業活動のあらゆるレベルで 透明性を確保し、企業価値を創造

経営の透明性を確保したコーポレートガバナンス（企業統治）の充実は、日産のCSR推進において要となる取り組みです。私たちはCSRをより実効性のあるものとするため、経営陣の責任を明確にした経営目標や経営方針をステークホルダーに向けて公表し、その達成状況や実績をできるだけ早く開示しています。日産は、社会的責任を果たす経営体制を高いレベルで維持し、経営者層と社員、日産と社会の相互の透明性を保ち続け、ステークホルダーとの信頼関係を築いていきたいと考えています。

#### 日産ウェイ

##### 独自の企業文化が育んだ行動指針「日産ウェイ」

異文化共生・多様性（ダイバーシティ）を実現しながら価値を創出する独自の企業文化こそ、日産の自動車メーカーとしての強みです。日産とルノーのアライアンス（提携）に基づく相互作用が、ボーダーレス時代にふさわしい経営哲学や「行動」「心構え」を生み出しています。その中核をなすのが「日産ウェイ」です。「日産ウェイ」は、私たちが復活の過程で実践してきた「クロスファンクショナル・クロスカルチュラル」や「コミット アンド ターゲット」などからなる、利益ある持続的な成長を確かなものとするための行動指針です。

##### 一人ひとりの意欲が生み出す、持続的成長と企業価値

「日産ウェイ」は、2006年度よりグローバルに共有化し、すべての社員が実践できるよう、日本語、英語、フランス語、中国語、ドイツ語、スペイン語、オランダ語の7カ国語で書かれており、社員一人ひとりの行動指針となっています。基本はつねにお客さまに焦点を当て、お客さまから出発し、継続的に価値を創出しながら企業価値の向上を高める活動を行っていくことです。これらを実行するうえで、私たちは“The power comes from inside”「すべては一人ひとりの意欲から始まる」という考え方が大切であ



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
<b>事業活動報告・ コーポレートガバナンス</b>	<b>032</b>
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
<b>コーポレートガバナンス</b>	<b>038</b>
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

ると考えています。多様性を基本とした環境で、社員一人ひとりが異なる人びとや社会から学び、お互いの力を引き出し合い、連携を深め、さらなる進化を目指しています。

## 「すべては一人ひとりの意欲から始まる」

焦点はお客さま、原動力は価値創造、成功の指標は利益です。

### Mindset 心構え

- 1. Cross-functional, Cross-cultural**  
クロスファンクショナル・クロスカルチュラル  
異なった意見・考えを受け入れる多様性
- 2. Transparent** トランスペアレント  
すべてを曖昧にせず、分かりやすく共有化
- 3. Learner** ラーナー  
あらゆる機会を通じて、学ぶことに情熱を。学習する組織の実現
- 4. Frugal** フルーガル  
最小の資源で最大の成果
- 5. Competitive** コンペティティブ  
自己満足に陥ることなく、つねに競争を見据え、ベンチマーキング

### Actions 行動

- 1. Motivate** モチベート  
自分自身を含め、人のやる気を引き出していますか？
- 2. Commit & Target** コミット アンド ターゲット  
自ら達成責任を負い、自らのポテンシャルを十分に発揮していますか？
- 3. Perform** パフォーマンス  
結果を出すことに全力を注いでいますか？
- 4. Measure** メジャー  
成果・プロセスは誰でも分かるように測定していますか？
- 5. Challenge** チャレンジ  
競争力のある変革に向けて継続的に挑戦していますか？

## 内部統制システム・コンプライアンス

### 公正で透明性のある企業活動を維持する内部統制システム

日産は、社内外に対して透明性の高い経営を重視するとともに、明確なコミットメントを達成するために、一貫性のある効率的な経営を目指しています。この基本理念のもと、取締役会では、会社法に定める内部統制システムおよびその基本方針を決議しました。取締役会はその責任において、体制と方針の実行状況を継続的に注視するとともに、必要に応じて変更・改善を行っています。また、内部統制全般について担当する役員を置いています。

日産では、監査役制度を採用しています。監査役は、取締役会への出席のほか、取締役などから職務状況の聴取などを行い、取締役の職務執行全般にわたり監査をしています。また、定期的に会計監査人から監査の計画および実施結果の報告を受けるとともに、意見交換を行い、その妥当性を判断しています。同様に、内部監査部署からも定期的に報告を受け、監査の参考としています。





はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
<b>事業活動報告・ コーポレートガバナンス</b>	<b>032</b>
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
<b>コーポレートガバナンス</b>	<b>038</b>
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 法令を順守し、倫理的な企業活動を行うための枠組み

すべての社員が高い倫理観を持ってコンプライアンス（法令順守）を実践することが、CSR推進の土台です。日産は2001年に、日産グループすべての社員がどのように行動すべきかを「日産グローバル行動規範」として定め、グローバルに展開しています。さらに、「グローバルコンプライアンス委員会」を組織して法令・倫理順守機能を高め、違法行為や非倫理的行為を未然に防ぐ体制を構築。日本、北米・中南米、欧州、一般海外地域など各拠点の委員会が連携してコンプライアンスの維持・推進に努めています。

### 日産グローバル行動規範

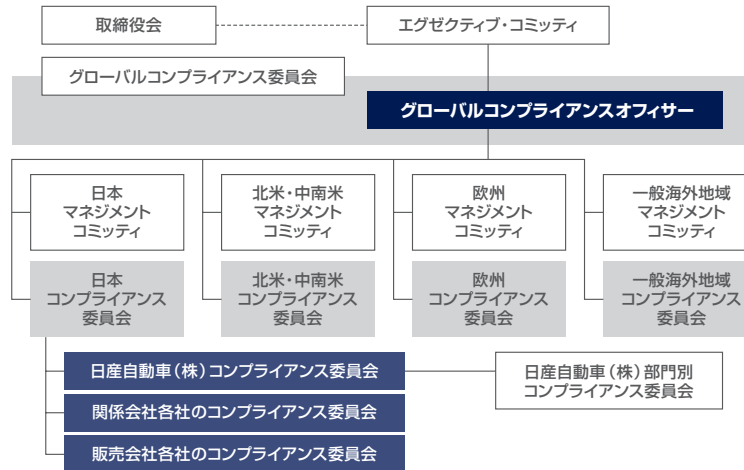
#### 信条

私たちは、お客さま・従業員・株主・取引先・地域社会に対し、つねに実直・誠実・公正・敬意の姿勢を持って接します。下記行動規範は、日産グループに働くすべての従業員に適用となります。また、われわれ一人ひとりはこの行動規範をしっかりと維持・改善していく責任があります。

#### グローバル行動規範（抜粋）

1. 法律・ルールの順守
2. 利益相反行為の禁止
3. 会社資産の保護
4. 公平・公正な関係
5. 透明性と説明責任の確保
6. 多様性の尊重と機会平等
7. 環境保護
8. 実践・報告の義務

### グローバルコンプライアンス委員会組織



責任者であるグローバルコンプライアンスオフィサーの統括のもと、各地域ごとのコンプライアンス委員会を設置しています。内部監査や社内からの通報などにより問題の早期発見に努めるとともに、問題の解決、行動規範のさらなる整備や啓発活動を行っています。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
<b>事業活動報告・ コーポレートガバナンス</b>	<b>032</b>
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
<b>コーポレートガバナンス</b>	<b>038</b>
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 行動規範浸透に向けた啓発活動を推進

日産は、各地域ごとにコンプライアンス施策を進める担当部署と推進責任者を配置し、コンプライアンスへの意識を高める活動を推進しています。また、すべての社員が行動規範を理解し、透明かつ公正な判断を確実なものとするための教育を重視しています。

日本では、役員を含めたすべての社員を対象に、2004年4月に制定した「日産行動規範（日本版）～わたしたちの約束～」についてe-ラーニングまたはVTRによる教育を行い、受講後には規範順守に関する誓約書への署名を求めるなど、周知徹底を図っています。また2007年度には、法改正などに対応すべく、行動規範の改定と全社員への再教育を実施し、コンプライアンスをさらに強化しています。

北米では法令順守の全社員教育を定期的実施し、欧州では各国共通のガイドラインを作成。一般海外地域でも、各国の事情を考慮したガイドラインを作成して周知を進めています。グループ各社でも同規範を基準とした行動規範を導入しています。

また、「グローバル内部者取引防止管理規程」や「個人情報管理規程」などの社内規程を整備し、教育・研修プログラムを通じて、周知徹底と啓発を行っています。

## 企業倫理順守の風土づくりにオープンな仕組みを導入

日産は社内の自浄作用を高めるために、社員からの意見・質問・要望を会社に自由に伝える仕組みとして、内部通報制度「イージーボイスシステム」を採用しています。2006年4月に施行された公益通報者保護法に則した通報者保護の観点も織り込み、日本の日産グループ各社も導入しています。

## 独立した組織による効率的な内部監査を実施

日産の内部監査部署は、COO（最高執行責任者）直轄の独立した組織として国内内部監査室を設置し、日産および日本国内の連結子会社の業務執行に関する監査を実施しています。グローバルでは、各地域の統括会社に設置された内部監査部署が担当しており、具体的な監査活動をチーフインターナルオーディットオフィサー（CIAO）が統括することにより、グループ・グローバルに有効かつ効率的な内部監査を実施しています。



「日産行動規範（日本版）  
～わたしたちの約束～」

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
<b>事業活動報告・ コーポレートガバナンス</b>	<b>032</b>
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
<b>コーポレートガバナンス</b>	<b>038</b>
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 多様化するリスクに備えた管理体制

日産では、リスクを「事業目的の達成を阻害する要因」と定義し、リスクをいち早く察知・評価して必要な対策を検討・実行することにより、発生率の低減と発生した場合の被害を最小にとどめる努力をしています。

この目的の達成のため、日産とグループ会社は「グローバルリスク管理規程」に基づき行動しています。全社的なリスクマネジメントについては、エグゼクティブ・コミッティ（経営会議）の各メンバーを管理責任者とし、リスク管理マニュアルの策定など具体的な対応への備えを講じています。また、個別のビジネスリスクに対しては、発生時のリスクを極小化するために、各部門の責任において、本来業務の一環として必要な措置を講じる体制を整えています。

## 個人情報保護法に対する取り組み

日本では2005年4月に「個人情報の保護に関する法律」が施行され、日産では社内の管理体制およびルール、手続きを整備した個人情報管理規定を策定しました。導入当初、全社員を対象にe-ラーニングを実施し、新卒入社および中途入社の社員に対してもe-ラーニングを実施しています。

個人情報保護法全社事務局を中心に、情報漏えい事案をもとに情報セキュリティをより強化するために必要な対策も随時実施しています。日本国内の関連会社においても同様に実施しています。

2007年度は、2006年9月に改訂した「情報セキュリティハンドブック」に準拠したe-ラーニングを全社員を対象に実施しました。

日本において日産車の販売を金融面からサポートしている（株）日産フィナンシャルサービスでは、金融事業という特性から、個人情報保護法の施行以前より個人情報保護のための体制整備に取り組み、2005年度末には個人情報の適切な取り扱いを実施している事業者者に認定される「プライバシーマーク」を取得しています。



<http://www.nissan.co.jp/SITEINFO/privacypolicy.html>

日産自動車（株）における個人情報の取り扱いに関する詳しい情報は、上記のウェブサイトに記載しています。あわせてご覧ください。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
<b>事業活動報告・ コーポレートガバナンス</b>	<b>032</b>
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
<b>コーポレートガバナンス</b>	<b>038</b>
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## より良き地球市民を目指して、「国連グローバル・コンパクト」へ参加

日産自動車は、国連が提唱する「人権・労働・環境・腐敗防止」についての普遍的原則である「国連グローバル・コンパクト」に2004年1月以降、参加しています。「国連グローバル・コンパクト」は、国連のコフィー アナン事務総長(当時)が1999年に世界経済フォーラム(ダボス会議)で提唱した、企業による自主行動原則です。

下記10原則に向けた活動状況を報告するため、毎年サステナビリティレポートを国連グローバル・コンパクトのウェブサイトに掲載し、公開しています。

### グローバル・コンパクトの10原則

#### 人権

- ①企業はその影響の及ぶ範囲内で国際的に宣言されている人権の擁護を支持し、尊重する。
- ②人権侵害に加担しない。

#### 労働

- ③組合結成の自由と団体交渉権を実効あるものにする。
- ④あらゆる種類の強制労働を排除する。
- ⑤児童労働を実効的に廃止する。
- ⑥雇用と職業に関する差別を排除する。

#### 環境

- ⑦環境問題の予防的なアプローチを支持する。
- ⑧環境に対して一層の責任を担うためのイニシアチブをとる。
- ⑨環境を守るための技術の開発と普及を促進する。

#### 腐敗防止

- ⑩強要と賄賂を含むあらゆる形態の腐敗を防止するために取り組む。

## 持続可能な開発のための世界経済人会議(WBCSD)への参画

日産は、持続可能な開発のための世界経済人会議(WBCSD)に加盟しています。WBCSDは、「経済成長」「環境保全」「社会的公平」という3本の柱による持続可能な発展に対して、共有の決意を持つ国際的な企業の連合体です。現在、世界35カ国を超える国から、20以上の業種にわたる約200の企業が参加しています。産業界の貢献を実現するためにWBCSDが実行すべき目標は以下のとおり。

**産業界におけるリーダーシップ**—持続可能な発展に向け産業界を導く存在となること

**政策策定**—持続可能な発展に産業界が貢献するための枠組みの構築を目指し、政策決定に参画すること

**ビジネス・ケースの実践**—持続可能な発展に向けた産業界としての取り組みを策定、実践すること

**ベスト・プラクティスの提示**—持続可能な発展のための問題解決に対する産業界の進捗を提示し、WBCSDメンバー間でその先進的な事例を共有すること

**グローバルな展開**—開発途上国の持続可能な将来に貢献すること



<http://www.unglobalcompact.org/>  
<http://www.unic.or.jp/globalcomp/index.htm>

国連グローバル・コンパクトに関する詳しい情報は、上記の公式ウェブサイトをご覧ください。



World Business Council for Sustainable Development



<http://www.wbcsd.org>

持続可能な開発のための世界経済人会議(WBCSD)に関する詳しい情報は、上記の公式ウェブサイトをご覧ください。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
<b>事業活動報告・ コーポレートガバナンス</b>	<b>032</b>
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
<b>コーポレートガバナンス</b>	<b>038</b>
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## ルノーと日産のアライアンス（提携）

### 力の結集、そして成果へ、より強固なパートナーシップでさらなる進化を目指す

1999年3月27日に締結されたルノーと日産のアライアンス（提携）は、お互いの企業文化やブランド・アイデンティティを尊重し合うことを基本とした、日本とフランスの企業間で結ばれた初のアライアンスです。両社は、利益ある成長と共通利益の追求という共通戦略を掲げています。

### アライアンス・ビジョン

2004年3月、アライアンス5周年を機に、両社のアライアンスのさらなる飛躍に向けた決意を表明するとともに、両社で共有すべき価値観および理念について再確認しました。

RENAULT NISSAN



「ラグナ」(ルノー)

「ティアナ」(日産)

### ルノー・日産アライアンス

#### アライアンスの普遍的な理念

ルノーと日産のアライアンスは、株式を相互に保有し合う2つのグローバル企業が、下記の基本理念の実現を通じ、力を結集して高い成果を目指す、世界に類のないパートナーシップである。

- I. 双方に有益 (Win-Win) な結果をもたらすことを目的として、建設的なアプローチにより両社の強みを相互に活用することで、最大限のシナジーを創出する。
- II. おのおのの企業の自律性を確保し、かつ、おのおのの企業アイデンティティおよびブランド・アイデンティティを尊重し合う。

#### アライアンス・ビジョン—目指すべき姿

##### 共有すべき志

- ・アライアンスは、世界の持続可能な発展、すなわち環境・社会的責任・経済の調和のとれた発展に貢献する。
- ・アライアンスは、それぞれの株主に対し魅力的なリターンをもたらす。
- ・アライアンスは、魅力的な仕事とやりがいのある挑戦を社員に提供し、つねに優秀な人財を引きつけ、グローバルな視野と起業家精神を育成する。

##### マネジメント指針

- ・アライアンスは、相互の信頼と尊敬および高い透明性に基づいている。
- ・アライアンスの普遍的な理念は、以下のとおり世界の模範となるような企業統治を実践する。
  - 明確な意思決定による迅速な実行、結果に対する明確な責任、意欲的な水準の業績を目指す。
  - 両社の強みを相互に活用し、双方に有益 (Win-Win) なシナジーを創出することで効率の最大化を図る。

##### 3つの目標

アライアンスは、利益ある成長戦略を策定・実行し、以下3つの目標達成を目指す。

1. 各地域、各市場セグメントで、製品品質、魅力品質、販売・サービス品質の3分野において、ベスト3に入る自動車グループであるとお客さまから認識されること。
2. おのおの得意とする特定の領域で責任あるリーダーシップを発揮し、将来的に重要な技術で、世界のベスト3に入る自動車グループになること。
3. 高い営業利益率を維持し、つねに成長することにより、両社の営業利益合計額が、世界の自動車グループ中でつねに3位以内に入る企業グループになること。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
<b>事業活動報告・ コーポレートガバナンス</b>	<b>032</b>
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
<b>コーポレートガバナンス</b>	<b>038</b>
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

アライアンスの組織と決定プロセス

アライアンスの組織は、9つのSC、18のCCT、9つのFTT、5つのTT、ルノー・日産インフォメーションサービス(RNIS)とルノー・日産インフォメーションサービス(RNIS)という2つの共同会社で構成されています(下記の組織図を参照)。SCのリーダーは、ルノーと日産の副社長あるいは常務が担当し、CCT/FTT/TTは原則としてこの9つのSCの傘下に入ります。SCは傘下のCCT/FTT/TTを管理し、CCT/FTT/TTが決断を下せない問題を解決します。また、SCは実務的な課題を扱い、戦略的な課題については、両社のエグゼクティブ・コミッティ・メンバーが出席するアライアンス・ボード・ミーティング(ABM)で議論、決定されます。

アライアンス2007年のグローバル販売台数

2007年、ルノーと日産のグローバル販売台数は616万台に達し、アライアンスとして年間販売記録を更新しました。また、世界の自動車市場において約9%のシェアを獲得しています。

現場レベルでの技術交流を促進する「アライアンス・エンジニア交流プログラム」

アライアンス・エンジニア交流プログラム(AEEP)は、日産・ルノー両社から選出された若手エンジニアがペアを組み、共通の課題にチャレンジする、技術分野での関係強化を目的とした交流プログラムです。2005年度にスタートした本プログラムは、これまでに車両開発CCT(クロス・カンパニー・チーム)、品質FTT(ファンクショナル・タスク・チーム)、車両生産技術CCTにおいて実施され、2007年度は物流CCTと製造CCTにも対象を広げて導入しました。6ヵ月から1年に及ぶ活動期間に得られた新たなシナジーの可能性については両社の担当役員に報告され、将来の共通技術プロジェクトの達成とアライアンス人材の育成に反映しています。



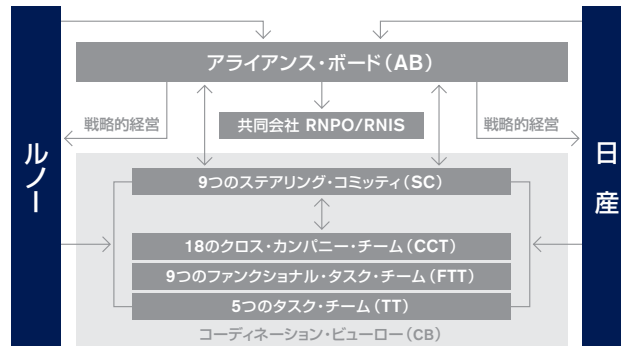
<http://www.nissan-global.com/JP/COMPANY/PROFILE/ALLIANCE/RENAULT01/>

ルノーとの提携に関する詳しい情報は、上記のウェブサイトに記載しています。あわせてご覧ください。



「アライアンス・エンジニア交流プログラム」の参加者

アライアンスの組織図



AB : アライアンス・ボード (Alliance Board)

アライアンスの中長期的戦略およびグローバルレベルでの共同活動の決定を行います。

SC : ステアリング・コミッティ (Steering Committee)

アライアンス・ボード・ミーティングの議題とすべき重要な課題を提案し、傘下のCCT/FTT/TTの活動を管理し、CCT/FTT/TTが決断を下せない問題を解決します。

CCT : クロス・カンパニー・チーム (Cross Company Team)

ルノー・日産間のシナジーの可能性を追求し、共同プロジェクトを企画・提案し、進捗を管理します。

FTT : ファンクショナル・タスク・チーム (Functional Task Team)

CCTの活動を支援し、プロセス、標準化、管理、情報ツールなどを含むサポート機能面から、ルノー・日産間のシナジー創出に貢献します。

TT : タスク・チーム (Task Team)

特定の課題が発生したときに、解決に向けて取り組みます。

CB : コーディネーション・ビューロー (Coordination Bureau)

ルノーはパリに、日産は東京にオフィスを置き、SCやCCT、FTT、TTの活動のサポートと、アライアンス・ボード・ミーティングの準備を行います。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上 046</b>	
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

Enhancing Value for Stakeholders

## ステークホルダーへの価値の向上

人びとと社会の持続可能な発展へ



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
<b>お客さまのために</b>	<b>047</b>
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## Enhancing Value for Stakeholders

## お客さまのために

## お客さまの期待以上の品質を

世界中のお客さまへ、期待を上回る高い品質のクルマやサービスをお届けしたい。日産は、お客さまが長く安心してお使いいただける「当たり前品質」を基本に、お客さまの視点を最優先に考えた品質向上に努めています。世界中の競合車のどのカテゴリで比較しても、つねにトップレベルの品質を保つことを自らに課し、企画開発段階から実際にお使いいただいているときの状況まで、さまざまな角度から品質向上に取り組んでいます。私たちは「品質向上に王道はない」との考え方から、お客さまの視点に立った検証・改善を重ねて、より満足度の高い商品を皆さまにお届けしていきます。

## 品質向上への取り組み

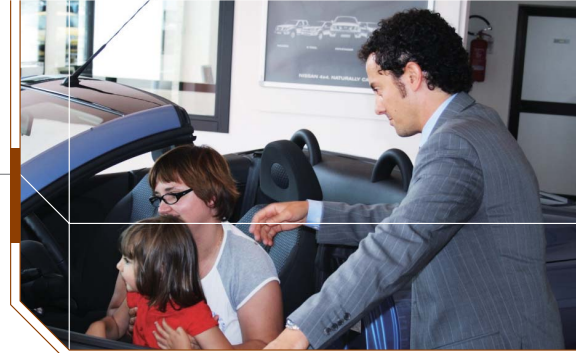
## お客さまの視点から品質を見つめる3つの領域

日産の品質を判断するのは、いかなる場合においてもお客さまであり、その評価を真摯に受けとめ、期待に応えていくことが、私たちの考える品質のあり方です。

日産は、お客さまの視点に立った、3つの領域で品質を定義しています。お客さまに安心してお使いいただける「当たり前品質」、お客さまにとって魅力的な商品であるという「魅力品質」、高い満足を実感していただける「営業・サービス品質」です。

この3つの領域について、外部調査機関によるお客さま満足度調査をグローバルに実施して、客観性のある指標から達成度を見極め、品質向上活動に役立てています。

お客さまに長期にわたって快適にクルマを使っていただくこと。この「当たり前品質」の上に、さまざまな「魅力品質」をプラスして、世界中のあらゆる地域で、深い満足を感じていただけるクルマづくりに取り組んでいます。



<http://www.nissan-global.com/JP/QUALITY/>

品質への取り組みに関する詳しい情報は、上記のウェブサイトに記載しています。あわせてご覧ください。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
<b>お客さまのために</b>	<b>047</b>
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 高品質の商品をお客さまへ、日産の品質ポリシー

日産は、世界中のどの地域のお客さまにも深い満足を感じていただくことを目指して、品質ポリシーを「日産製品品質方針 (NPQP)」として明確化し、「製品品質はお客さまの視点から、どの市場のどのセグメントでもベストレベルであること」「各地域の市場要求を含んだグローバルに共通の基準 (Common global standards) を適用すること」「グローバルに共通の品質保証の進め方 (NQAW) を実行すること」の3つの方針を掲げています。

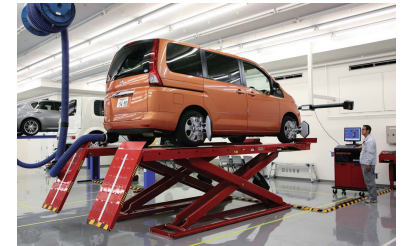
また、すべての国、すべての車種において、お客さま満足度でつねに上位にランキングされることを目標とし、確かな品質を築いていくための「日産品質保証ウェイ (NQAW)」を実践しています。日産品質保証ウェイとは、企画開発段階から市場販売まで、これまでのクルマづくりで培ったノウハウを品質基準として設定し、新たに開発するクルマの品質をトータルで保証すると同時に、新車開発ごとにますます品質を高めていくことのできる、有機的なサイクルをもった品質保証の流れです。

## あくなき品質改善を追求する聖地「フィールド・クオリティ・センター」

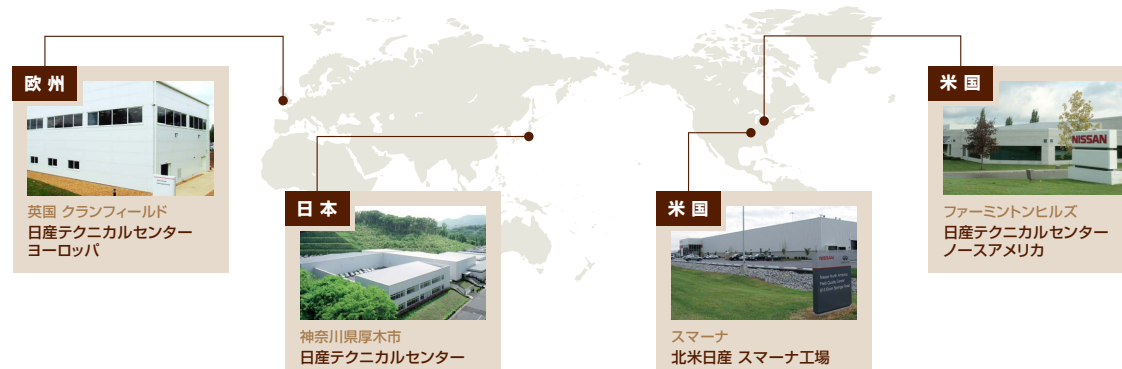
日産は、お客さまが実際にクルマを使用される際の「市場品質」の改善・向上、市場で発生した問題に対して迅速な改善を行う拠点として、「フィールド・クオリティ・センター (FQC)」を、2007年7月、日産テクニカルセンター (神奈川県厚木市) 内に開設しました。

フィールド・クオリティ・センターは、多様化するお客さまに対する顧客満足とこれからも誠実なモノづくりを続けていく日産の意思を具現化した組織です。

品質の高さは製品の要であり、ブランドの価値を決定づける重要な要素です。世界中を走る日産のクルマは、使われる地域や環境によって、お客さまの求める要望が異なる場合があります。そのため日産では、実際にモノづくりを行っている、世界の開発・生産拠点4カ所にフィールド・クオリティ・センターを整



フィールド・クオリティ・センターの実車調査エリアでは、実車に回収部品を搭載して稼働させ、不具合状況を再現します



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上 046</b>	
<b>お客さまのために 047</b>	
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

備することで、各国の市場で発生した不具合やリコールに迅速に対応し、改善の成果を開発中の商品にも反映させ、グローバルに商品の品質向上を目指しています。

フィールド・クオリティ・センターでの具体的な活動は、市場品質の調査・解析（FQIA\*）を行うことにより、常駐するサプライヤーと日産の関係部署が一堂に会し、特定した部品や現車を目の前にして、最適な対応策、改善すべき要因の徹底究明を最短で行う有機的な環境を整え、再発防止や次期開発につなげられるよう取り組んでいます。

また、販売前の「出荷品質」と実際にお客さまが体感される「市場品質」の間に生じるわずかな違いを、現場・現物・現実の三現主義の実践によって検証し、お客さまにとって最高の品質とは何かを考え、確かな安心と信頼をお届けする品質の追求を目指しています。

※FQIA：Field Quality Investigation Analysisの略。問題部品を大量に回収してその問題となっている状況を再現し、信頼性の高い手法を用いて原因を突き止め、速やかに改善するための対策を導き出す活動

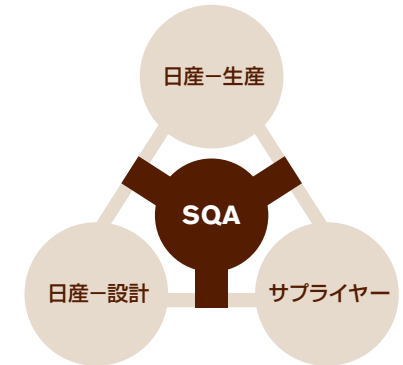
## サプライヤーとのパートナーシップで世界基準の品質向上

クルマは、膨大な部品によって構成された非常に複雑な製品です。1台のクルマに使用される部品点数は約1万点にもものぼり、日産ではその70～80%がサプライヤーからの調達によってまかなわれています。現在日産が取引をしているサプライヤーは約5,000社を数え、最終的なクルマの品質を上げるには、各社から供給される一つひとつの部品の品質が正確に保たれていなければなりません。そこで日産では、サプライヤーの品質を保証するSQA\*活動を推進し、つねに高品質な部品が供給される体制を整えています。

また、部品の安定供給を持続的に実現するには、優秀なサプライヤーとの強力なパートナーシップを築くことが重要な要素となります。日産のSQA活動は、日産とサプライヤーがビジネスパートナーとして対等な立場でしっかりと向き合い、互いに利益ある関係を目指しています。SQA活動を推進するサプライヤー品質保証グループでは、日産の設計、生産、そしてサプライヤーの3者に対して中立的な立場・観点に立ち、購入部品の品質改善に継続的に取り組み、相互理解を深めながら、速やかに部品品質の向上を図っています。

日産は2001年4月から世界各地に点在するサプライヤーとの間で、サプライヤー品質の世界基準を設け、各部品の品質保証を明確にしてきました。とくにルノーとの協力体制が推進されてからは、サプライヤーとの関係においてもグローバルなマネジメントシステムを強化して、世界中のサプライヤーから、日産が考える品質方針を正確にクリアした部品が安定的に供給されています。

※SQA：Supplier Quality Assuranceの略。サプライヤーから供給される部品の品質を維持・向上させていくための日産独自の活動



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
<b>お客様のために</b>	<b>047</b>
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## リコールへの対応は、公正な判断で迅速に実行

製品の不具合は、発生しないよう最善を尽くすことが生産者の責務です。しかしながら、複雑な工業製品であるクルマづくりにおいて、時として予期せぬ不具合や不具合の恐れが生じてしまう場合があります。そのため日産は、お客さまの安全確保とお客さまへのご迷惑を最小限にすることを最優先に、必要と判断されたリコールは迅速に実行しています。日産のリコールに対する基本姿勢は、経営判断を介さず、実施要否はテクニカルな判断に徹し、つねにお客さまの立場に立った透明で公正・迅速な対応により、客観的な処理・遂行を基軸としています。

## サービスサポート機能を集結させ、お客さま・販売会社への対応力を飛躍的に向上

2008年3月、「日産カスタマーサービスセンター（NCSC）」が本格稼働しました。NCSCは、製品品質とアフターサービスに関するさまざまなサービス技術関連業務を集結させ、お客さまや販売会社へのサービスサポートのスピードと質を飛躍的に向上させることを目指しています。

NCSCでは、整備や修理サービス技術、販売会社の修理支援、板金塗装技術研修、市場の不具合情報収集などの機能と、「お客さま相談室」の業務を行っています。お客さま相談室はサービス技術支援チームと連携を強化し、より技術的に精度の高い情報提供が可能になりました。このお客さま相談室には、年間約23万件のお電話が寄せられています。

また、日産では現在、「驚くほど早く直す活動」を実行しています。お客さまが不具合や不満を感じてから、販売会社で点検・修理が終わり、お客さまに再びご満足していただけるまでの時間をいかに縮めるか。「品質不具合を出さない」とことと同様に、市場で発生してしまった不具合は、お客さまが驚くほど早く直すことが重要です。NCSCでは、修理期間が長期化する要因調査や、販売会社に入庫後の修理プロセス上の各課題を解析し、販売会社のサポートや部品供給体制の改善などを行っています。

## 車両診断機「CONSULT-Ⅲ」による迅速な診断で修理を効率化

急速に高性能化するクルマに対応し、迅速かつ正確な故障診断、修理を実現するため、各種の車載電子システムを対象とした独自の車両診断機「CONSULT-Ⅲ（コンサルト・スリー）」を世界各国の販売会社のサービス工場に順次導入しています。

この診断機は、とくに目視で発見することが難しい電気系統の不具合を診断する際に、すばやく的確な診断ができ、従来の約1/3の時間で不具合の状況を把握できるようになりました。診断結果はグラフなどで分かりやすくお客さまにご説明しています。また、交換すべき部品をオンラインで発注できるなど、診

## 2007年度中の主なリコール

4月	セレナ（消音器および排気管） 約11.3万台（日本）
7月	アルティマ（エンジンエアフィルターエレメント） 15.5万台（米国・カナダほか）
9月	パスファインダー・QX4（給油管） 41.7万台（米国・カナダ）
11月	アルティマ・セントラ（電子制御モジュール） 約68.6万台（米国）



<http://www.nissan.co.jp/RECALL/>

リコールなどに関する詳しい情報は、上記のウェブサイトに記載しています。あわせてご覧ください。

日産車に関するお問い合わせ・ご相談：「お客さま相談室」

フリーコール（携帯・PHSも対応）  
0120-315-232

受付時間：9:00～17:00

お問い合わせ・ご相談内容につきましては、お客さま対応や品質向上のために記録し、活用させていただきます。



日産カスタマーサービスセンター



高性能化するクルマの不具合を「CONSULT-Ⅲ」で的確に診断

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
<b>お客さまのために</b>	<b>047</b>
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

断から修理完了までの時間を大幅に短縮して、より効率的な修理が可能となりました。さらに、雨の日にエンジンノイズが気になる、走行時にいつも同じ場所で不具合を感じるなど、お客さまが実際に走行している状況での診断も可能となり、クルマの静止時には把握の難しかった微妙な不具合にも対応できます。

## 魅力ある商品を迅速にお届けするための、生産部門の取り組み

日産はつねに「より良いモノづくり」にチャレンジして、世界の自動車業界でトップクラスの品質と生産性を誇っています。これを支えているのが、「日産生産方式 (Nissan Production Way : NPW)」です。NPWが目指すのは、高品質なクルマを効率的に生産し、お客さまにお約束した短い納期でお届けすることです。お客さまの受注情報をもとに、車両の生産工程だけでなく、エンジンなどのユニット、構成部品など、すべての生産工程が「同期する」(順序と時間を守る)生産方式です。

## 新車生産の早期立ち上げと品質をさらに向上させる「グローバル車両生産技術センター」

2007年4月に、新型車の試作や解析を集中的に行う「グローバル車両生産技術センター (Global Production Engineering Center : GPEC)」を座間事業所内に開設し、生産準備段階からの品質の向上とグローバルレベルでの均一化を目指しています。GPECでは新型車の生産立ち上げに先駆けて、プレスから車体溶接、車両組立に至る工程をデジタルや現物で検証し、最適な製造条件を確立します。生産ラインの情報やノウハウをデータ化し、グローバル拠点に転写することにより、新車生産の早期立ち上げと品質をさらに向上させることが可能となりました。

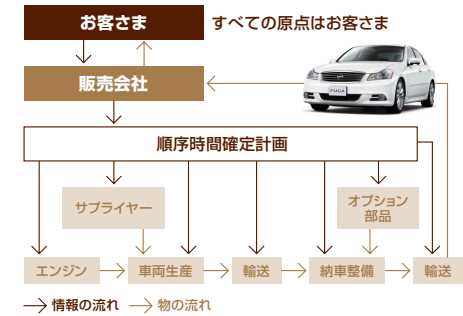
## 店舗での多様性

### 積極的な女性スタッフの増員で、お客さまの多様性に応える

お客さまとのコミュニケーションを担う販売店においては、女性カーライフ・アドバイザー (CA) や女性テクニカル・アドバイザー (TA : 点検・修理の受付と問診などを担当) の割合を増やし、お客さまの多様性に応えるスタッフ体制の強化を推進しています。

日本の年間自動車販売台数約600万台のうち、女性のオーナー比率が30%、女性が男性とともにクルマを選び購入している比率は30%以上にのぼり、購入意思決定の60%に女性が何らかの関与をして

### NPWの目指す姿：同期生産



グローバル車両生産技術センター



女性カーライフ・アドバイザー/店長研修会

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
<b>お客さまのために</b>	<b>047</b>
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

います。そこで日産では、女性を積極的に採用・育成し、2007年度末時点で、女性CAの割合を2003年度末に比べて約2倍の6%にまで引き上げ、女性TAについても、従来比の約2倍の13%まで上昇させました。

2007年には、女性CAの育成と定着を目的に、女性CAと店長を対象とした研修会を近畿と九州の2地区で開催しました。研修会では、女性CA同士でのグループディスカッションや先輩女性CAの座談会が行われました。また、店長は女性CAのさらなる育成に向けた改善策を協議し、会の最後に女性CAと店長がお互いに論議した内容を共有しました。研修会に参加した女性CA・店長の多くから、「気づきの多い研修で、今後の活動の参考になった」との反響が寄せられました。今後もこうした活動を継続的に行っていく予定です。

## ラグジュアリー・ブランド「インフィニティ」をグローバルに展開

日産は、長期的なグローバル戦略の一環として、インフィニティブランドのグローバル展開を掲げています。インフィニティブランドは、1989年に米国に導入して以来、カナダ、中東、台湾、韓国、ロシアなどに展開し、2007年7月には中国、9月にはウクライナでの販売を開始しました。今後は欧州地域においても、インフィニティブランド専用の販売サービス・ネットワークを整備し、導入する予定です。



インフィニティの販売店(中国)

## クルマで出かける喜びを1人でも多くの方へ、日産のライフケアビークル

日産では、お年寄りやお体の不自由な方の移動をお手伝いするライフケアビークル(LV：福祉車両)を、カーラインアップの重要なひとつと位置づけています。ライフケアビークルを展示し、専門知識を持つLVアドバイザースタッフを配置した「LV認定店」は全都道府県にあり、実際に試乗していただくなどして、お客さまのご要望に沿った商品とサービスを提供しています。2008年3月末現在、LV認定店は395店舗、LVアドバイザースタッフは4,141名にのぼります。

また、ニッサン・モータースポーツ・インターナショナル株式会社が、富士スピードウェイで毎年実施しているモータースポーツのファン感謝イベント「NISMO FESTIVAL」では、LVや車いす搭載車両で来場された方々が移動する際に不便のないよう、さまざまな配慮をしています。2005年にスタートしたLV「キャラバンチェアキャブ」による場内の移動サービスもそのひとつです。毎回、多くのお客さまにご乗車いただいております。「この移動サービスがあるから毎年このイベントに参加できます」「日産らしい取り組みですね。ぜひ続けてください」といった声を頂いています。



専門知識を持った  
LVアドバイザースタッフが対応(日本)



<http://LV.nissan.co.jp/>

ライフケアビークルに関する詳しい情報は、上記のウェブサイトに記載しています。あわせてご覧ください。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上 046</b>	
<b>お客さまのために 047</b>	
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

Messages from Our Stakeholders  
ステークホルダーからのメッセージ

**手もとの簡単操作がうれしい日産のLV**



石川県金沢市 橋場 喜晴 氏

幼いころに患った脊椎カリエスで歩行困難となった私にとって、クルマは必需品です。ところが8年前、当初運転していた普通車で思わぬ事故を経験しました。足によるブレーキ操作に自信がなくなり、新たに購入した「マーチ」に手動運転装置を後付けしましたが、腕を大きく動かす必要があり疲れてしまいました。そこで一昨年の買い替え時に、手首の動きだけでブレーキやアクセル操作がスムーズにできる日産オリジナルの「キューブ ドライビングヘ

ルパー オーテックドライブギア タイプe」を選びました。広々とした車内は体が不自由な私でも乗降しやすく、小回りの良さや前方が見やすい点も気に入りました。ドアスイッチに触れるだけで施錠・開錠ができる「インテリジェントキー」も、松葉杖で歩く私にはとても便利。買い物や通院などの外出時に大変重宝しています。子どもたちが小さいころはよく家族でドライブに出かけていましたが、この「キューブ」ならまた遠出ができるかなと思っています。

**日産らしい多様な価値を提供する**

**夢のあるイノベーションでユニバーサルデザイン社会を創造**

日産は、誰にでも安全で便利なクルマ社会の実現に向けて、多様化するお客さまのクルマへの要求や、運転時の心理的な影響を研究しながら、「魅力的で安全、かつ快適なクルマづくり」に取り組んでいます。そして人間中心のデザイン・設計思想に基づき、「日産ならではの特徴を持つクルマづくり」を目指した先行開発を、部門を越えたタスクチームによって推進しています。

たとえば「PIVO 2」は、こうしたタスクチームにより実現した、お客さまにとってフレンドリーな先進技術を凝縮したコンセプトカーです。初代「PIVO」で高い評価を頂いた先進技術、「キャビン回転によるバック運転不要」という機能に加え、「PIVO 2」では縦列駐車がとても簡単にできる機能「横方向走行」を追加することで、これ以上考えられないほど操作性の良いクルマとなっています。また、よりフレンドリーなクルマのあり方として、表情や会話からドライバーの状態を推定して話しかける「ロボティックエージェント」の採用により、人がペットに感じるような「愛着感」をクルマに与えました。電動車両だからできる、機能と心理の両面からとらえた新しいカーライフの提案です。

現代のクルマにとって、サステナビリティを実現していくのは大きなテーマです。環境に配慮した技術を生かし、その技術により初めて実現できる新しいクルマの魅力を創造し、お客さまにとって分かりやすい形で表現する—こうした取り組みの積み重ねによって、多くのお客さまに価値を提供できると私たちは考えます。

日産はこれからも斬新な発想で価値の高い商品を開発し、楽しいカーライフを創造していきたいと考えています。



「PIVO 2」

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
<b>お客さまのために</b>	<b>047</b>
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 走る喜びをお客さまと分かち合うモータースポーツ活動

自動車メーカーの技術力の真価が試されるモータースポーツ活動。日産は、日本最高峰のチャンピオンシップ「SUPER GTシリーズ」をはじめ、国内外でさまざまなカテゴリーのレースに参戦しています。また、より多くのお客さまにモータースポーツの素晴らしさ、楽しさを理解していただけるよう、入門カテゴリーであるワンメイクレース「マーチカップ」の開催やプロドライバーによる「日産レーシングスクール」、プライベート参戦するチームへの技術支援など、モータースポーツの感動を共有するグラスルーツ活動にも取り組んでいます。

さらに、モータースポーツ文化の発展と世界で活躍できる若手ドライバーの育成を目的に、「ニッサン・ドライバー・ディベロップメント・プログラム」を2006年に設立。2008年シーズンは、16歳から22歳の選手5名にスカラシップを提供し、国内外のレースへの参戦をサポートしています。



新型「NISSAN GT-R」で  
SUPER GTチャンピオン奪還を目指す  
(2008年1月 グローバルモータースポーツ  
体制発表会見)

## 株主・投資家の皆さまとともに

### 透明性の高い情報開示で、 市場からの信頼に応える

日産の株主・投資家向け広報（IR<sup>\*</sup>）活動の基本は、透明性の高いコミュニケーションの継続的な実践にあります。機関投資家のみならず、証券アナリスト、多様化する個人投資家の皆さまに、日産の戦略やビジョン、経営計画に対する具体的な実行方法を正確に伝え、株式市場からの信頼を築くことにより、企業の本質的価値と市場価値の一致を目指しています。また、企業価値を長期的に創造していくためには株式市場からのフィードバックが欠かせません。私たちはすべての株主・投資家の皆さまが満足感を持って的確な投資判断をしていただけるよう、双方向の良好なコミュニケーションを継続していきたいと考えています。

※IR：インベスター・リレーションズの略。株主・投資家向け広報

### グローバルレベルで、透明性の高いコミュニケーションを実践

世界中に市場を持つ日産は、情報公開においてグローバルレベルの透明性の確保に努めています。決算報告については四半期ごとに世界各地の機関投資家への個別訪問や各種メディアの取材対応、投資家向けミーティングなどを行っているほか、日々の事業活動に直接触れていただく機会として、国内外の生産工場やディーラーの見学会を実施しています。また、日産の経営戦略を継続的に支持していただけるよう、経営者層との対話の機会も増やしています。なお、日産の株主利益および株主・投資家の皆さまとのコミュニケーションの強化を目指し、2007年9月にアラン・ダサスが最高財務責任者（CFO）に就任しました。

日産は、株主や投資家の皆さまが今後の当社業績をより正確に予測するうえで有益となる情報を、公平かつ速やかに開示することにより、長期にわたって安定的な株主価値創造に寄与するIR活動を推進しています。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
<b>株主・投資家の皆さまとともに</b>	<b>055</b>
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135



<http://www.nissan-global.com/JP/IR/>

IRに関する詳しい情報は、  
上記のウェブサイトに記載しています。  
あわせてご覧ください。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
<b>株主・投資家の皆さまとともに</b>	<b>055</b>
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 明確な配当政策をお約束

日産は、2008年5月に「日産GT 2012」の配当政策を発表しました。株主還元の透明性を高めるため、長期的な配当政策を提案しています。具体的には2008年度：42円/株、2009年度：44円/株、2010年度：46円/株という金額をお約束しています。

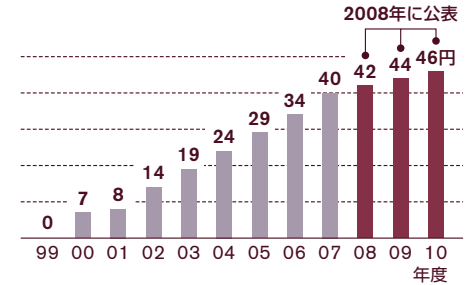
## 2,135名の株主の皆さまにご出席いただいた株主総会

2007年6月20日、日産自動車(株)の「第108回定時株主総会」をパシフィコ横浜(神奈川県横浜市)において開催し、2,135名の株主の皆さまにご参加いただきました。総会では、2006年度の事業報告ならびに2007年度の業績見通しに関する説明を行いました。総会後に開かれた株主懇談会ではCEOをはじめとする経営者層の出席のもと、株主の皆さまと積極的な意見交換を行いました。また、「日産のCSRへの取り組み」と題したパネル展示を行い、CSR重点9分野のひとつである「社会貢献活動」の事例などを紹介しました。

## 個人投資家の皆さまとのコミュニケーションを拡充

近年では個人の方が株式投資を行う機会が増え、日産の株式を保有されている個人株主数も2007年度末には対前年度比28%増の24万9,000人に増加しました。こうした現状を踏まえ、日産は個人投資家の皆さまとの対話を重要なIR活動として強化しています。各地で開催される投資フォーラムで日産の成長戦略を紹介しているほか、2007年には日産の環境および安全技術に関する説明会や、個人投資家の方々を対象とした工場見学会も実施しました。また、個人株主の皆さまに向けたウェブサイト「個人投資家の皆様へ」を2007年3月に立ち上げ、日産に関する情報のアクセス機会も広げています。さらに、当社株式への投資の魅力を高めることを目的として、2008年3月末時点で当社株式を保有している株主の方々に対し、初めて株主優待を実施するとともに、2008年4月には、個人投資家の方々向けにメール配信サービスも開始しました。

配当計画の公表(円/株)



株主の皆さまとの懇談会



個人投資家向け説明会



<http://www.nissan-global.com/JP/IR/INDIVIDUAL/index.html>

個人投資家の皆さまにさまざまな情報をご案内するウェブサイトもあります。あわせてご覧ください。



<https://www.nissan-register.jp/irregister/>

個人投資家向けメール配信サービス「NISSAN IR NEWS」では、日産のニュース・情報をメールでタイムリーに配信しています。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
<b>株主・投資家の皆さまとともに</b>	<b>055</b>
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 証券アナリストによるディスクロージャー優良企業1位に初の選定

日産自動車(株)は、(社)日本証券アナリスト協会が主催する第13回「証券アナリストによるディスクロージャー優良企業選定」において、自動車・同部品・タイヤ部門の優良企業1位に初めて選定されました。「ディスクロージャー優良企業選定」は、企業の情報開示向上を目的に、毎年、各業種を担当する証券アナリストがアンケート形式で各社のIR活動を評価するもので、日産はフェア・ディスクロージャーの取り組みや自主的な情報開示の姿勢が評価され、同部門において3年連続で上位に選定されました。



第13回「証券アナリストによるディスクロージャー優良企業選定」の表彰式

### 2007年11月実施 個人投資家向け説明会 アンケート結果

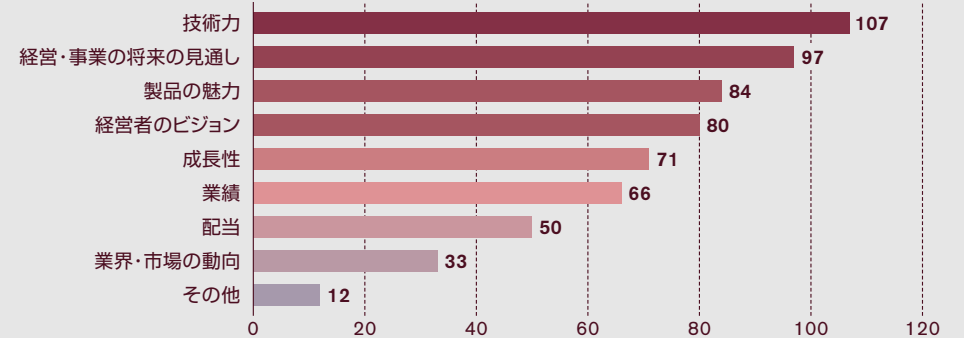
日産の安全・環境技術に関して、個人投資家約200名を対象とした説明会を実施しました。参加者に対して実施したアンケートの結果を一部抜粋して紹介します。

今回のアンケートでは、参加者のうち70%近くの方が「今回の説明会で日産の技術に対する評価が上がった」と回答しており、説明会を通じて日産の技術に対する理解を深めていただいたことがうかがえます。

#### 説明会参加後の投資評価

回答者のうち約80%が当社株式を保有していなかったが、説明会参加後の投資評価として約60%の方が「上がった」と回答

#### 会社評価のポイント (有効回答者数：185人(複数回答)、単位：人)



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
<b>社員とともに</b>	<b>058</b>
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## Enhancing Value for Stakeholders

## 社員とともに

## 社員の多様性を生かし、未来を拓く

日産は、多様な人財によってもたらされる力の結集が、企業としての強みになると考えます。さまざまな課題に対して多様な人財が知恵を出し合うことで、より発展的で創造的なアイデアが生まれ、それが日産ならではの価値を創り出しています。そのため日産は、多様性を生かす方法や環境づくりを戦略的に進めています。日産のダイバーシティは、お客さまの多様なニーズに最大限に応え、ステークホルダーとともに持続的な成長を維持するための原動力となっています。

・連結従業員数180,535人(2008年3月末現在)

・かけがえのない財産であるという意味を込めて、日産では人材を「人財」と表記しています。

## コミュニケーションが信頼を生む

## 継続的に意識調査を行い、社員の声を企業活動に反映

日産は、グローバルに社員の意識調査を行い、その結果を経営と企業文化の質の向上に生かしています。業務に対する意識や、前回の調査結果が効果的に活用されているかなどについて、日産全体および地域・部門ごとに分析を行い、特定された課題に対するアクションプランを検討します。

2007年度は、2006年度末にグローバルの全拠点において実施した「日産バリューアップ社員意識調査」の結果をふまえ、部門ごとに具体的なアクションプランを作成し、改善につながる活動を実施しました。

## 情報共有と業務の効率化を高めるイントラネットを拡充

日産は、社内の情報共有と業務推進の効率化をうながすツールとして、イントラネット「WIN※」を運用し、重要な経営情報を世界に同時発信しています。パソコンを介して会議ができるシステムやバーチャル・ワークプレイスの導入も、業務の効率化につながっています。2008年初めにはイントラネットを刷新し、必要な情報をより早く入手できるようにしました。



イントラネット「WIN」のトップ画面

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
<b>社員とともに</b>	<b>058</b>
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

「WIN」は現在、日本、北米、欧州などの地域および主要な関係会社に導入しており、今後さらに、アジアやオセアニア地域を含むグループ・グローバルにネットワークを拡張していく予定です。また、社員がより良い会社生活を送るためのコミュニケーションツールとして、新たにソーシャルネットワーキングサイトの開設を予定しています。参加者同士が友人を紹介し合い、新たな交友関係を築くことで、社内の情報共有を促進させることを目的としたコミュニティ型のウェブサイトです。

※WIN : Workforce Integration @ Nissan

## 経営トップと社員による意見交換会を開催

日産は、経営者層と社員そして社員同士が、透明なコミュニケーションを通して相互の信頼関係を高めることを大切にしています。そのひとつとして、経営者層と社員が直接対話する「意見交換会」を実施しています。この意見交換会は、経営トップが会社の状況やメッセージを伝えるとともに、社員からの質疑に直接答えるオープンなスタイルで行っています。今後も双方向コミュニケーションの機会として内容を充実させていきます。

### 2007年度に実施した主な「社員との意見交換会」

開催年月	対象	役員
2007年	5月 欧州日産自動車会社(フランス) 社員	ゴーンCEO
	5月 日産テクニカルセンター・ノースアメリカ社(米国) 社員	ゴーンCEO
	5月 日産自動車 追浜工場 社員	志賀COO
	6月 日産自動車 R&D部門 社員	ゴーンCEO/山下EVP
	6月 アジア・パシフィック日産会社(シンガポール) 社員/ 日産シンガポール金融会社 社員	ゴーンCEO
	6月 日産自動車 LCV事業本部 社員	ゴーンCEO/パーマーCVP
	6月 サイアムニッサンオートモービル会社(タイ) 社員	ゴーンCEO
	7月 日産自動車 本社 社員	ゴーンCEO
	8月 日産自動車 横浜工場 社員	志賀COO
	9月 日産自動車 栃木工場 社員	志賀COO
	11月 日産自動車 生産部門 監督者層	志賀COO/酒井SVP/篠原SVP
2008年	11月 日産自動車 九州工場 社員/ 福岡県内販売会社 カーライフ・アドバイザー、テクニカル・アドバイザー	ゴーンCEO
	11月 日産自動車 購買部門 社員	ゴーンCEO/西川EVP/真行寺SVP/山内CVP
	2月 日産自動車 九州工場 社員	志賀COO
	3月 タンチョン・モーター・アッセンブリーズ社(マレーシア) 社員	ゴーンCEO



九州工場で実施された社長と社員の意見交換会



日産テクニカルセンター・ノースアメリカ社で実施された社長と社員との意見交換会

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
<b>社員とともに</b>	<b>058</b>
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 多様性の尊重

### グローバル戦略としてのダイバーシティ活動を各地域で推進

日産は、ダイバーシティ(多様性)を重要な経営戦略のひとつと位置づけています。2004年10月、日本に「ダイバーシティ ディベロップメント オフィス」を設立。北米、欧州、一般海外地域の人事部門や「ダイバーシティ・クロスファンクショナル・チーム」とともに、「多様性を尊重し持続的な成長を目指す」という共通のゴールに向かって、さまざまな取り組みを行っています。また、部門を代表する役員がメンバーとなる「ダイバーシティ ステアリング コミッティ」では、ダイバーシティを推進していくための方針決定を行います。

日産のダイバーシティ ディベロップメント オフィスでは、「女性の能力活用」以外のテーマにも注力しています。2006年度からは、1999年のルノーとのアライアンスで得た「クロスカルチャー」を生かし、より高い価値創造を目的とした「カルチャーダイバーシティ」のテーマに取り組んでいます。

#### 「女性の能力活用」をテーマにした取り組み(2004年度～)

2004年度から継続的に取り組んでいる「女性の能力活用」では、以下の3つの取り組みを柱として活動しています。

##### 1. 女性のキャリア開発支援

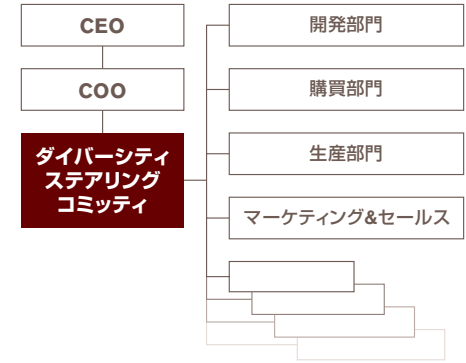
日産では、女性の力を生かし、お客さまにとっての価値向上を実現していくためには、とくにプロジェクトや組織のリーダーとなる女性の活躍が重要であると考えています。

一人ひとりの状況を把握し、それぞれに合ったキャリア開発支援のために、女性キャリアアドバイザーを配置するほか、人事部門との協働でキャリア形成に必要な能力開発をサポートする研修、キャリアについて考えるイベントなどを実施しています。また、社内イントラネットに、さまざまな領域で活躍する先輩女性社員のインタビューを紹介しています。

##### 2. ワークライフバランス(仕事と家庭の両立)の支援

日産は、仕事と育児・介護の両立において幅広い働き方ができるよう支援しています。妊娠期の母性保護休職制度や育児・介護のための就業時間短縮制度、育児・介護期間中の在宅勤務制度、テクニカルセンター内託児所(まーちらんど)の設置など、社員の性別に関わらず、「ワーク」と「ライフ」の適正なバランスを維持するためのさまざまな支援制度を整備しています。2005年4月施行の「次世代育成支援対策推進法」に基づく行動計画に対しては、その取り組みと目標の達成が認められ、子育て支援に積極的に取り組む企業として認定を受けています。

#### ダイバーシティ ステアリング コミッティに関する組織図



女性キャリアアドバイザーによる面談の様子



次世代育成支援認定マークを取得

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
<b>社員とともに</b>	<b>058</b>
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

### 3. ダイバーシティマインドの醸成

2005年より各事業所において、社員一人ひとりがダイバーシティについて考える「日産ダイバーシティフォーラム」を開催しています。経営者層が企業戦略としてのダイバーシティの重要性を説明するほか、社外ゲストの講演や体験セミナーなどを通して社員一人ひとりがダイバーシティへの理解を深め、自ら行動していくきっかけとなっています。

#### 「カルチャーダイバーシティ」をテーマにした取り組み（2006年度～）

グローバルに事業を展開していくうえで、さまざまな文化・国籍を持つ社員の力を活用することは不可欠です。ルノーとの提携以降、「クロスカルチャー」は日産の強みであると考えています。「クロスカルチャー」を通じて、より高い価値創造を目指すため、「カルチャーダイバーシティ」をテーマに取り組んでいます。

異なる文化を持つ人と働くうえでの経験を共有し、ビジネスに生かしていくための交流イベントや文化的背景への理解を深め、仕事のスタイルを学ぶことを目的とした研修などを開催しています。

#### ダイバーシティ活動が国内外から評価される

2008年1月、「2008年カタリスト賞」をアジアに本社を置く企業として初めて受賞しました。同賞は、米国のNPO法人カタリスト\*が女性のキャリア開発・登用を支援する画期的な活動に取り組む企業に毎年贈るものであり、日産の受賞は、ビジネスの視点で女性の能力活用に取り組んだ成果とグローバルにもたらす潜在的影響の大きさを高く評価されました。

さらに2008年1月、多様な人材を重要な経営資源として活かすダイバーシティ経営を推進する企業を表彰する「人を活かす企業—ダイバーシティ経営大賞」（主催：東洋経済新報社）の第1回大賞を受賞しました。

※米カタリスト：女性のキャリア推進とビジネスの発展を目的に、45年にわたり活動している非営利の調査・諮問団体



カルチャーダイバーシティについて考えるイベント



東洋経済新報社「ダイバーシティ経営大賞」表彰式



「2008年カタリスト賞」表彰式

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
<b>社員とともに</b>	<b>058</b>
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 社員のキャリア形成を支援

### 一人ひとりの意欲に応える公平な人事制度で社員の能力を評価

人財の力が個人として、また組織として最大限に発揮できるよう、日産では継続的に人事制度の改善に努めています。社員が意欲を持って高い成果を達成できる仕組みについては、会社に貢献している度合いを正しく判断する評価報酬制度を導入しています。課題（コミットメント）をいかに達成したかを結果で判断する「パフォーマンス」評価および技能、知識、心構えなどの行動特性をとらえる「コンピテンシー」評価により、報酬を決定しています。

### 社員のキャリア形成を支援する仕組み

日産は「自らのキャリアは、自らデザインする」という考え方のもと、社員のキャリア形成を積極的にサポートしています。キャリアの入口となる採用時には、チャレンジしたい仕事を選択できる職種別採用を実施するとともに、中長期的なキャリアビジョンを描くことを目的としたキャリアデザイン研修を実施して、自らの将来を見据える機会を提供しています。

さらに入社後は「シフトキャリア制度」と「オープンエントリー制度」によって、社員のキャリア実現を支援しています。「シフトキャリア制度」は、ポストの募集に関係なく、自ら希望する部署や職種に自由に応募できる制度です。「オープンエントリー制度」は、ポストの募集があればその部署に応募できるもので、2007年度は約360のポストに250名近くがエントリーし、約80名が合格しています。

### 専門的知識の蓄積と発展を目指した「エキスパートリーダー制度」

日産は、働く社員のそれぞれの専門性を中長期的に高め、持続的な成長につなげていくことが、経営上の意思決定にも寄与すると考えています。そこで研究の成果や専門性が世界レベルのエキスパートを選任し、その専門性をより高め、次世代に伝承する「エキスパートリーダー制度」を導入しています。2007年度は、82の専門領域で30名のエキスパートリーダーが誕生しました。

選任されたエキスパートリーダーは、専門性を発揮してビジネスに貢献すると同時に、それぞれの専門分野を強化・発展させる役割を担っています。イントラネットをはじめとした社内のさまざまなコミュニケーションツールを活用して専門知識を共有化するとともに、技術・専門性の伝承を目的としたセミナーや講座を実施して次世代の人財を育成しています。



エキスパートリーダー・キックオフ会議

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
<b>社員とともに</b>	<b>058</b>
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 「学習する企業文化」の醸成

### 学びの場を提供し、社員のスキル向上を支援

日産は、つねに学び続ける組織として社員の成長をサポートし、計画的な人財開発と育成に取り組んでいます。学びとは、価値創造のために足りないものを補おうと「ストレッチ」することであり、価値創造への意欲なしには「学習する企業文化」は生まれないと考えています。

社内における学習機会の提供支援としては、研修・キャリア形成を支えるイントラネット「Learning Navigation (通称「らーなび」)」を運用しています。この「らーなび」は、社員一人ひとりが学びたいと思ったときに、自分に合った専門研修、マネジメント研修、e-ラーニング、通信教育や外部の講演会などの情報をナビゲートするラーニング検索サイトです。本サイトは年々高まる社員の学習意欲に応じて、ニーズに合った情報を随時アップデートしています。

また、これまで関係会社や日産自動車各部門に分散していた教育機能を集約し、人財育成をさらに強化するための組織として、「日産ラーニングセンター」を開設しました。

### 日産の遺伝子を受け継ぐ人財育成の場「マネジメント インスティテュート」

日産は、「日産の遺伝子」を次世代の人財に伝承し、「日産ウェイ」を基盤としたリーダーシップ、将来の発展に必要な専門性の育成、そしてイノベーションを創造する「場」として、研修施設「日産ラーニングセンター マネジメント インスティテュート」(神奈川県・箱根)を2005年に開設しました。

マネジメント インスティテュートでは日産がこれまでに培ってきた知識や経験を次世代に継承するための人財開発プログラムであるリーダーシップ研修や、カルチャーダイバーシティに関する研修、グローバル企業による異業種交流型研修コンソーシアムプログラムなどを提供し、日産の価値創造に貢献しています。

全世界のリーダー層を対象とした「日産ウェイ ワークショップ」を通して、日産が復活の過程で学んできた知識や経験の結晶である「日産ウェイ」を、職場の一人ひとりに浸透させる活動にも力を注いでいます。

### 日産のモノづくりを伝承する人財の育成拠点「グローバルトレーニングセンター」

開発・生産・販売のグローバル化が進む中、世界各国の生産拠点でNo.1の品質を達成するための人財育成は重要な課題です。日産は2006年度、全世界の生産拠点のトレーナー育成を目的とした施設



マネジメント インスティテュートでの研修風景



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
<b>社員とともに</b>	<b>058</b>
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

「グローバルトレーニングセンター（GTC）」を追浜工場と横浜工場（神奈川県）内に、2007年度にはサンダーランド工場（英国）に開設しました。GTCでは、日産がグローバルに採用する人財育成方式「マスタートレーナー制度」に基づき、国内外の生産拠点から選抜された人財を育成しています。

研修を終え、マスタートレーナーの資格を取得した卒業生は、自拠点のリージョナルトレーニングセンターで、グローバルに標準化された教育内容や訓練器材を使用して、現地社員の人財育成にあたります。2008年3月末で455名のマスタートレーナーが誕生しており、現地での人財育成、技能伝承を進めています。また、GTCでは世界5か国語のビジュアルマニュアルをグローバル標準のトレーニングツールとして導入しています。

## 安心して働ける安全な職場を目指して

### 作業環境の改善をグローバルで推進

日産は「人にやさしいモノづくり」を理念に掲げ、「日産生産方式」を基盤としたエルゴノミクス（人間工学）に基づく作業環境の改善をグローバルに進めています。作業の難易度や負荷を客観的に判断する手法をアライアンスパートナーのルノーから導入し、互いに持つノウハウから、作業者の負担低減と生産性向上に向けた活動の共有化を進めています。たとえば、ライン作業者の手の届く範囲に部品を供給し、無理な姿勢や無駄な作業を低減する「ストライクゾーン」という考え方によって作業改善を行い、誰でも楽な姿勢で集中して作業ができるようになり、品質向上にも寄与しています。

また、生産ラインや職場改善に関する情報を共有する場として、「グローバル安全&エルゴノミクス会議」を毎年開催し、グローバルレベルで生産現場の改善を行っています。

### 健康かつ安全な職場づくりを目指した「リスクアセスメント」

社員の「安全」と「健康」を確保することは企業としての責務です。日産では2004年度から「リスクアセスメント」の手法を導入し、工場における作業の危険リスクを事前に察知、予防しています。安全をおびやかす危険リスクに対しては、世界の各拠点から研修生を受け入れ、労働安全に関する実習を行っています。また2007年4月より、日産自動車安全衛生基本方針に、労働災害のみならず全社的な課題として「社員の健康づくり」を取り入れました。



日産グローバルトレーニングセンターでの研修風景

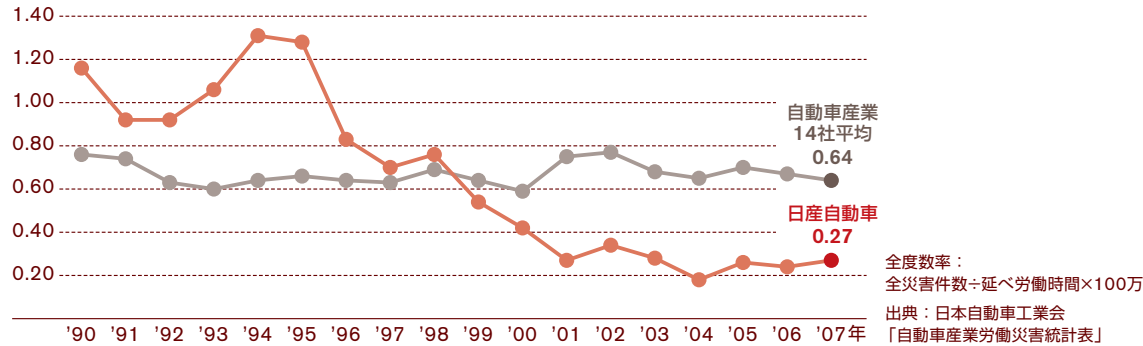


日産生産方式「ストライクゾーン」  
改善前（写真上）：作業者がしゃがんだ姿勢で部品を取り付ける

改善後（写真下）：クルマを昇降式コンベアで上下させることで、無理のない姿勢で部品を取り付ける

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
<b>社員とともに</b>	<b>058</b>
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 労働災害発生概況(全度数率)



## 外部専門機関と連携し、質の高いメンタルヘルスカケアを提供

日産は、精神科の医師を中心とした専門チームを結成し、社員の精神面のケアに取り組んでいます。2005年度からは、外部の専門機関と連携したメンタルヘルスカケアプログラム「アドバンテッジ EAP」を導入し、2007年度には生産ラインで働く社員にも対象を広げました。その結果、日産自動車(株)では、社員とその家族も含めて相談・カウンセリングの利用が可能になりました。さらに、医師からの助言を電子メールで受け取れる、心の健康診断「eMe」を実施するなど、社員のプライバシーにも配慮した、専門性の高いケアプログラムを提供しています。

## 社員の健康維持とHIV/エイズへの取り組み

企業の持続的な発展に社員の健康は欠くことのできない要素です。南アフリカ日産自動車会社では、1999年にHIV/エイズ・ワークプレイス・プログラムを創設、2003年にはこれを発展させた「ウェルネス・プログラム」を導入して社員の健康管理に取り組んでいます。このプログラムでは、HIV/エイズの予防・管理対策、健康相談サービス、HIVカウンセリングおよび検査、HIV/エイズ問題に取り組む地域社会に対する援助活動のほか、サプライヤーに対する健康管理対策を呼びかけています。2006年には自発的カウンセリング・検査を受診する社員の割合を、それまでの21%から52%にまで引き上げることができました。この取り組みは今後もさらに強化し、2011年までに100%の達成を目指しています。

## 日産自動車安全衛生基本方針

私たちは、トップから社員一人ひとりに至るまで、全員が人間尊重の考え方を共に認識しあい、職場環境の最適化、心身にわたる健康増進を積極的かつ継続的に進め、災害や疾病のない明るく活気ある職場づくりを推進する。

日産自動車株式会社 最高執行責任者(COO)

志賀 俊之

安全衛生基本方針宣誓書



南アフリカで実施している「ウェルネス・プログラム」

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
<b>社員とともに</b>	<b>058</b>
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

また、日本では厚生労働省の指導のもと、すべての新入社員にパンフレットを配布し、考え方や予防についての認識を深める活動を行っています。北米日産会社では社員の健康管理の一環として、HIV/エイズや心の病、薬物乱用の治療への適用を含む医療保険に加入しています。米国には民間によるさまざまな医療保険のプランがあり、企業によって加入するプランの内容が異なりますが、日産は自動車業界の中でもトップクラスのベネフィットを提供しています。

Messages from Our Stakeholders  
ステークホルダーからのメッセージ

**互いの多様性を生かして  
会社の成長に貢献**



日産自動車株式会社(日本)  
トータル カスタマー  
サティスファクション本部  
サプライヤー品質保証グループ  
古市 充

2008年3月までの3年半の間、「ダイバーシティ ディベロップメント オフィス」のメンバーとして社内のダイバーシティ(多様性)推進に取り組みました。個々人の違いを尊重する考えが、年を追うごとに社内に浸透していることを実感しました。会社へ貢献できたのと同時に、自分自身もダイバーシティ推進の意義を深く理解でき、大きく成長することができました。

現在在籍しているグループでは、クルマの調達部品の品質を向上する活動を行っていま

す。メンバーは、性別、国籍、社内外での業務経験など、実に多様性に富んだ構成となっています。全世界のサプライヤーの方々と一緒に仕事をさせていただくうえで、相互発展の関係を築くためにメンバーの多様性は非常に大きな強みです。この多様性を生かし成果をあげていくことで、日産が品質領域でリーダーになれるよう貢献していきたいと思いをしています。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
<b>ビジネスパートナーとともに</b>	<b>067</b>
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

Enhancing Value for Stakeholders

# ビジネスパートナーとともに

## 価値観を共有し、持続的成長を目指す

日産はビジネスパートナーとの信頼関係を通じて、持続的な成長の実現を目指しています。私たちは自社の要望のみを主張するのではなく、つねに対等な立場からパートナーの意見に耳を傾け、サプライヤー・販売会社とともにベストプラクティスを導く協力関係の構築を心がけています。競争の激しい自動車業界において、ともに切磋琢磨し、互いが持続的に発展していくことを目指しています。

### サプライヤーとともに

#### 公平・公正を基本とした日産の調達の方針

サプライヤーとの信頼関係をより強固なものとするため、日産は透明性のある公平・公正なプロセスを徹底し、取引先を決定しています。国籍、企業規模、取引実績の有無によらず、広く参入機会を提供し、選定にあたっては関係部門が一堂に会してサプライヤーからの提案を横断的に検討します。そして、選定結果は必ず選定プロセスに参加した全サプライヤーに説明しています。

実際の取引においても、「日産グローバル行動規範」(第4項「公平・公正な関係」)を順守し、公平・公正な業務の徹底を高い水準で維持するよう努めています。日常の緊密なコミュニケーションに加え、サプライヤー各社へのアンケートや意見交換を通じて社外の視点からもチェックを行っています。

また、社内への啓発活動として経済産業省から担当者を招き、「自動車産業適正取引ガイドラインについての説明会」を2007年11月14日に開催し、自動車産業の目指す調達上の原則や、下請法および独占禁止法上の留意点などについて社内への徹底を図っています。加えて、11月19日にサプライヤーへの説明会も開催し、サプライチェーン全体での取引の適正化を推進しています。



**「自動車産業適正取引ガイドライン」のポイント**  
～調達戦略の工夫が公正競争と競争力強化を可能とする～

政府は、平成19年2月19日よりまとめた「成長力向上戦略」の中で、下請取引の適正化の推進を策し、主要調達先と取引適正化のためのガイドラインを制定することとした。「自動車産業適正取引ガイドライン」は、この一環として、信頼・情報開示を基本とするガイドラインとして経済産業省が策定したものです。

このガイドラインの目的は、自動車メーカーから、部品、部品加工業者、組立業者までサプライチェーン全体の信頼を確保し、それぞれの競争者による十分な信頼を獲得し続けること、今後業界全体で「公正競争」を実現し、競争力を向上させることです。中でも「開示による公正・公平取引」に関しては、日産ではこれまでサプライヤーとの関係づくりは互いの誠意と信頼の積み重ね、サプライヤーとの共有の考えに基づいて行われてきました。また今回のガイドラインは、各社の成長の機会を公平に確保すること、信頼の基盤として公正な取引を、最も重視して考えています。加えて、ガイドラインのガイドラインとなる下請法(下請代金支払遅延等防止法)への対応も、調達に携わる社内外関係者の理解を得、各社での実践的な取り組みを推進することを目指しています。これはサプライヤー側の成長の機会を確保することです。

本ガイドラインの目的を達成し、信頼を築き、相互成長を促進することを目指しています。今後行われるべき取引の改善は、サプライヤーとの信頼関係の強化から実現されるものと、社内の信頼を築き、公正競争を実現することを目指すとしています。

本ガイドラインのガイドラインとして、公正競争の確保を基本とし、信頼を築き、競争力向上を目指すことを目指しています。本ガイドラインのガイドラインとして、公正競争の確保を基本とし、信頼を築き、競争力向上を目指すことを目指しています。

「自動車産業適正取引ガイドライン」のポイントについてリーフレットを制作し、社員全員に配布

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
<b>ビジネスパートナーとともに</b>	<b>067</b>
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

### アライアンスの購買指針をサプライヤーと共有

日産とルノーの購買部門は、取引を行うにあたって大切にしている価値やプロセスを、「The Renault-Nissan Purchasing Way」という1冊のブックレットにまとめています。すべてのサプライヤーと公平・公正に取引すること、透明性のあるプロセスによってサプライヤー選定を行うという大原則をあらためて明記するとともに、日産とルノーの目標、基本的な考え方、プロセスやマネジメントツールなどを説明しています。ここで述べている考え方は、日産とルノーの購買活動においてグローバルに適用されるもので、全サプライヤーと共有していくものです。日産とルノーでは、このブックレットを日産・ルノー共同購買会社の全世界の1次取引先サプライヤーに配布しました。価値の共有を通じて、日産・ルノーとサプライヤーが双方に有益なパートナーシップを築けるよう努めています。

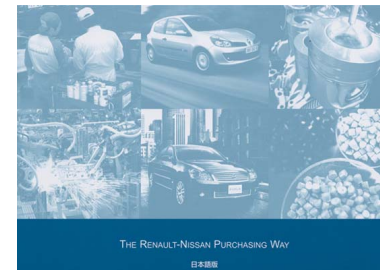
### サプライヤーと協働で取り組むCSRマネジメント

世界各地のさまざまなパートナーと取引を行う日産は、サプライチェーンのあらゆる段階において、倫理的で環境に配慮したビジネスがなされることを目指しています。そのため、前述のブックレットの発行に加えて、2006年度からは、新たなサプライヤーを選定する際に「環境汚染防止」と「児童労働・強制労働の禁止」について、書面によるコミットメントを提出していただく仕組みを導入しています。

また現在、サプライヤーと一体となったCSRマネジメントを遂行するプロセスの構築を進めています。2008年1月22日にはサプライヤー170社を対象にCSR調達に関する説明会を実施しました。日産CSR方針、CSR調達方針や取り組みを説明し、サプライヤー各社での法令順守の徹底やCSRに関する社内体制の充実などをお願いしました。日産は、サプライヤーとともに、社会的なニーズであるCSR活動のさらなる向上を実現していきたいと考えています。

### ベストプラクティスを生み出す「プロジェクトパートナー制度」

日産は、中長期のプロジェクトにおいて早い段階からサプライヤーと一体となって取り組む「プロジェクトパートナー制度」を導入しています。新技術の開発や商品力の向上、効率的な生産投資など、長期にわたって大きな成果が期待できる分野を中心に、日産とサプライヤーが密接に連携してベストプラクティスを目指す制度です。開発早期から協働することにより、いっそうの競争力向上につなげることを目的としています。プロジェクトパートナーとなるサプライヤーも、通常のサプライヤーと同様に、公正で透明なプロセスを通じて選定を行っています。



日産とルノーが共同で発行した  
サプライヤー向けブックレット  
「The Renault-Nissan Purchasing Way」



<http://www.nissan-global.com/JP/COMPANY/LIBRARY/>

ブックレットは、日産の企業情報  
ライブラリーからダウンロードできます。  
あわせてご覧ください。



CSR調達に関するサプライヤーミーティング



「2007年度 日翔会 総会」

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上 046</b>	
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
<b>ビジネスパートナーとともに 067</b>	
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## グローバルで事業に貢献したサプライヤーを表彰

日産では、毎年世界各地の拠点が地域ごとに日産の事業発展に貢献していただいたサプライヤーを表彰しています。これに加えて2005年度には、グローバル サプライヤー アワードとして「グローバル品質賞」と「グローバルイノベーション賞」を新設しました。

グローバル品質賞は、購買部門や品質部門などが、グローバルに統一したサプライヤーの品質評価基準に基づいて選考します。グローバルイノベーション賞は、表彰対象分野を商品技術とプロセスマネジメントに分けて、生産・開発・品質など関連部門の推奨を受けたサプライヤーから選考します。2007年度は、商品技術分野で4社、プロセスマネジメント分野で4社を表彰しました。

日産はこの表彰をきっかけに、品質、コスト低減、技術開発といった経済活動、環境配慮、社会性の側面で、バランスのとれた経営を目指す考え方が、グローバルレベルでサプライチェーン全体に浸透することを期待しています。

## 3者共同で利益ある成長を目指す「日産3-3-3プログラム」

「日産3-3-3プログラム」はサプライヤー、日産の購買部門、開発部門の3者が、コスト低減と高品質を両立させながら、パフォーマンスを最大限に高めていくことを目指す活動です。より競争力の高い商品を生むために、コスト低減の専門家であるコストエンジニアによる科学的な判断と、サプライヤーとの密接なコミュニケーションを基本に、ともにアイデアを出し合い、ベストプラクティスを目指す活動を展開しています。また、グローバルでもサプライヤーの競争力を高めるため、日産からサプライヤーにスタッフを派遣し、協働して生産工程の改善を図っています。



「グローバル サプライヤー アワード」の表彰式

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
<b>ビジネスパートナーとともに</b>	<b>067</b>
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## サプライチェーン全体でグリーン調達を推進

日産は、2001年に自動車の部品・資材のサプライヤーに対する環境面での取り組み基準「グリーン調達ガイドライン」を発行し、日本国内のサプライヤー各社に環境負荷低減の取り組みをお願いしてきました。2006年末時点で、95%以上のサプライヤーが環境マネジメントの国際規格である「ISO14001」、もしくは環境省が策定した環境活動評価プログラム「エコアクション21」を取得しました。

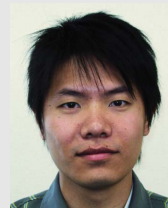
2007年度には、これまで日本だけに適用していた対象をグローバルに拡大するなどの改定を行い、2008年4月より「日産・グリーン調達ガイドライン」として発行、運用を始めました。1次取引先サプライヤーに協力をお願いし、サプライチェーン全体を通じて、環境負荷物質管理の促進と継続的な削減に取り組んでいます。



「日産・グリーン調達ガイドライン」に関するサプライヤーミーティング

Messages from Our Stakeholders  
ステークホルダーからのメッセージ

### お客さまニーズに応える 製品開発を目指して



日本ポリプロ株式会社  
研究開発部 第1材料技術センター  
工業材料1グループ  
料所 祐二 氏

私は日本ポリプロ(株)で自動車用ポリプロピレン樹脂の開発を担当しています。ポリプロピレンという樹脂は非常に多くの用途で使用されています。たとえば、ファイルなどの文具や台所の日用品、食品容器、包装用のフィルム、紙オムツの繊維、使い捨て注射器のような医療器具などです。自動車向けではバンパーや各種内装材、エンジンまわりの部材などに使用されており、日本ではクルマ1台あたり50kg近くのポリプロピレン樹脂が使用されています。

私たちの製品は中間素材であるため、最終製品として使用されるまでのサプライチェーンが長く、お客さまのニーズをとらえることが難しいこともあります。日産自動車とは開発の初期段階から一緒に取り組み、綿密なコミュニケーションで、より良いユニークな製品の開発へと結びつけています。今後も私たちの新技術・新製品を広くグローバルに提案していきたいと思えます。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
<b>ビジネスパートナーとともに</b>	<b>067</b>
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 販売会社とともに

### 日産らしい価値あるサービスを目指す 「ニッサン・セールス・アンド・サービス・ウェイ(NSSW)」

つねにお客さまの視点に立ち、お客さま一人ひとりのご要望に合った対応・サービスを提供するため、日産では「ニッサン・セールス・アンド・サービス・ウェイ(NSSW)」という、販売・サービスの質を高めるための指針をグローバルに定めています。私たちはこの指針をもとに、さまざまなCS\*向上のための活動を実施しています。

活動の例としては、商品知識やお客さま対応力強化を目的としたディーラートレーニング、日産のブランドイメージ向上のための店舗演出ガイドラインの作成、お客さまへのアンケートを通じた満足度調査などがあげられます。これらの活動を、それぞれの国や地域の文化・慣習に合わせて実践し、お客さまがディーラー店舗で経験される購入プロセスや、点検修理などサービスのプロセスで、さらにご満足いただけるようグローバルで取り組んでいます。

※CS：Customer Satisfaction（顧客満足）

### CS向上を通じて日産ブランドに貢献したディーラーを表彰する 「グローバルNSSWアワード」

日産では、世界中の日産ディーラーを対象に、優れたお客さま満足度を実現し、日産のブランド価値向上に大きく貢献したディーラーを選定・表彰しています。

2007年度は、この「グローバルNSSWアワード」を世界31カ国・42社のディーラーが受賞しました（日本2社、米州6社、欧州16社、一般海外地域18社）。

このアワードを受賞した、販売の最前線で活躍する優れたディーラーの活動は、CS経営ノウハウ集にまとめてグローバルに配布しています。「グローバルNSSWアワード」を通じて、世界中の優秀なディーラーの成功事例を共有し、日産のCS向上のための活動が、より高いモチベーションとともに推進されることを目指しています。

### 最新のテストコース「GRANDRIVE」で、販売会社の社員向けに試乗会を実施（日本）

日産は、追浜試験場（神奈川県横須賀市）を整備し、名称を「GRANDRIVE（グランドライブ）」と改め、2007年秋に開設しました。このGRANDRIVEは、従来の走行実験や評価の実施に加え、販売会社を含めた日産グループ社員の日産車試乗を通して、お客さまにその魅力や走る楽しさをお伝えすることを目的としています。1周約4kmのコースの中には、荒れた路面や首都高速道路に見られる段差といった一



「2007年 グローバルニッサン・セールス・アンド・サービス・ウェイ(NSSW)アワード」の表彰式



GRANDRIVEで実施した販売会社の社員向け試乗会



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
<b>ビジネスパートナーとともに</b>	<b>067</b>
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

般道路を再現しており、このコースを走行することにより、日常的な運転の中で味わう日産車の操縦安定性、走行性などの体験が可能です。

2007年9月には販売会社のカーライフアドバイザー向けに、11月には販売会社の就職内定者の入社前研修の一環として、日産車の試乗会を実施しました。この試乗会を通して、カーライフアドバイザー自らがドライビングプレジャー（クルマで走ることの楽しさ）を体験し、それをもとにお客さまに日産車の魅力や走りの楽しさをお伝えすることを狙いとしています。

今後もGRANDRIVEにおいて、国内外の販売会社のスタッフ向けの試乗会などを行い、販売の現場における商品提案力のいっそうの強化を目指していく予定です。

## 新たなVIを導入し、販売店舗のイメージを刷新（日本）

日産は2005年から、日本での販売網である「レッドステージ」と「ブルーステージ」の2系列を統一し、全車種の完全併売化を実施しています。これにともない店舗イメージの刷新を図るため、各販売会社に新たなVI（ビジュアル・アイデンティティ）を導入し、新しい店舗デザインへの切り替えを順次行うとともに、展示車や試乗車のラインアップの充実も図っています。

また、旧村山工場跡地に2007年1月から出店している、大型中古車店舗「カーミナル東京」と新車店舗「東京日産 新車のひろば 村山店」では、新車または中古車購入に迷っているお客さまに対して、2店の相乗効果による最良の選択肢を提供することで、日産のブランド価値をより高める店舗運営に取り組んでいます。



大型中古車店舗「カーミナル東京」

### Messages from Our Stakeholders ステークホルダーからのメッセージ

#### お客さまの満足度向上が 持続可能な収益につながる



ファントゥーリー・ガリー日産  
(オーストラリア)  
社長  
クレイグ ピアース 氏

私たちは長年にわたり、「利益の前にお客さま第一」と肝に銘じてきました。多くの企業は決算上の収益を重視しますが、会社の成功を測る本当の指標は持続可能な収益性です。小売業界で持続可能な利益を得るには、お客さまの満足度を高め、継続的にご来店いただくことにつきますと思います。この点を重視して取り組んだ結果、私たちは5年連続で日産「グローバルNSSWアワード」を受賞しました。これは大変名誉なことです。

お客さまの満足があるからこそ評判が広がり、お客さまとのつながりが生まれます。高い顧客満足度は、持続可能な利益と安定した市場シェアの確保につながると信じています。私はディーラーとして、ステークホルダーとして、販売会社とともに顧客満足度に力を入れている日産の姿勢をたたえたいと思います。また、日産が販売会社に新たな取り組みや目標を随時伝えていることが、相互発展の関係を築くうえで大いに役立っています。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上 046</b>	
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
<b>社会とともに 073</b>	
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

Enhancing Value for Stakeholders

社会とともに

持続可能な社会の発展に貢献するために

日産のビジョンは「人々の生活を豊かに」することです。製品やサービスの提供を通じて社会から必要とされる企業を目指すと同時に、より豊かな未来を次世代に引き継ぐために持続可能な社会の発展に貢献したいと願っています。日産はグローバル社会の一員としてさまざまな分野での社会貢献活動に取り組んでいます。

グローバル企業としての取り組み

社会との共生に根ざした日産の社会貢献活動

日産は社会の持続可能性を実現するため、3つの重点分野「教育への支援」「環境への配慮」「人道支援」を中心に、企業市民として果たすべき支援活動を行っています。実際の活動にあたっては、世界各地の日産の事業所が同じビジョンをグローバルで共有しながら、それぞれの国や地域の実情、ニーズに合った活動を展開しています。事業所近隣では、雇用の創出など経済的な貢献はもとより、社会的な貢献を通して地域コミュニティとの強固な関係づくりに努めています。国や地域を越えて取り組むべき課題には、グローバルな考え方と各地域に最適な活動のバランスをとりながら、日産らしい貢献ができるよう心がけています。

社会貢献 ステアリング コミッティに関する組織図



<http://www.nissan-global.com/JP/CITIZENSHIP/>  
社会貢献の取り組みに関する詳しい情報は、上記のウェブサイトに記載しています。あわせてご覧ください。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
<b>社会とともに</b>	<b>073</b>
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

また、2006年度より「社会貢献 ステアリング コミッティ」を会社横断的な組織として発足、社会貢献活動に携わる部署および役員を集め、より一貫性のある社会貢献活動に向けた議論を活性化させていきます。(前ページ参照)

日産は社会貢献活動への取り組みにおいて、以下のような点が重要と考えています。

### 1. 社員の自発的な参加意識を育てる

社員一人ひとりの社会貢献活動を積極的に支援し、より多くの社員が企業市民意識を持つことにより、大きな社会貢献の輪を育てていきます。

### 2. 会社の強みや特性を生かした活動を考える

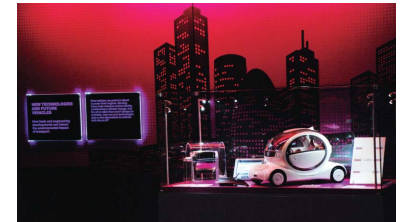
金銭的な支援だけでなく、ノウハウや日産関連施設の活用など、日産が本業で培った資源を十分に生かすことによって、持続的な活動を行うことを目指しています。

### 3. 専門性のあるNPOやNGOとの協働

日産の社会貢献活動をより実りあるものとするために、NPO(民間非営利組織)やNGO(非政府組織)と連携した協働プログラムの可能性を探求していきます。

## ザ・サイエンス・オブ・サバイバルに協賛

日産は、環境教育プログラムおよびグローバルな社会貢献活動として、「ザ・サイエンス・オブ・サバイバル」に協賛しています。ロンドン科学博物館を皮切りに、5年間で全世界20カ所の会場を回るこの展示は、2050年の将来に生活環境がどのように変化しているかを、子どもたちにも分かりやすくインタラクティブに伝えるもので、「ニッサン・グリーンプログラム2010」のエッセンスと先進技術を分かりやすく紹介し、環境問題を考えてもらう仕組みになっています。展示は今後、米国や日本など、多くの国の主要な科学館・博物館で開催される予定です。



「ザ・サイエンス・オブ・サバイバル」

## 日本での社会貢献活動

### 「ニッサン童話と絵本のグランプリ」と「ニッサンゆかいな絵本と童話展」

日産では「教育への支援」の一環として、子どもたちに夢や創造性あふれる童話や絵本を届ける活動を行っています。「ニッサン童話と絵本のグランプリ」はアマチュア作家を対象とした創作童話と絵本のコンテストで、(財)大阪国際児童文学館と協力して1984年から毎年実施しています。2007年度に開



「第24回ニッサン童話と絵本のグランプリ」の表彰式

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
<b>社会とともに</b>	<b>073</b>
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

催された第24回グランプリには、日本全国から寄せられた童話応募作品2,336編、絵本応募作品696編の中から38編の入賞作品を決定し、表彰しました。

大賞に選ばれた作品は毎年出版し、公立図書館（約3,500館）や日産の事業所近隣の幼稚園など（約650園）に寄贈しています。プログラム開始からの24年間で累計寄贈冊数は約15万冊にのぼります。

また、絵本の世界を体験できる「ニッサンゆかいな絵本と童話展」をこどもの城・ギャラリー（東京都渋谷区）で開催しています。本イベントは子どもたちの好奇心や創造力、思いやりの心を育むことを目的に、1992年から（財）児童育成協会と共催しているもので、童話や絵本にちなむさまざまな展示やワークショップを行っています。日産の社員や大学生がボランティアとして多数参加しています。

### 未来の人材を育成する「日産NPOラーニング奨学金制度」

NPOとのパートナーシップにより継続してきた活動のひとつに「日産NPOラーニング奨学金制度」があります。1998年にスタートしたこの制度は、NPOでの活動体験を希望する大学生・大学院生を公募し、活動実績に応じて奨学金を支給するというもの。若者たちがNPOでの体験を通じて創造性や考える力、自ら行動する力を養うことを狙いとしています。10回目を迎えた2007年度は、23大学、34名の応募の中から、書類選考・面接により選ばれた11名の奨学生が、環境、国際協力、福祉などのプログラムに参加しました。2007年10月には日産本社において奨学生を集めた中間報告会を行い、活動の質向上に向けた奨学生同士の情報交換の場を提供しました。

### 教育現場と連携して日産の環境への取り組みを紹介

日産は2007年11月、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）と共催で環境ボランティアを推進する公開講座「環境ボランティア学校」を開催しました。「ニッサン・グリーンプログラム2010」に関する講義のほか、WAVOCに登録している学生25名とグローバル環境企画オフィスの社員が環境に優しい将来の自動車を考えるグループワークのセッションが設けられ、お互いに新鮮な学びの場となりました。

2007年11月には、日産の燃料電池車「X-TRAIL FCV 2005年モデル」による環境出張授業を、栃木県日光市の6校の公立中学校で行いました。この活動は当社環境・安全技術渉外部と日光市教育委員会のコラボレーションにより生まれたもので、2006年度に続き2年連続での実施となりました。300人を超える生徒や先生にFCVを試乗していただき、将来のモビリティ社会を考える場としました。また、日産が協賛した芸術祭「軽井沢八月祭」の開催期間中に、地元の公立小学校3校で環境出張授業を実施。演奏家の送迎に活躍したFCVを活用し、生徒277名に環境授業とFCVへの試乗機会を提供しました。



「日産NPOラーニング奨学金制度」  
第10期修了生



軽井沢八月祭で活躍した燃料電池車  
「X-TRAIL FCV」

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
<b>社会とともに</b>	<b>073</b>
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 「日産ボランティア活動資金支援制度」で社員の社会参加を支援

日産は、社員のボランティア活動や社会参加を資金面から支援する「日産ボランティア活動資金支援制度」を1996年から導入しています。社員のシチズンシップ(市民)意識の醸成を目的に設けられたこの制度は、社員が寄付を行うときに会社からも同額の寄付(マッチング・ギフト)を提供するほか、ボランティア活動や物品購入の費用が不足した際に、それらの資金を援助するものです。日産は、社員による自主的な社会参加や寄付活動を奨励し、社員が積極的に社会貢献活動に取り組めるようサポートしています。

## 地域との協働で全国車いすマラソン大会を開催

日産追浜工場では、2007年11月30日からの3日間、地域の関係諸団体とともに、全国車いすマラソン「日産カップ追浜チャンピオンシップ2007」を開催しました。この大会は、地域の活性化と障害者スポーツの普及を目的とした、地域と企業の協働運営による車いす陸上競技の総合大会です。

8回目となる今大会には、日本トップレベルの選手を含む約200名の選手が参加。追浜工場内のテストコース「GRANDRIVE」や周辺の公道を利用した新たなコースを使用して、フルマラソンとハーフマラソンで構成されたロードレースのほか、短距離タイムレースやジュニアを中心とした初心者向け講習会も実施しました。また、この大会を記念して社員による「太陽募金」を設立し、集まった寄付金を障害者スポーツ振興に役立ててもらうため、障害者陸上競技団体などに贈りました。



車いすマラソン  
「日産カップ追浜チャンピオンシップ2007」

## 学術文化の創成を支援する「日産科学振興財団」

日産科学振興財団は、日本の学術や文化の向上に寄与することを目的に、日産自動車創立40周年(1974年)を記念して設立されました。「社会の進歩のためのソリューションの創成」を活動目標として掲げ、「環境研究」「認知科学研究」「科学・技術教育研究」の主要3分野に重点を置いた助成事業を行っています。一例として、交通問題に関わる持続可能性と環境に対する意識を高め、東南アジアの将来のリーダーを育成することを目的とした、合宿形式のプログラム「Nissan Workshop in IPoS(Intensive Program on Sustainability)」を助成しています。これまでの助成実績は累計で約2,000件、助成金額は60億円にのぼります。

1993年からは新進気鋭の研究者を褒賞する「日産科学賞」を毎年実施しています。2007年度は体内に蓄積される有害酸化物および体内に入る異物・毒物によるストレスメカニズムの研究である「生体の環境適応・応答の分子機構の解明」を選出し、東北大学副学長・医学系研究科の山本雅之教授に同賞を授与しました。この研究は、多くの疾病の分子レベルでの解明につながるものと期待されています。



合宿形式のプログラム  
「Nissan Workshop in IPoS」に助成

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
<b>社会とともに</b>	<b>073</b>
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 製造業ならではの教育支援プログラム「日産モノづくりキャラバン」

2007年7月には新たな社会貢献活動「日産モノづくりキャラバン」をスタートさせました。神奈川県教育委員会とのコラボレーションにより、県内の小学校5年生を対象に開発されたこのプログラムは、組立おもちゃを使ったクルマの製造および工程改善にチャレンジしてもらうセッションと、実際の車両組立で使われている工具類を体験するセッションからなる、日産オリジナルの体験型教育支援プログラムです。モノづくりの楽しさや、チームワークの大切さ、小さな工夫の積み重ねが大きな成果につながることを、子どもたちに直接肌で感じてもらうために企画したもので、第1回目出張授業は2007年7月10日に横浜市立立野小学校にて実施しました。工場見学とは一味違った現場体験を提供する本プログラムを、今後も継続的に行っていく予定です。



日産モノづくりキャラバン号の前で  
全員集合

## 能登半島地震、新潟県中越沖地震による被災地への支援活動

日産は、2007年3月25日に発生した能登半島地震に対して4台のレンタカーを無償で現地のボランティアセンターに提供、現場での効率的なボランティア活動に貢献しました。同時に行った社内募金には総額約200万円が寄せられ、これを社員からの善意として石川県共同募金会などに寄付しました。

2007年7月16日の新潟県中越沖地震で被災した地域に対しては、総額500万円の緊急支援を行いました。300万円は義援金として社会福祉法人中央共同募金会「災害ボランティア活動資金」に寄付し、残りの200万円分でレンタカー4台を無償貸与しました。また、日本経済団体連合会を通じてタオル1,000枚を寄贈したほか、日産の各事業所に備蓄してある簡易食料や飲料水を柏崎市に提供しました。加えて、日産労組と共同で実施した社員募金の寄付金約350万円を新潟県共同募金会などに寄付しました。



復興支援活動に向けてレンタカーを提供

## 北米での社会貢献活動

### 未来のエンジニアを育てる学習プログラムに出資

日産は2007年5月、米国自動車技術会(Society of Automotive Engineers)が出資するSAE財団に150万ドルの寄付を行うことを発表しました。この資金は「A World In Motion (AWIM)」と呼ばれる学習プログラムの開発と実施に充てられます。AWIMは、子どもたちに科学、技術、工学、数学分野の実践的な学習体験を提供するもので、技術者を中心とするボランティアを教室に派遣し、生徒や教員たちと一緒に取り組むことで学習効果を高めています。新たに開発するカリキュラムは、小学校に入学し

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
<b>社会とともに</b>	<b>073</b>
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

たばかりの子どもたちに算数や理科のおもしろさを知ってもらおうという試みです。未来のエンジニアや科学者を育てるSAE財団の取り組みを支援することは、日産にとっても大きな喜びです。

## 世界自然保護基金 (WWF) とのパートナーシップ

北米日産会社と世界自然保護基金 (WWF) は、全米の大学の若きリーダーたちを環境保護の有力な担い手として育成するためのパートナーシップを結んでいます。「Nissan-WWF 環境リーダーシッププログラム」は、将来の環境リーダーとして期待される人材に、地球が直面している問題についてより深く学んでもらうことを目的としています。具体的には、環境問題に取り組む科学者や政策担当者、経済人との会合、リーダーとしてのスキルの開発、科学的なフィールド調査の体験、全米各地の仲間との学際的なネットワークづくりなどがあります。

北米日産会社は、年間予算100万ドルのパートナーシップ基金に協力して若いリーダーたちの未来に投資しているほか、WWFの重点保護地域における取り組みも支援しています。WWFの「U.S. Southeast Rivers and Streams」プログラムでは、日産が拠出した資金により、米国南東部で水資源保護活動を行っている地元NGOに少額の助成金を提供できるようになりました。テネシー州に移転した北米日産会社の新社屋近くを流れるハーベス川もその対象に含まれています。この画期的なパートナーシップにより、北米日産会社とWWFはともに地球の未来を支える活動の一翼を担っています。



「Nissan-WWF 環境リーダーシッププログラム」で将来の環境リーダーを育成

## 被災地の清掃活動に社員ボランティアが参加

2008年2月、米国の南東部を竜巻が襲いました。数百人が重軽傷を負い、多くの方が亡くなったり家を失ったりしました。テネシー州中部では竜巻被害を受けた地域の人びとを支援するため、日産社員がボランティアとして被災地の清掃に協力しました。ボランティアたちは自ら道具を持ち寄り、けがをしないよう防護したうえで、多くの地元住民とともにゴミや残がい撤去する作業にあたりました。

さらに復旧活動を支援するため、日産は12万ドルを米国赤十字社ナッシュビル支部に寄付。この資金はテネシー州で救援活動の中心的な役割を担う赤十字社の活動に役立てられました。日産は、近隣地域の人びとを思いやる地域社会の一員でありたいと考えています。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
<b>社会とともに</b>	<b>073</b>
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 欧州での社会貢献活動

### 災害時の衛星通信サービス提供に協力

欧州の統括会社である日産インターナショナル社は、災害時に支援活動を行う世界中の緊急救援組織を支援しています。2008年2月8日にはNGOのテレコム・サン・フロンティエール(TSF)に対して、世界各地の被災地で使用できるよう、日産の四輪駆動車「パトロール」を提供しました。このクルマには衛星通信サービスのユーテルサットが提供するパラボラアンテナが搭載されています。

TSFは、被災地における通信サービスの提供に重要な役割を果たしており、世界のどこで緊急事態が発生しても、24時間以内に専門家チームを派遣できる態勢を整えています。TSFと日産のパートナーシップは、航空宇宙・人工衛星の技術応用を推進し、それらを人道的・社会的利益とすることを目指す国際機関 International Independent Institute for Space and Satellite Solutionsの協力によって実現しました。



世界各地の被災地で使用できるよう、TSFに四輪駆動車の「パトロール」を提供

### 欧州における人道支援

日産インターナショナル社は2007年12月、NGOパートナーであるCAREフランスに、クリスマスカードの購入と郵送にかかる費用4,000ユーロを全額寄付しました。日産インターナショナル社は2005年、環境への配慮からクリスマスカードを印刷せずにインターネットで送付する方法に切り替えました。これによって節約できた資金をCAREフランスに寄付し、世界各地の人道支援活動のために役立ててもらっています。このほか、スペインの日産イベリア自動車会社と日産モトール・イベリカ会社は、国際連合児童基金(ユニセフ)に5,000ユーロを寄付しました。

### スペインの小学生を対象とした工場見学

日産モトール・イベリカ会社は毎週、小学生を対象とした工場見学ツアーを開催しています。8歳から12歳までの子どもたちをバルセロナ工場に招き、自動車がつくられる過程を見てもらう校外学習プログラムです。

日産のクルマづくりへの想いを子どもたちに伝えようと企画したもので、1回約2時間の見学を週2回実施しています。1回の見学には生徒と教職員を含む50名前後が参加します。見学の際には、分かりやすい文章とイラストが入った物語風のガイドブックを用意して、子どもたちの理解の促進に努めています。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
<b>社会とともに</b>	<b>073</b>
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

一般海外地域での社会貢献活動

「日産デザインフォーラム」をアジア各地で開催

日産自動車(株)は、2006年からアジア各地で「クルマのデザイン」をテーマとするフォーラムを開催しました。「イマジネーションファクトリー」と名づけた同フォーラムは、シンガポール、台湾、中国、マレーシア、フィリピン、タイ、香港の地元デザイン振興団体との共催で実施。日産のデザイナーと現地で活躍するクリエイターが、パネルディスカッションを通じてデザインの新たな可能性を探るというものです。フォーラムでは、自動車デザインのトレンドへの理解を深めてもらうため、日産のデザインに対する姿勢や方針、取り組みを紹介する展示も行い、広く一般に公開しました。

このほか、国によってはカーデザイナーや工業デザイナーを目指す学生向けにワークショップを開催しました。「2030年のクルマ」というテーマで作品を描き、それを日産のデザイナーが評価するというイベントには多くの若者が参加し、熱心に取り組みました。延べ2,000名が参加者した「イマジネーションファクトリー」は、自動車メーカーが開催した初めてのデザインイベントとなりました。



アジア各地で開催した「日産デザインフォーラム」

中国を起点にシルクロードを徒歩でたどる募金活動

日産(中国)投資有限公司が開催している「日産10年徒歩シルクロード国際市民徒歩大会」は、シルクロード約7,000kmを10年かけて歩きながら募金活動を行うというイベントです。参加者にとっては、歴史的なシルクロードをたどりながら中国の歴史や美術のすばらしさに触れられるだけでなく、中国の教育や環境問題についてあらためて考える良い機会となっています。このイベントでは、中国の貧困地域にある小学校のための募金活動も行われています。

2006年には、内陸部の貧困地域に住む人びとを列車病院内で無料診療する「健康列車光明行き」事業に対して、日産(中国)投資有限公司が10万元(約140万円)の寄付を行い、主催者の中国商務省と中華健康列車基金会から感謝状が贈られました。



シルクロード7,000kmを10年かけて歩きながら募金活動を行う

中国中西部の小学生を対象とした交通安全イベントに協賛

日産(中国)投資有限公司は2007年9月、中国中西部の小学生たちを対象とした交通安全啓発イベントに協賛しました。この活動は中国道路交通安全協会、中国共産党貴州省委員会宣伝部および貴州省の3つの行政機関が主催したもので、経済発展の途上にある中西部地域の小学生に安全対策グッズを支給するとともに、交通安全意識を身につけてもらおうと企画されました。具体的には、貴州省にある天



中国中西部の小学生にイエローキャップを寄贈

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
<b>社会とともに</b>	<b>073</b>
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

竜小学校と南花苗寨希望小学校の生徒たちにイエローキャップと交通安全のメッセージを添えた学習用品を寄贈したほか、楽しみながら交通安全意識を身につけられる「ちびっこ交通警察リズム体操コンテスト」を開催しました。

### 南アフリカ日産による「アドバッグ」キャンペーン

「アドバッグ」は、日産の看板をリサイクルしたビニール材で生地をつくった通学用カバンです。南アフリカ日産自動車会社（NSA）が企画した「アドバッグ」キャンペーンは、地球環境の持続性や人道的支援を目的としたプロジェクトで、使い終わったNSAの看板を生地素材として再利用し、心身に障害を抱える人びとにバッグの製造を委託しています。完成したカバンは農村地域の小学校に配布され、それまでポリ袋に教科書を入れて持ち歩いていた子どもたちにも大変喜ばれています。

このプロジェクトは2006年から北東部のリンポポ州で始まり、すでに年間1万5,000個以上のアドバッグが贈られました。現在は北西州、クワズール・ナタール州、東ケープ州へも活動の輪を広げています。

NSAでは恵まれない子どもたちを支援するためのさまざまな活動を行っており、「アドバッグ」プロジェクトもそのひとつです。今後は「モバイルアイクリニック（移動眼科診療車）」など他のプロジェクトとも連動させながら、日産独自の地域貢献プログラムとして拡充していく予定です。



使用済みの看板を生地素材として再利用し、通学用バッグを製作・配布している「アドバッグ」キャンペーン

### 南アフリカの教育・職業訓練を支援

南アフリカ日産自動車会社（NSA）では、南アフリカの教育・職業訓練に向けた多くの学習プログラムも支援しています。NSAはこの10年、毎年5月に南アフリカ7州で行われる「Rally to Read（読み書き大会）」に協賛しています。大会では参加企業が提供する読み書きの教材を使用し、集まった教材はその後、南アフリカの農村地域の学校に贈られます。また、教員には生徒の学力に合わせた効果的な教え方ができるよう、トレーニング教材を配布しています。

2007年には、製造を休止した小型車「アルメーラ」シリーズの在庫エンジン15基を地元の学校15校に寄贈しました。これらの学校は、首都プレトリア近郊のロスリンにある日産工場周辺の3州にあり、いずれもモーターの技術訓練をカリキュラムに取り入れています。寄贈したエンジンはそこで学ぶ学生450名の研修に役立てられました。

さらに、南アフリカ産業界の技術力向上を支援するための「学習プログラム」を3年前から実施しています。若者に企業の採用基準を満たす技術力を身につけてもらおうという試みで、これまでに約350名がプログラムに参加しています。参加者はもちろんのこと、南アフリカの製造業全体にとってもプラスとなっています。



各種の教育・職業訓練を積極的に支援している南アフリカ日産自動車会社

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
<b>ステークホルダーへの価値の向上</b>	<b>046</b>
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
<b>社会とともに</b>	<b>073</b>
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 移動眼科診療車「モバイルアイクリニック」を提供

南アフリカ日産自動車会社 (NSA) は、現地の人びとの目の健康を促進する活動を実施しています。プロジェクトの第一歩として、2006年9月には視力検査用機器を装備した日産のバン「インタースター」を「モバイルアイクリニック (移動眼科診療車)」として、保健活動を主催する現地の財団に寄贈しました。計画はその後、NPOの International Centre for Eyecare Educationとのパートナーシップによって拡大し、2008年と2010年にはさらに2台の専用車両を寄贈する予定で、プロジェクト規模は5年間で総額480万ランド (約6,500万円) となる見通しです。

「モバイルアイクリニック」は、南アフリカの農村地域の小学生に眼科検診を提供しています。車内で視力検査を実施し、メガネが必要な子どもたちに年間4,000個ほどのメガネを処方することができます。第1号のバンは2007年からクワズール・ナタール州で活動を始めており、今後は新たに加わる2台を使って活動範囲を南アフリカ全土に広げる予定です。農村地域では身近な医療機関や十分な交通手段が整っておらず、「モバイルアイクリニック」はそうした地域の子どものため、なくてはならないプロジェクトとなっています。



南アフリカの農村地域を巡回診療するモバイルアイクリニック

### Messages from Our Stakeholders ステークホルダーからのメッセージ

#### 日産とともに息の長い社会貢献活動を



ゲートウェイ・ブレッジ (南アフリカ)  
生産管理担当  
スーザン マヴング 氏

私たちゲートウェイ・ブレッジでは、日産の広告看板に使用したビニール材を再利用した通学用カバン「アドバッグ」をつくっています。材料が届くとみな大喜びで出迎えます。この施設で働く障害を持った人びとのほとんどがこのプロジェクトに関わっており、こうした有意義な活動に参加することが彼らの自信や誇りとなっているのです。

南アフリカ日産自動車会社の協力により、私たちゲートウェイ・ブレッジは必要な事業資金

を調達し、息の長い活動を続けることができます。さらに、アドバッグを支給された農村地帯の子どもたちは、教科書を持ち歩くためにポリ袋を使う必要がなくなります。破れたポリ袋が捨てられてゴミになることも減り、日産の支援が地域のゴミ削減にもつながっています。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
<b>地球環境の保全</b>	<b>083</b>
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

Protecting the Environment

**地球環境の保全**

人とクルマと自然の共生を目指して



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

## 地球環境の保全 083

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## Protecting the Environment

# 地球環境の保全

## 環境への取り組みを通じて、 持続可能なモビリティ社会の実現へ

日産の環境理念である「人とクルマと自然の共生」は私たちが描く理想の社会像です。1992年に掲げたこの理念の実現に向けて、商品であるクルマや企業活動が、地球環境にどのような負荷を与えているかをつねに把握し、解決すべき課題の対応に努めてきました。

2008年、京都議定書の第1約束期間が始まり、5月にはニューヨーク商業取引所の原油価格が1バレル130ドルを超えました。2007年11月に承認されたIPCC\*の第4次評価報告書では「気候システムの温暖化には疑う余地がない」と結論づけられ、京都議定書の次の枠組みに向けた国際的な論議が活発化しています。

すでに私たちは炭素制約社会にあるといわれています。地球環境をめぐる課題への挑戦は、私たちのビジネスそのものです。次の、さらにその次の世代に、クルマがある生活という豊かさを提供し続けるために、今何をすべきか。私たちは、中期環境行動計画「日産・グリーンプログラム2010」に基づいて、人とクルマと自然が共生する社会の実現に向けて、誠実かつ革新的に取り組んでいます。

\*IPCC：Intergovernmental Panel on Climate Change 気候変動に関する政府間パネル。国際的な専門家から構成される

## 日産のビジネスと環境

### 未来につなげる、より良い地球環境の実現を目指して

クルマは多くの資源を使用してつくられ、ガソリンやディーゼルなどの化石燃料を主体に走行しています。私たちはグローバル自動車メーカーとして、日産の事業活動が、直接・間接的に環境に及ぼす影響を把握し、最小化していくことに取り組んでいます。そして、環境における究極のゴール「事業活動やクルマの走行時に生じる環境負荷や資源利用を、自然が吸収できるレベルに抑えること」を目標に、私たちが地球の未来に残すフットプリントをできるだけ小さくしていくことを目指しています。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

## 地球環境の保全 083

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

日産のありたい姿は、「シンシア・エコイノベーター (Sincere Eco-Innovator)」です。シンシア(誠実である)ということは、環境問題に積極的に取り組み、真に効果的な対策を実行することを意味します。そして、エコイノベーターとは、持続可能なモビリティ社会の発展のために、お客さまに革新的な商品・技術・サービスを、最適な価値をもって提供したいと考える、私たちの意思を表しています。

日産は、自らの環境に対する取り組みが、持続可能な発展に貢献できる可能性を信じています。現在もっともクリーンなガソリン車からの排出ガスは、1970年代当初の規制レベルと比較して、1/100～1/250にまで低減しています。そして、将来的にはこの値を、大気並みのクリーンなレベルにすることを究極の目標に掲げています。

私たち日産は、「人とクルマと自然の共生」を実現するために、モビリティを通じた環境保全に積極的に取り組んでいきます。

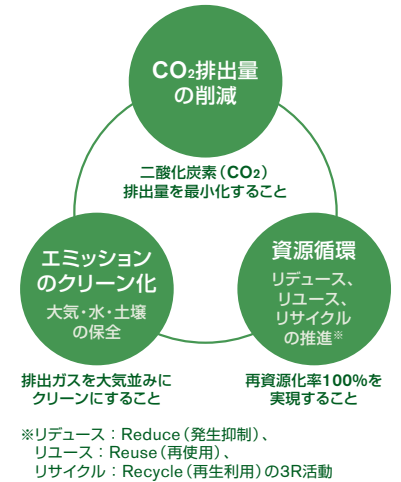
### 究極のゴールと3つの重要課題

私たち日産は、気候変動、環境負荷物質による生態系や人体への影響、鉱物や水資源の枯渇など、さまざまな課題に対し、現在日産が取り組むべき3つの課題「二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)排出量の削減」「エミッションのグリーン化(大気・水・土壌の保全)」「資源循環」を設定しました。そして、日産のクルマや事業活動が環境に及ぼす影響を最小レベルとするために、それぞれに究極の目標を掲げ、その達成を目指しています。

また、これらの課題解決において、お客さまにとって最適なタイミングやコストで商品を提供してこそ、持続可能になりうると考えています。日産にとってとくに優先順位が高い課題である「CO<sub>2</sub>排出量の削減」に対しては、これまでの経営指標であった、品質(Quality)、コスト(Cost)、納期(Time)に、CO<sub>2</sub>を加え、「QCT・C」として、CO<sub>2</sub>の観点からも価値を判断し、全社的にCO<sub>2</sub>マネジメントを実行しています。

### 中期環境行動計画「ニッサン・グリーンプログラム2010」

日産は2006年12月、中期環境行動計画「ニッサン・グリーンプログラム2010」を発表しました。これは、環境における究極のゴールを実現するために、グローバルに日産全体として2010年までに達成すべき目標と取り組みをまとめたものです。従来の「ニッサン・グリーンプログラム2005」を発展させると同時に、環境に対する私たちの認識と決意を強く示しています。日産はこの計画に基づいて、お客さまに魅力のある、真に環境に配慮した商品を提供し、持続可能な社会へのさまざまなチャレンジを実行しています。



NISSAN  
GREEN PROGRAM



[http://www.nissan-global.com/JP/ENVIRONMENT/GREENPROGRAM\\_2010/index.html](http://www.nissan-global.com/JP/ENVIRONMENT/GREENPROGRAM_2010/index.html)

「ニッサン・グリーンプログラム2010」に関する詳しい情報は、上記のウェブサイトに記載しています。あわせてご覧ください。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

**地球環境の保全 083**

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

**環境マネジメント**

**日産のグローバル環境マネジメント**

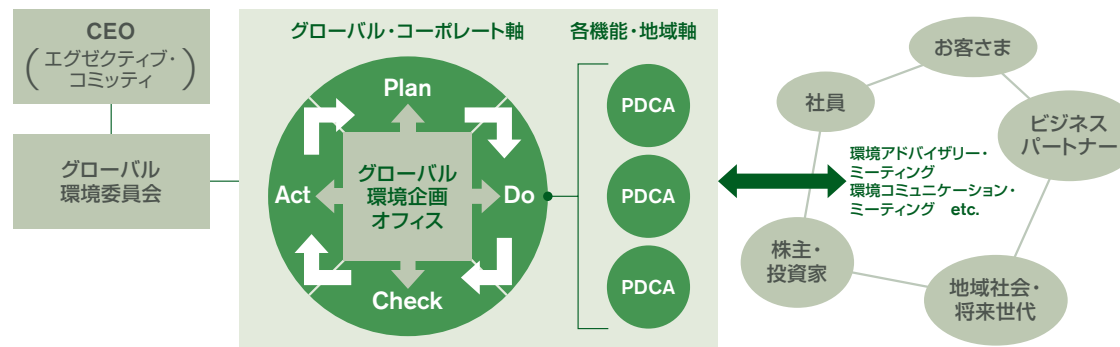
日産は、3つの重要課題を解決するために、商品・技術開発、生産、物流、そしてマーケティング、セールスなど社内の各部門が有機的に連携し、最大の効果が得られるマネジメントが必要であると考え、広範囲な取り組みを着実に前進できるフレームワーク、グローバル環境マネジメントを構築しました。これにより、それぞれの活動領域において目標値とアクションプランを設定し、統合的な活動を推進しています。

**グローバル環境マネジメントのフレームワーク**



また環境マネジメントをグローバルに推進するために、下図のように活動領域を明確にした組織体制を構築しました。最高執行責任者(COO)を議長とするグローバル環境委員会(G-EMC)は、全社的な方針やエグゼクティブ・コミッティ(経営会議)への提案内容の決議などを行います。2007年に設立されたグローバル環境企画オフィスでは、G-EMCへの提案内容や各部門での具体的な取り組みを決定し、PDCA(Plan-Do-Check-Act:計画、実施、評価、改善)に基づいた進捗状況の管理・運用を担っています。

**グローバル環境マネジメント組織体制**



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

## 地球環境の保全 083

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

さらに、これらの社内組織に加え、環境アドバイザー・ミーティングにおける有識者・専門機関などの意見からステークホルダーの考え方を理解し、日産の目標や活動内容を精査します。また、SRI（社会的責任投資）ファンドの動向や格付機関からの評価も参考に、さらなる取り組みの強化を図っています。

### 継続的な環境マネジメントシステムの導入、改善

環境への取り組みを促進するために、生産拠点、販売会社、関係会社を含むグローバル日産グループ各社において環境マネジメントシステムの導入を推進しています。グローバル主要生産工場、開発拠点ではISO14001の導入を推進しています。生産拠点においては、現在、日産および連結製造会社18社中16社で認証取得・運用しています。今後新規に事業展開する地域についても、同じ基準で環境マネジメントシステムを導入していく方針です。

日本の販売会社では、ISO14001認証をベースとした日産独自の環境マネジメントシステムである「日産グリーンショップ制度」を導入し、2008年3月末時点で部品・フォークリフトを含む全販売会社185社の店舗約3,200店を認定。3年ごとに日産本社が更新審査を行い、半年に一度、販売会社自らの内部審査を通じ、継続的な改善に努めています。

### 適用範囲をグローバルに拡大し、商品・開発プロセス業務のISO14001を取得

日産の商品・開発プロセス業務は、1998年度よりISO14001を適用していますが、2008年3月に適用範囲をグローバルに拡大し、認可を取得しました。

「日産・グリーンプログラム2010」に基づき、商品開発領域での確実な達成を目的としてマネジメントシステムを新たに見直した結果、グローバルで一貫したプロセスの構築が可能となり、環境マネジメントのPDCA（Plan-Do-Check-Act）をより効果的かつ効率的に回していく仕組みを確立できました。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

**地球環境の保全 083**

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

**ニッサン・グリーン調達ガイドラインのグローバル化**

日産とルノーの購買部門では、ビジネスパートナーであるサプライヤーとの取引上の考え方を「The Renault-Nissan Purchasing Way」に取りまとめ、それに基づきサプライチェーン・マネジメントを行っています。

加えて、環境については2008年4月、自動車の部品・資材のサプライヤーに対する環境面での取り組み基準をグローバルに拡大し、「ニッサン・グリーン調達ガイドライン」として発行し、運用を始めました。今後サプライヤーとともに日産の環境理念である「人とクルマと自然の共生」の実現を目指していきます。

**ステークホルダーとのコミュニケーション機会の拡充**

日産はさまざまな機会を通じてステークホルダーの皆さまと双方向のコミュニケーションを図り、事業に反映させていくことで、企業価値の向上に役立てています。また、有識者との意見交換は日産の戦略の方向性や目標の軌道修正に役立てており、日産の企業活動に対する第三者からのフィードバックという意味からも、ステークホルダー エンゲージメントを重要なマネジメントの一環と位置づけています。

また、サステナビリティレポートをはじめ、環境の取り組みを紹介した小冊子や子ども用パンフレット、ウェブサイトなどによる情報開示や、展示会、試乗会、工場ゲストホールでの環境パネル展示、環境設備見学、社内コミュニケーション、環境アドバイザー・ミーティングなどを行い、あらゆるステークホルダーの皆さまとのコミュニケーションを図っています。

**外部有識者を招いた「環境アドバイザー・ミーティング」**

日産では、第一線でグローバルに活躍する環境分野の有識者を招いて、経営者層と議論する「環境アドバイザー・ミーティング」を毎年開催しています。このミーティングは、環境というフィールドで日産が目指す方向性や戦略の妥当性について意見を頂き、論議の成果を今後の環境戦略に反映することを目的としています。2007年12月に開催された、第3回目となるミーティングでは、中期環境行動計画「ニッサン・グリーンプログラム2010」発表後の外部からの反響、フィードバックをベースに、今後日産が取るべき課題について議論しました。日産は、これからも外部の方々の意見を真摯に受け止め、積極的に環境戦略に取り入れ、持続可能なモビリティ社会の構築に向けて活動を推進していきます。



「ニッサン・グリーン調達ガイドライン」に関するサプライヤーミーティングを開催



<http://www.nissan-global.com/JP/ENVIRONMENT/>

日産の環境に関するパンフレットは、上記のウェブサイトに記載しています。あわせてご覧ください。



「環境アドバイザー・ミーティング」

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
<b>地球環境の保全</b>	<b>083</b>
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 事業所近隣の小学校などへ環境教育を実施

2006年度より開始した新本社近隣の横浜市立本町小学校への継続的な環境授業のほか、事業所近隣の小学校などへも環境授業を実施しています。2007年度は、環境問題の講義に加え、水素と酸素で走る燃料電池車のキット製作や、本物の燃料電池車(X-TRAIL FCV)に試乗する「理科教室」プログラムを新たに開発しました。クルマを通じて未来のエネルギーを体感してもらうことで、将来を担う子どもたちの環境意識を向上させるとともに、子どもの理科離れ改善への一助となることを目指しています。今後は活動範囲を拡大し、より多くの小学校で授業を実施していきます。



事業所近隣の小学校で環境授業を実施

## 活発な社内コミュニケーションで環境意識を啓発

日産は、環境への意識を向上させるために、社内コミュニケーションにも注力しています。2007年度は、日本で6月の環境月間に合わせて、「NGP2010×環境月間スペシャル」と題したさまざまなプログラムを行い、環境に関する映画の社内上映会を本社をはじめとする計10カ所で開催しました。上映後のアンケートでは「映画の内容は業務を進めるうえで参考になる」との声が多く寄せられました。



社員向け映画上映会

## 社員を対象とした独自の環境教育プログラム

日産では、社員一人ひとりの環境に対する意識の定着・促進を図るため、国内すべての社員に環境教育を実施しています。新入社員には、入社時のオリエンテーションの中で環境の基礎教育を実施し、2007年度もすべての新入社員が受講しました。管理職に対しても、環境保全活動をリードするための知識や認識を高める教育を課長任命時に実施しています。また、環境分野における有識者とのディスカッション形式による教育プログラム、中堅クラスの社員を対象とした環境意識向上教育、技術開発部門のトップマネジメント層を対象とした環境セミナーなど、日産独自のカリキュラムによる環境教育を展開しています。さらに今後は、グローバル日産として取り組んでいく、より体系的な環境教育プログラムの構築を目指しています。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

## 地球環境の保全 083

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

### 社員の環境リテラシー向上への施策「日産環境e-ラーニング」

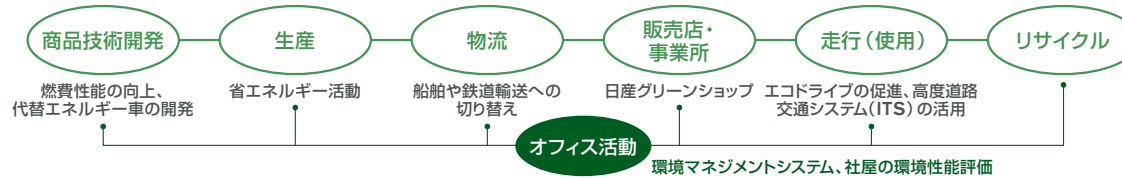
日産は、社員向けの環境教育ツールとして、国際NGOナチュラル・ステップとの協働により、「日産環境e-ラーニング」を作成し、日本で2008年1月から本格的に受講を開始しました。このe-ラーニングは、地球環境のメカニズムや、自動車会社としてなぜ環境に取り組むことが重要なのかを分かりやすく解説した、楽しみながら学べるツールです。今後は日産環境e-ラーニングをはじめとした環境基礎教育プログラムを、連結会社なども含めてグローバルに展開していく予定です。また日産環境e-ラーニングは、その分かりやすさや目的が高く評価され、第4回日本e-Learning大賞において、経済産業大臣賞を受賞しました。

## 二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) 排出量の削減

### 低炭素社会の実現に向けて日産が取り組むべき課題

科学者たちの間では、CO<sub>2</sub>排出量の増加により環境に大きな変化をもたらされているといわれています。CO<sub>2</sub>排出量の削減は、地球規模で取り組むべき課題です。日産では、クルマを生産する時、販売店へ運ぶ時、お客さまがクルマで走行する時、そしてその使命を終えて廃棄される時まで、日産のクルマと事業活動に関わるあらゆる段階でCO<sub>2</sub>排出量の最小化を目指しています。

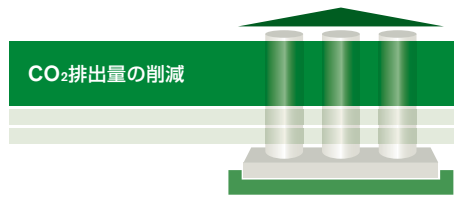
#### 日産のCO<sub>2</sub>排出量削減の取り組み



2007年11月、気候変動に関する政府間パネル (IPCC) の第4次評価報告書が承認され、「気候システムの温暖化には疑う余地がない」と結論づけられました。京都議定書の第1約束期間が2008年より始まり、並行して2013年以降の次の枠組みに向けた国際的な論議が活発化しています。2008年7月の洞爺湖G8サミット、12月のCOP14\*とその動きは加速されると思われます。こうした動きの中で、自動車燃費に対する各国政府の規制もより厳しくなっています。一方、原油価格は2008年5月、ニューヨーク商業取引所の原油価格が1バレルあたり130ドルを超えました。市場でも、お客さまの環境対応技術への要望が高まっています。



「第4回日本e-Learning大賞  
経済産業大臣賞」を受賞



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
<b>地球環境の保全</b>	<b>083</b>
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

すでに私たちは炭素制約社会にあるといわれています。その中で、今、求められるのは“Sense of Urgency”（危機意識）です。私たちが、まず行わなければならないのは、CO<sub>2</sub>排出量の増加を抑制し、削減に転じることです。そこには革新的な技術やビジネスモデルが求められています。低炭素社会に向けて、私たちはその取り組みを加速していきます。

※COP14：気候変動に関する国際連合枠組条約の第14回締約国会議

### 日産のCO<sub>2</sub>排出の現状



### CO<sub>2</sub>排出量削減に向けた日産のアプローチ

CO<sub>2</sub>排出量の削減を確実に前進させるために、技術の果たす役割は大きいと考えます。しかし、技術のみで持続可能なレベルにまでCO<sub>2</sub>排出量を低減させることは容易ではなく、私たちの社会全体が連携して取り組まなければならない課題です。また、技術についても、CO<sub>2</sub>排出量削減のみを追求するのではなく、基本性能やコストにも配慮し、広く普及できるものでなければ、真に持続可能ではありえないと考えます。日産はこうした認識のうえで、製品であるクルマおよび企業活動のすべての領域においてCO<sub>2</sub>排出量削減に向けた活動に率先して取り組み、このチャレンジをオポチュニティに変えていきたいと考えています。

### 経営指標にCO<sub>2</sub>排出量削減をプラスした“QCT・C”

日産は、CO<sub>2</sub>排出量削減への活動を確実なものとするために、グローバルCO<sub>2</sub>マネジメントウェイ“QCT・C”を導入しています。これは従来の経営指標であった、品質（Quality）、コスト（Cost）、納期（Time）に「CO<sub>2</sub>」を加え、全社的にCO<sub>2</sub>排出量削減に取り組むことを示した新たな経営指標です。“QCT・C”の導入により、日産はクルマの燃費だけでなく、すべての企業活動においてCO<sub>2</sub>排出量の削減に向けた取り組みを行い、“QCT”とのバランスを図りながらCO<sub>2</sub>排出量を削減しています。相反しが

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

**地球環境の保全 083**

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

ちなこれらの課題を両立させることは大きな挑戦です。しかし、そこからブレークスルーを導き出し、新たな価値をお客さまに提供することが、日産のビジネスには欠かすことのできない課題と考えます。

**日産が掲げるCO<sub>2</sub>排出量削減の長期目標とロードマップ**

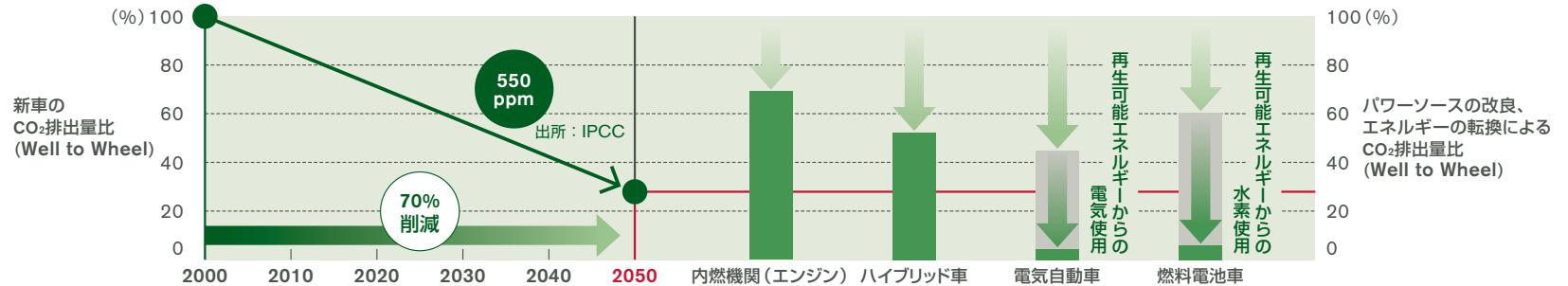
私たちは、CO<sub>2</sub>排出量削減の長期目標を設定し、それに基づいて必要な技術開発を進めています。地球の平均温度上昇やCO<sub>2</sub>濃度をどのくらい抑えなければならないかについては、さまざまな論議があります。私たちは、IPCC第3次報告書に基づいて、地球の平均気温の上昇を2℃以内に抑えるために、大気中のCO<sub>2</sub>濃度レベルを550ppm以下で安定させる必要があると仮定し、新車のCO<sub>2</sub>排出量（Well to Wheel\*）を2050年時点で、2000年比70%低減する必要があると試算しました。（2007年11月に承認されたIPCC第4次報告書における最新の科学的知見に基づけば、さらなる削減が必要となる見込みです。）

パワーソース（動力源）ごとにクルマのCO<sub>2</sub>排出量削減のポテンシャルを見ると、ガソリンエンジンは今後さらに30%程度のCO<sub>2</sub>排出量を削減できる可能性を持っています。したがって、短・中期的にはエンジンの燃費の向上を中心にCO<sub>2</sub>排出量を削減していくことになります。また、CO<sub>2</sub>排出量が少ないディーゼルエンジンについては、課題である排出ガスをクリーン化することが重要と理解しています。

しかし、さらにCO<sub>2</sub>排出量を削減するためには、ハイブリッド車や燃料電池車、電気自動車といった電動車両を普及させていくことが必要となります。これらの電動化技術も、再生可能なエネルギーを利用しなければCO<sub>2</sub>排出量の70%低減という水準に至りません。このため、エネルギーセクターとの連携強化が必須となってきます。

\*Well to Wheel：1次エネルギーの採掘から車両走行による消費までに発生するCO<sub>2</sub>排出総量。クルマからのCO<sub>2</sub>排出量は、石油の採掘から精製、お客さまへの燃料供給に至るプロセス（Well to Tank）も含めて削減する必要があります

**CO<sub>2</sub>排出量削減の長期目標**



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

**地球環境の保全 083**

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

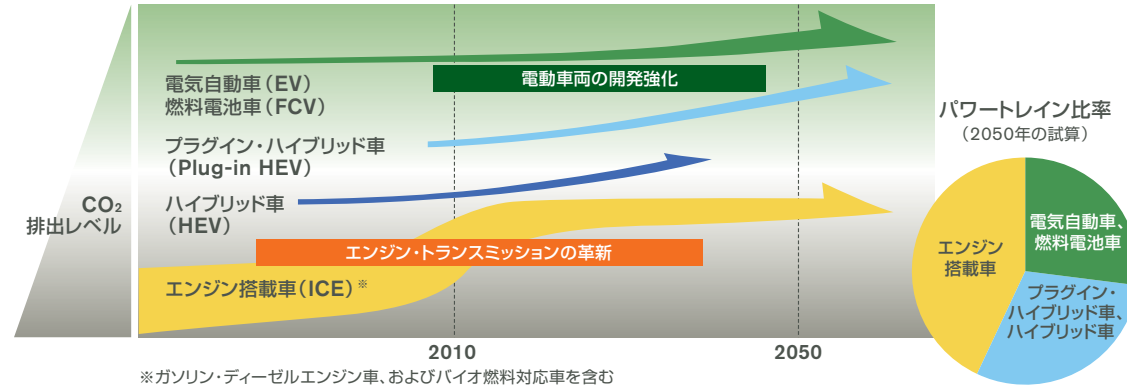
**真の環境保全のために「4つの最適」で技術を広める**

日産は、CO<sub>2</sub>排出量を着実に削減するため、効果的な技術をお客さまのお求めやすい価格で提供し、早く広く普及させる、総量での効果を重視しています。

そのため、「市場に合った最適な技術を、最適なタイミングで、お客さまにとって最適な価値とともに提供する(Right technology, Right timing, Right market, Right value)」という「4つの最適=4 Rights」を技術投入における基本姿勢としています。

この4つのRightに基づき、お客さまや社会のあらゆるニーズに真摯に応えながら、真に価値ある技術を提供していく。それがグローバル自動車メーカーとして果たすべき社会的責任であり、私たちの一貫した誠意を示すものと考えます。

**日産のパワートレインロードマップ**



**走行時のCO<sub>2</sub>排出量削減に向けた包括的なアプローチ**

日産は、クルマ(商品)・人・交通環境の3つの側面から、包括的に走行時のCO<sub>2</sub>排出量削減につながるアプローチを行っています。走行時のCO<sub>2</sub>排出量は、クルマの性能や燃料の種類のほか、操作方法や走行する道路の状況によっても変化します。そのため日産では、CO<sub>2</sub>排出量のより少ないクルマの開発・普及とともに、お客さまへのエコドライブの普及促進や、地域・各国政府・他業界との連携による交通環境の改善に取り組むことで、より効果的なCO<sub>2</sub>排出量の削減を目指しています。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
<b>地球環境の保全</b>	<b>083</b>
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## アライアンスのメリットを活用した効率的な技術開発

日産は、多大なリソースを必要とするCO<sub>2</sub>排出量削減技術の研究・開発を、アライアンスパートナーであるルノーと協働し、共通プラットフォームの開発、エンジンやトランスミッション開発の分担化・共有化などに取り組んでいます。これらの成果として、共同開発したM9Rエンジンをベースに、高性能触媒技術、高度エンジン制御技術など、日産独自の技術を盛り込んだクリーンディーゼルエンジン搭載の「X-TRAIL」を2008年に日本市場に投入します。

## 商品・技術でのCO<sub>2</sub>排出量削減への取り組み

### 2050年、新車のCO<sub>2</sub>排出量70%減を目指して

日産は、2050年までに新車のCO<sub>2</sub>排出量を2000年比で約70%低減することを長期目標に、達成に向けたあらゆるアプローチに取り組んでいます。日産では、各国が定めている測定基準によるクルマの燃費を公表するとともに、お客さまが実際に走行する市街地、高速道路、渋滞などの諸条件を組み合わせた平均的な燃費である「実用燃費」についても社内基準を設定し、燃費向上への指標としています。

また日本と北米は燃費、欧州はCO<sub>2</sub>排出量を原単位に、年間の販売台数に乗じて平均燃費あるいは平均CO<sub>2</sub>排出量を算出し、地域ごとに定めた目標値から、それぞれの規制値達成に向けたCO<sub>2</sub>排出量削減に取り組んでいます。

右のグラフは、日本・米国・欧州の新型乗用車について、販売実績台数に基づいて年間平均CO<sub>2</sub>排出量の推移を示したものです。

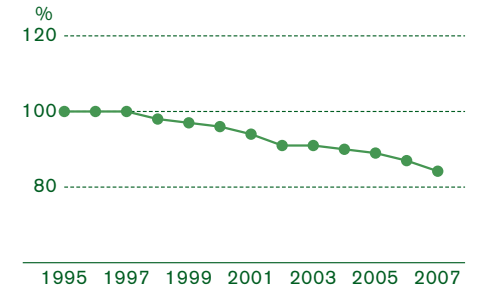
### 新型ガソリンエンジンと無段変速機 (CVT) で燃費向上

ガソリンエンジンのよりいっそうの燃費向上、CO<sub>2</sub>排出量の削減を目指す中で、2006年12月に発売した「ノート 2WD」(CVT)は、1.5リッターガソリンエンジンとエクストロニックCVTの改良により、従来型搭載車と比較して燃費が6%以上向上しました。同時にリサイクル可能率も95%を達成しています。

「ノート」は、日本の「平成22年度燃費基準+20%」と「平成17年基準排出ガス75%低減レベル (SU-LEV)」達成車と認定され、グリーン税制\*において最高額の優遇措置を受けています。

\*グリーン税制：低公害・低燃費車を対象に自動車税を軽減する制度

乗用車の平均CO<sub>2</sub>排出量の推移  
(日本・米国・欧州)



現在、「ノート」をはじめ多くのモデルで  
トップレベルの燃費性能を実現

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
<b>地球環境の保全</b>	<b>083</b>
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

### CVT搭載車の年間グローバル販売台数100万台達成

日産は、「ニッサン・グリーンプログラム2010」において2007年度までにCVT搭載車のグローバル販売台数を年間100万台とすることを目標に掲げ、CVT搭載車の拡大に取り組んできました。その結果、2007年度のCVT販売台数はグローバルで約108万8,000台に達し、乗用車総販売台数に占めるCVT搭載率はグローバルで2004年度の約7%から約28.6%になり、北米では47.7%、日本では43.8%にまで上昇しました。

### VVELをグローバルに投入開始

日産は、ハイレスポンス・高出力・低燃費・クリーンな排出ガスのバランスを高次元で実現する、VVEL（バルブ作動角・リフト量連続可変システム）をV6・V8エンジンに採用し、「スカイライン クーペ」などに搭載してグローバルに投入しました。VVELはアクセルペダルの踏み込み量に応じて、エンジンの吸気バルブの作動角とリフト量を連続的に可変制御し、吸気バルブで直接、吸入空気量をコントロール。さらにC-VTCとの組み合わせによって、バルブタイミングとリフト量の制御が可能となり、吸気抵抗の低減、吸入空気の応答性を飛躍的に向上させ、動力性能の向上とCO<sub>2</sub>排出量を約10%\*低減する環境性能の両立を実現しました。

\*VVEL装着の有無で比較した場合のエンジン単体でのCO<sub>2</sub>排出量削減効果（社内測定値）

### リッター30km以上の燃費実現へ

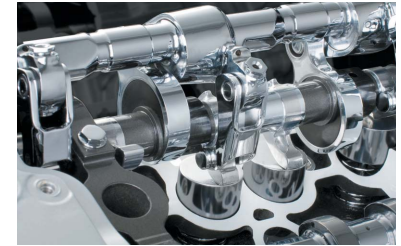
日産は、2010年を目標に、ハイブリッド車と同等レベルまでCO<sub>2</sub>排出量を削減するガソリンエンジンを日本市場から順次投入します。これは、3リッターのガソリンで約100km走行できる、リッター30km以上の燃費を実現するクルマです。効率が非常に高い過給エンジンや次世代CVT、水素フリーDLC・統合制御システムなど多くの先端技術を集積することによって実現します。

### CO<sub>2</sub>排出量の削減に効果的なクリーンディーゼル車の投入

排出ガスを低減したクリーンディーゼル車は、CO<sub>2</sub>排出量の削減に対応する技術として期待されています。日産は、バイオディーゼル混合燃料でも走行するクリーンディーゼルエンジンをすでに欧州市場へ投入しています。2007年には欧州においてクリーンディーゼルエンジンを「キャッシュカイ」から搭載を開始しています。2008年秋には、日本の自動車業界では初となる「ポスト新長期規制」に適合したクリーンディーゼルエンジン搭載車「X-TRAIL」を発売する予定です。そして2010年度には、北米「マキシマ」への搭載をはじめ、さらに中国市場へと順次拡大していく予定です。



CVT搭載車の年間グローバル販売台数が100万台を突破



「スカイライン クーペ」などに搭載しているVVEL



CO<sub>2</sub>排出量が少ないクリーンディーゼルエンジン



クリーンディーゼルエンジン搭載車「X-TRAIL」



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

**地球環境の保全 083**

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

**バイオ燃料100%で走るクルマを開発**

バイオ燃料は、主に植物から生成される、再生可能なエネルギーです。自動車用のバイオ燃料には、大きくバイオエタノールやバイオディーゼルがあります。すでに日産では、世界中で販売するすべてのガソリンエンジン車がバイオエタノールを10%まで混合した燃料(E10)に対応しています。北米では現在、エタノールを85%まで混合した燃料(E85)に対応したクルマ「タイタンFFV」「アルマーダFFV」を発売しています。ブラジルにおいてはバイオ燃料100%で走るクルマを2年以内に販売する予定です。

**バイオ燃料普及を目指す「とかちE10実証プロジェクト」に参加**

日産は、2008年4月より北海道十勝地域で実施される、ガソリンにバイオエタノールを10%混合したE10燃料の普及を目指す国内初の実証実験「とかちE10実証プロジェクト」に参加しています。本プロジェクトへの参加にあたって、「ムラーノ」をベースとしたE10対応車を開発し、日本で初めて国土交通省大臣認定を取得しました。今回のプロジェクトで使用するバイオエタノールは、規格外の小麦やてんさいを原料とするため、食糧供給へのインパクトが小さく、北海道でのガソリン需要量の1% (年間15,000kl) を代替できる可能性を持っています。

**独自システムを搭載したハイブリッド車**

ガソリンエンジンと電気モーターを組み合わせるハイブリッド車(HEV)は、CO<sub>2</sub>排出量が少なく、排出ガスもクリーンという優れた環境性能が特徴です。日産は、2006年に「アトラス20 ハイブリッドモデル」を発売しました。2007年には北米で「アルティマ ハイブリッド」を発売し、さらに2010年度の北米、日本への投入を目標に日産の独自システムを搭載したハイブリッド車を開発します。

**プラグイン・ハイブリッド車の開発を推進**

CO<sub>2</sub>排出量の削減に有効な技術として、プラグイン・ハイブリッド車の研究開発も推進しています。プラグイン・ハイブリッド車(Plug-in HEV)は、家庭用電源からバッテリーに充電した電気エネルギーを使ってモーター走行し、電気自動車と同様にCO<sub>2</sub>を排出しない走行が可能になります。

**次世代燃料電池車**

燃料電池車(FCV)は、水素と酸素からつくる電気エネルギーを動力源として走ります。走行時に排出するのは水だけで、CO<sub>2</sub>や排出ガスを出さないクリーンなクルマです。日産は、70MPaの高圧水素タンクや自社開発の燃料電池スタックなどを搭載した「X-TRAIL FCV」最新モデルでガソリン車並みの航続距離および加速性能を実現しており、2007年には世界で初めて燃料電池車ハイヤーとして日本で営業を開始しています。



北米で販売している、バイオ燃料を85%まで混合した燃料(E85)対応の「タイタンFFV」



日本で初めてE10対応車として認定を取得した「ムラーノ」



「アルティマ ハイブリッド」は、本来の加速感や動力性能を損なうことなく、低エミッションと優れた燃費性能を実現



燃料電池車「X-TRAIL FCV」最新モデル

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

## 地球環境の保全 083

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 新型電気自動車の投入

モーターと電池で走行する電気自動車（EV）も、走行時にCO<sub>2</sub>や排出ガスを出さないクリーンなクルマです。日産は、1960年代から電気自動車の開発を進め、数多くのクルマを発表・販売してきました。今後は、充電設備などインフラの整備を他業界と連携して推進し、2010年度に米国および日本に電気自動車を投入し、2012年度にはグローバルに量産する予定です。

## 電動車両の普及を目指した技術開発

電動車両を実現するための基幹技術は、モーター、バッテリー、インバーターの3つです。これまでも日産はこれらの開発に注力してきました。「日産・グリーンプログラム2010」においても、実用化に向けてモーター、バッテリー、インバーターの進化、コストダウンをさらに推し進めていきます。日産は、バッテリー会社設立を含めた取り組みを継続して、今後さらなるコスト低減と性能の向上を目指し、開発したバッテリーは、ハイブリッド車、次世代燃料電池車や電気自動車への搭載を予定しています。

## NECとリチウムイオンバッテリー量産会社を設立

日産は、日本電気（NEC）、NECトキンとともに、合弁会社オートモーティブ・エナジー・サプライ（AESC）を設立しました。AESCは、2009年度までに、日産だけではなく全世界の自動車産業関連メーカー各社に電気自動車用のリチウムイオンバッテリーの供給を開始する予定です。AESCの設立は、リチウムイオンバッテリー技術が、持続可能なモビリティ社会を実現する重要なソリューションであるとの理解に基づくものです。

## 中国・北京で交通渋滞緩和の取り組み

日産は神奈川県において、ITS\*（高度道路交通システム）を活用した交通事故低減や渋滞緩和などの可能性を検証する「SKYプロジェクト\*」を2006年10月から実施。2007年には中国・北京でも、北京市交通情報センターと協力し、北京市および中国の交通渋滞・環境改善を目的とした新交通情報システムの開発プロジェクト「STAR WINGS」を開始しました。他業種との連携により、自動車メーカーの枠を超えた交通環境改善に向け、社会インフラ実現への取り組みを積極的に行っています。

※ITS：Intelligent Transport Systems

※SKYプロジェクト：Start ITS from Kanagawa, Yokohamaプロジェクト



2007年東京モーターショーで発表された次世代電気自動車のコンセプトカー「Pivo 2（ピボ2）」



従来の半分の大きさで2倍の出力を持つラミネート型リチウムイオンバッテリー



NECとリチウムイオンバッテリー量産会社オートモーティブ・エナジー・サプライを設立



中国・北京で新交通情報システムの開発プロジェクト「STAR WINGS」をスタート

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

**地球環境の保全 083**

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

**カーウイングスでエコドライブ・ランキング**

日本においては、カーナビゲーション情報サービス「カーウイングス」の一環として、楽しみながら継続的なエコドライブに取り組んでいただける環境づくりを提供しています。そのひとつとして、お客さまのクルマの平均燃費を計算し、毎月ランキング形式で燃費をナビ画面やウェブサイトに表示することで、エコ運転を促進しています。

このサービスと、きめ細かく精度の高いルートを提供する「最速ルート探索」の組み合わせにより、「2007年度エコプロダクツ大賞」のエコサービス部門で国土交通大臣賞を受賞。「第18回省エネ大賞（省エネルギー機器・システム表彰）」においては、資源エネルギー庁長官賞を受賞しました。



ECO (エコ)ドライブランキング



<http://drive.nissan-carwings.com/WEB/index.htm>

「ECOドライブランキング」に関する詳しい情報は、上記のウェブサイトに記載しています。あわせてご覧ください。

**事業活動でのCO<sub>2</sub>排出量削減への取り組み**

**グローバルで生産拠点の省エネルギー活動を推進し、CO<sub>2</sub>排出量を削減**

生産過程でのCO<sub>2</sub>排出の主たる要因は、化石燃料を使用したエネルギー消費によるものです。日産は、「日産生産方式」を推進する中で、この課題と正面から向き合い、より少ないエネルギーでクルマの生産を実現するための、さまざまな省エネ活動に取り組んでいます。

生産技術の分野では、より効率の高い生産設備の導入や工法の改善、省エネ型照明の採用などがあります。また運営面では、照明や空調設備の細かな管理やロスの少ない操業の徹底を図っています。そしてこれらの取り組みや最適手法をグローバルの生産拠点で共有化し、CO<sub>2</sub>排出量の削減を推進しています。

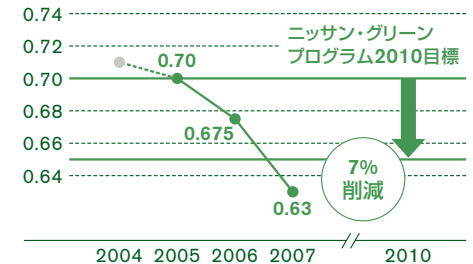
さらに生産拠点では、それぞれの立地条件に合わせた自然エネルギーの活用の取り組みを始めており、2005年には英国日産自動車製造会社の工場内に風力発電機を導入したほか、日本においても、日産自動車横浜市の風力発電事業「Y-グリーンパートナー」に参加しています。太陽光エネルギーについても、スペインの日産モトール・イベリカ会社が太陽光発電パネルを設置したほか、メキシコ日産自動車会社では、太陽熱エネルギーを利用した温水設備を導入しています。

日産は、日本の先行した省エネルギー技術を世界の各工場に波及させるとともに、各国の工場が相互に学び合い、ベストプラクティスを共有しながら、CO<sub>2</sub>排出量の削減活動を推進し、「グローバル台あたりCO<sub>2</sub>排出量\*」という指標によって、2010年度までにCO<sub>2</sub>排出量を2005年度比で7%削減することを目標としています。

2007年度のグローバル生産拠点における台あたりCO<sub>2</sub>排出量は約0.63トンで、2005年度に比べて約10%減少しました。

\*グローバル台あたりCO<sub>2</sub>排出量：グローバルの日産生産拠点から排出されるCO<sub>2</sub>総量を、日産車の全世界生産台数で割ったもの

**グローバル生産拠点における台あたりCO<sub>2</sub>排出量(t-CO<sub>2</sub>/台)**



※2004年はグローバル主要生産拠点の台あたり排出量

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

## 地球環境の保全 083

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

### 英国日産自動車製造会社 風力発電設備の増強

英国日産自動車製造会社では、2008年3月にサンダーランド工場内に設置している風力発電設備を新たに2基増設しました。2008年度はさらに2基の増設を計画しており、本工場内の風力発電設備は合計で10基となります。風力発電によりまかなわれる電力は、工場全体のエネルギー供給量の約7%となる見込みで、年間約5,600トンのCO<sub>2</sub>排出削減効果が見込まれています。



英国日産自動車製造会社の風力発電

### 物流の積載率向上とモーダルシフトによりCO<sub>2</sub>排出量を削減

生産活動に欠かせない物流の主な担い手は、CO<sub>2</sub>を多く排出するトラック輸送です。このため日産では、状況に応じて鉄道や船舶輸送への切り替えを行うモーダルシフトを推進しています。物流全体で効率化を図り、CO<sub>2</sub>排出量を削減するため、モーダルシフトによるトラック輸送量の低減と部品梱包仕様の改善による積載率向上という2つのアプローチで取り組んでいます。

物流に関わる2007年度の日本国内のCO<sub>2</sub>排出量は約11.1万t-CO<sub>2</sub>でした。また、「ニッサン・グリーンプログラム2010」の目標策定にともない、物流でのCO<sub>2</sub>排出量のマネジメントについて、これまでの算出方法を見直し、改良トンキロ法および燃費法に基づく算出へ変更しました。この改定にともない、対象範囲についても見直しを行っており、2006年度より、完成車や生産用・補修用部品の日本国内輸送、日本国内港間輸送をはじめ、事業所間での社内文書などの郵便配送、産業廃棄物処理、販売会社への広告配布なども把握対象としています。2007年度からは、日本国内港と海外港を結ぶ海上輸送や、北米、欧州、そのほかの地域での国内輸送についても把握・管理を広げています。

#### 積載率向上への取り組み

日産は2000年から、日本の自動車メーカーとして初めて自社手配によるトラックがサプライヤーを回り、必要な部品を引き取る「引取輸送方式」を採用しています。これによって従来サプライヤーが個々のトラックで納品していた「送り込み方式」に比べて積載量が向上し、1日あたり10トントラック2,500台を必要としていた搬入車両を、2,200台にまで削減できました。この引取輸送方式はすでに中国とタイにおいても導入され、今後も各地域に拡大する予定です。

また欧州では、ルノーとの間で部品ならびに完成車の共同輸送を実施しており、英国と欧州大陸間で行っている共同フェリー輸送を他社とも提携を広げて、相互利用による輸送効率の向上に取り組んでいます。

一方、部品を収納する容器の工夫にも力を入れています。日産では、部品を効率的に収納するために、55種類の容器を独自に開発しました。空容器を戻す際に容積を低減する「折り畳み式」を採用し、約10%の積載率向上を実現しました。また、これらの業務を専門とする「部品物流エンジニアリング部」を立ち上げ、計画的な物流のさらなる効率化を図っています。



船舶へのモーダルシフト

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

**地球環境の保全 083**

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

**モーダルシフトによる物流の合理化**

輸送効率の向上とCO<sub>2</sub>排出量低減のために、日産は海上輸送、鉄道輸送へのモーダルシフトを推進しています。日本での完成車輸送については、約60%を海上輸送で行っています。また、上下段に各1台のクルマが積載可能な2段式コンテナの専用列車「日産カーパック」の利用も進めており、2007年度には約6,000台をこの方法で輸送しました。さらに、関東の各部品メーカーから九州工場に向けてトラックで輸送していた部品を、CO<sub>2</sub>排出量が船舶の半分以下となる鉄道コンテナ輸送に切り替えました。

**販売会社、オフィスでの取り組み**

販売関連では、日本国内の全販売会社で行っている日産グリーンショップ活動をいっそう発展させ、包括的なCO<sub>2</sub>マネジメントを導入。2008年度からは、「日産・グリーンプログラム2010」に基づき、販売店が行う事業活動からのCO<sub>2</sub>排出量を管理していきます。

また、オフィスとしては、2007年5月に完成した日産先進技術開発センターにおいて、国土交通省が支援するCASBEE（建築物総合環境性能評価システム）で最高レベルのSランクを取得しました。2009年に竣工する日産新本社も2007年3月に横浜市の自治体版CASBEEの認証を取得、国土交通省のCASBEEのSランクを取得できる見込みです。CASBEEは、日本政府による京都議定書の目標達成計画の中で、住宅の省エネルギー性能の向上を目指す施策のひとつとして掲げられており、日産はこの目標達成に貢献しています。

米国においても、2008年7月完成予定の北米日産新本社はさまざまな環境配慮を施し、エネルギー消費の大幅な削減を見込んでいます。



鉄道へのモーダルシフト



横浜新本社ビル完成予想図



日産先進技術開発センター  
(神奈川県厚木市)

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

## 地球環境の保全 083

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 大気・水・土壌の保全

### 環境性能という新たな価値をクルマに

日産は、クルマの排出ガス規制、使用済み自動車の廃棄時に水や土壌に影響を及ぼす環境負荷物質の使用制限、車室内の揮発性有機化合物（VOC）低減など、さまざまな法規制やそれを超える自主的な目標に適合するクルマをいち早く提供してきました。現在もっともクリーンなガソリン車の排出ガスレベルは、1970年代当初の規制に対して、SU-LEV\*で1/250にまで向上しています。日産は、クルマのライフサイクルや企業活動が、直接・間接的に大気・水・土壌に及ぼす影響を可能な限り最小にとどめ、新たな価値に変えていくこと、そしてそれに応える環境対応技術の開発に力を注いでいます。

\*SU-LEV：Super Ultra-Low Emission Vehicle 平成17年排出ガス規制適合車に対して窒素酸化物（NOx）と非メタン炭化水素（NMHC）を75%低減させたクルマ

### 求められる環境品質をグローバルレベルで

大気・水・土壌に影響を及ぼす物質の使用・排出を低減していくには、クルマの開発・生産・使用・廃棄までのライフサイクルでとらえていく必要があります。

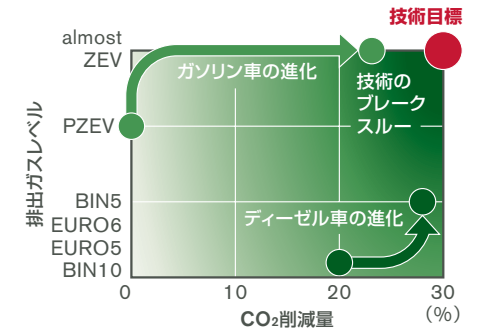
日産の商品が及ぼす環境負荷には、まず車両使用段階での排出ガスがあります。各国の排出ガス規制を見ると、欧州のEURO4\*、EURO5\*、米国EPA Tier2\*規制やゼロ・エミッション車（Zero emission vehicle, ZEV）規制、日本の新長期規制など、その基準がますます厳しくなっています。とくにCO<sub>2</sub>対策として有効なディーゼル車については、今後規制強化が見込まれ、ガソリン車と同等レベルの規制適合が求められていきます。加えて、中国をはじめとした国々においても、日米欧並みの排出ガス規制が、大きなタイムラグなく適用される傾向にあります。

また、車室内で発生するホルムアルデヒドやトルエンなどのVOCによる健康への影響も最小化しなければならぬと考えています。日本自動車工業会は、車室内VOC低減に対する自主取り組みとして、2007年4月以降に日本国内で生産し、発売する新型乗用車から、厚生労働省が定めた指針値指定13物質に対して指針値を満足させることとしています。さらに、生産工場内の塗装ラインで発生するVOCについても最小化が必要です。

材料における環境負荷物質は、欧州ELV指令（使用済み自動車に関する指令）をはじめとする規制において各国で使用制限が進められています。日産は部品のグローバルな調達を拡大していく中で、すべての事業地域で環境負荷物質を削減していくという社会的責任を強く認識しています。さらに2006年



### ガソリン車とディーゼル車の進化



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

## 地球環境の保全 083

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

12月、欧州委員会で採択された新たな化学品規制のREACH規制(Registration, Evaluation, Authorization and Restriction of Chemicals)に沿って、サプライチェーンにまでさかのぼり、幅広く化学物質の使用を管理していきます。

※EURO4、EURO5：欧州連合排出ガス規制第4段階、第5段階  
 ※EPA Tier2：米国環境保護庁による排出ガス規制第2段階

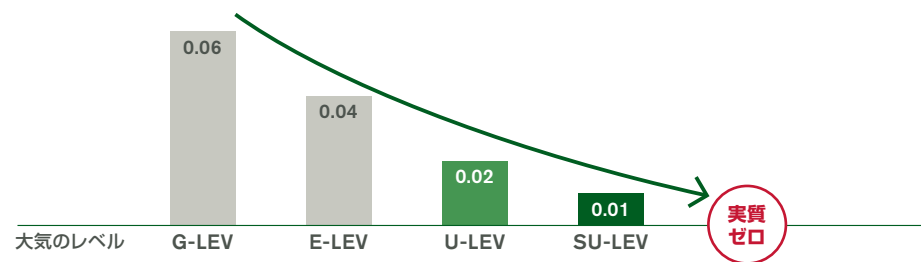
### つねに将来の環境基準を見据えた日産のクルマづくり

日産は環境に配慮したクルマづくりのため、厳しい自主規制や目標を自らに課して、商品の設計や生産活動を行っています。2000年1月、米国で発売した「セントラCA」は、ガソリン車としては世界で初めて、カリフォルニア州大気資源局(CARB)が制定する排出ガス基準値をクリアし、PZEV\*の認定を受けました。また2000年8月には、日本で発売した「ブルーバード シルフィ」が、運輸省(当時)の定める超・低排出ガス車(U-LEV\*)の認定を日本で初めて取得。2003年には、日本で初めて、U-LEVの約半分の排出ガスレベルに相当する「平成17年基準排出ガス75%低減レベル(SU-LEV)」の認定を受け、2007年12月末時点で、日産が日本で販売するガソリン車のSU-LEV比率は85%以上となっています。

今後はさらに「大気並みにクリーンな排出ガス」を究極の目標に掲げ、研究開発を継続。「日産・グリーンプログラム2010」では、各国の排出ガス規制に適合したクルマを早期に市場投入し、順次拡大していくことを2010年までの中期目標としています。

※PZEV：Partial Zero Emission Vehicle 米国カリフォルニア州大気資源局が制定  
 ※U-LEV：Ultra-Low Emission Vehicle 平成12年排出ガス規制適合車に対して窒素酸化物(NOx)と炭化水素(HC)を75%低減させたクルマ

### 低排出ガス車による排出ガス低減の推移と目標(単位：NOx/HC [g/km])



### SU-LEVに適合している主なクルマ



「ティイダ」



「ノート」



「マーチ」



「ブルーバードシルフィ」



「スカイライン」

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
<b>地球環境の保全</b>	<b>083</b>
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## トップレベルの技術を早く広く普及させ、環境負荷総量を削減

日産は、排出ガスのクリーン化は、まずガソリンエンジンから進めることが必要かつ有効と考えています。ガソリンエンジンのクリーン化にはこれまで蓄積してきた、自動車メーカーの中でもトップレベルの触媒技術を生かし、お求めやすい価格で効果の高い技術を提供していきます。

2007年12月時点で、日本における日産の販売台数のうち85%以上が、排出ガスのクリーン度が最高ランクである4つ星のSU-LEVに認定されています。

## ライフサイクルで環境負荷物質を削減

使用材料における環境負荷物質の削減についても、対応を推進しています。法規や指針値などは各国さまざまですが、部品の調達グローバルな領域へ拡大していることから、日産ではグローバルに同一基準で順次対応していくことを方針としています。

クルマの生産過程で発生するVOCについても法規制化に先駆けて、使用の削減と排出量の低減という両面から取り組んでいます。具体的には、VOC排出が少ない水系塗装への計画的な切り替えや、塗料やシンナーの使用量そのものの低減および使用シンナーの回収などにより、VOCの削減に取り組んでいます。

## 商品・技術での大気・水・土壌の保全への取り組み

### 世界をリードする触媒技術で、各国の排ガス規制を早期にクリア

日産は1970年に制定された米国マスキー法への適合にはじまり、世界初のPZEV認定や日本初のU-LEV認定など、触媒技術の分野において世界トップクラスに位置づけられています。

日産は、日本で販売するガソリン乗用車台数の80%をSU-LEVにするという目標を2006年5月に達成し、2007年12月末現在、SU-LEVの比率は85%以上になっています。日産は今後も引き続き、SU-LEVの普及拡大に取り組んでいきます。2005年12月末より中国全土に先駆けてEURO3導入を開始した北京市では、「ティータ」でEURO3の排出ガス基準をクリアし、「シルフィ」ではEURO4の認可を取得しました。さらには他社に先駆け、触媒などの故障を知らせる車載故障自己診断装置(OBD<sup>※</sup>)を搭載し、北京市環境保護局から認可されました。欧州でも、EURO4規制に対し着実な取り組みを進めており、法規の適用に先駆けて、2003年から適合したクルマを投入しています。

※OBD：on-board diagnostic systems 排出ガス制御システムの車載故障自己診断装置



「ティータ」(中国モデル)



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
<b>地球環境の保全</b>	<b>083</b>
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## ディーゼル車のさらなるクリーン化

排出ガスのクリーン化が求められるディーゼルエンジンでは、黒煙を捕集・酸化除去するディーゼルパーティキュレートフィルター（DPF）、NO<sub>x</sub>吸着触媒、酸化触媒などの搭載技術により、将来規制を早期にクリアするクリーンディーゼル車を投入していきます。

2007年には、欧州においてEURO4に対応するDPFを装着した2リッタークラスのクリーンディーゼルエンジンを「キャッシュカイ」に搭載し、投入しました。さらに、日本において2009年10月から施行される新しい排出ガス規制「ポスト新長期規制」に適合するクリーンディーゼル車を2008年秋に投入します。また2010年より、米国EPA Tier2 Bin5、欧州EURO5相当をクリアするクリーンディーゼル車を投入していきます。

### 貴金属の使用量を半減した触媒を新開発

日産は、従来の約50%の貴金属使用量でこれまでと同等のクリーンな排気を実現するガソリン車用の触媒を新たに開発しました。クルマの触媒は、排出ガスに含まれる窒素酸化物や一酸化炭素、炭化水素を、白金などの貴金属を触媒として化学反応させることによって、クリーンにする技術です。従来は、排出ガスの熱によって触媒の浄化性能が低下してしまうため、貴金属を多く使用する必要がありました。しかし、日産は触媒の構造をナノレベルで見直すことで、高熱下でも浄化性能を維持する世界初の技術を開発、エミッションのクリーン化とコスト低減を両立させることに成功しました。新触媒は2008年度から発売する新型車より順次搭載し、普及を促進していきます。

### SU-LEVレベルのクリーンな排出ガスを実現するディーゼル技術を発表

日産は、高性能触媒技術を採用し、米国カリフォルニア州の排出ガス規制SU-LEVレベル（米国EPA Tier2 Bin2と同等）を可能とするクリーンディーゼル技術を開発しました。このHC・NO<sub>x</sub>トラップ触媒技術の特徴は、NO<sub>x</sub>をトラップして浄化する層にHCの吸着層を追加し、吸着したHCと微量のO<sub>2</sub>を利用してNO<sub>x</sub>還元効率の高いH<sub>2</sub>やCOを生成して高効率なNO<sub>x</sub>浄化を実現することです。この技術は、「大気並みのエミッション」を目指すという究極のゴールに向けた重要な技術であり、今後実用化に向けた研究開発をさらに強力に推進していきます。



クリーンディーゼルエンジンを搭載した「キャッシュカイ」（欧州）

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

## 地球環境の保全 083

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

### グローバル統一基準で環境負荷物質を低減

日産は2007年7月以降、グローバルに市場投入する新型車から、重金属4物質（水銀、鉛、カドミウム、六価クロム）および特定臭素系難燃剤PBDE\*類の使用を制限（禁止・削減）、車室内VOCを順次低減しています。

車室内VOCについては、発生を抑えるため、シートやドアトリム、フロアカーペットなど車室内で使用される部材や接着剤などの見直しを行っています。また日本では、2007年以降の新型乗用車で、厚生労働省が指針値を定めた指定13物質に対して、日本自動車工業会の自主目標を前倒しで達成しています。

※PBDE：ポリブロモジフェニールエーテル



車室内VOC濃度を厚生労働省の指針値以下に低減している「ブルーバードシルフィ」（日本）

### 事業活動での大気・水・土壌の保全への取り組み

#### 生産段階における環境負荷削減の取り組み

日産は、生産工程においても環境負荷物質に関する使用および管理基準と仕組みを徹底し、使用量と排出量の双方を低減する活動に取り組んでいます。また、各国それぞれの法規に対しても、より高いレベルでの対応を目指しています。たとえば、日本においてはVOC規制が2006年度施行、2010年より適用されますが、水溶性塗料への切り替えや除去処理装置の設置などにより、前倒しで達成しています。



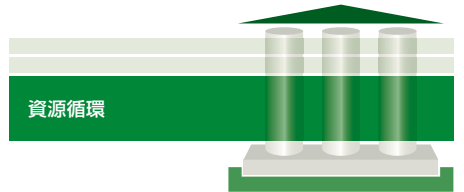
揮発性有機化合物（VOC）が少ない水系塗装ラインへの切り替え（九州工場）

### 資源循環の推進

#### つねに最適な手法でグローバルに資源循環の取り組みを推進

グローバル自動車メーカーである日産は、資源をさまざまな形で使用しています。モビリティがある生活という豊かさを世界中の人びとに提供し続けるために、日産は「資源を大切に有効利用し、環境負荷を最小にする」ことを基本姿勢として、それぞれの地域の事情に合う最適な手法で、資源循環に取り組んでいきたいと考えています。

通常、普通乗用車は1台あたり1～2トンの重量があり、鉄、アルミニウム、樹脂、銅を含むさまざまな限りある貴重な資源からつくられています。また、走行時にはエネルギーとして化石燃料を使用します。昨今の原油価格や希少金属価格の高騰で、これらの資源の有限性の有無によらず、その有効な活用が私たち日産にとってビジネスの根幹に関わる課題であることをあらためて認識させられました。



資源循環

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
<b>地球環境の保全</b>	<b>083</b>
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

こうした中、各国で資源を有効利用するための取り組みが進められています。日本や欧州は、早くから自動車リサイクルを行っており、2000年発効の使用済み自動車に関するEU指令（ELV指令）に続いて、2005年には日本でも自動車リサイクル法が施行され、より高度なリサイクルの仕組みが整備されつつあります。また、韓国でも2008年にELVリサイクル法規が施行され、中国などの新興国でも、自動車の販売台数急増により使用済み自動車が増加すると予測し、対応が始まっています。

## 再び資源として生まれ変わらせるために

日産は、自動車リサイクルによる持続可能なモビリティ社会の実現を目指しています。廃棄物となるものをはじめから減らす（リデュース）、再使用する（リユース）、再生利用する（リサイクル）という3つの視点を基本に、クルマのライフサイクルのあらゆる段階で、限りある貴重な資源を有効利用し、効果的に循環させる取り組みを行っています。

日本においては、「ニッサン・グリーンプログラム2010（NGP2010）」で掲げた目標である「2015年までに使用済み自動車のリサイクル実効率95%達成という自動車リサイクル法の基準を5年前倒しして、2010年での達成」を目指して取り組んでいます。目標達成のためにさまざまな活動を行った結果、当初の目標よりもさらに早く、法の基準を9年、「NGP2010」の目標を4年前倒して2006年度でリサイクル実効率95%を達成しました。

今後はこの活動をグローバルへ広げ、ルノーとの協働による欧州での使用済み自動車回収ネットワークを構築するなど、リサイクル実効率95%達成に向けた活動を推進していく計画です。

開発段階では環境に負荷を与える物質の使用を避けて、リサイクルのしやすさを考慮した設計を行います。また、枯渇性資源の使用量を削減するために、再生プラスチックなどの再生材の利用や、植物由来の再生可能な資源を利用した素材などの利用も検討しています。現在は修理などで交換したバンパーを新車の材料に戻す取り組みを行っており、この取り組みを促進していくとともに、品質の面から技術的に困難だった使用済み自動車から樹脂部品を回収し、新車部品に適用する仕組みの構築も検討中です。

生産段階では、各工程で発生する廃棄物を可能な限り削減、再利用、再生利用します。販売・サービス段階も、再利用部品の提供という重要な役割を担っています。さらに使用済み段階では、クルマの解体のしやすさ、リサイクルのしやすさの観点からさまざまな研究を行い、研究による成果や技術を各段階にフィードバックして、いっそうの改善に取り組んでいます。とくに日産は、クルマの部品をほかの製品にリサイクルするのではなく、可能な限りクルマからクルマへリサイクルし、材料の質を下げないリサイクルを追求しています。

## Global Nissan Recycling Way



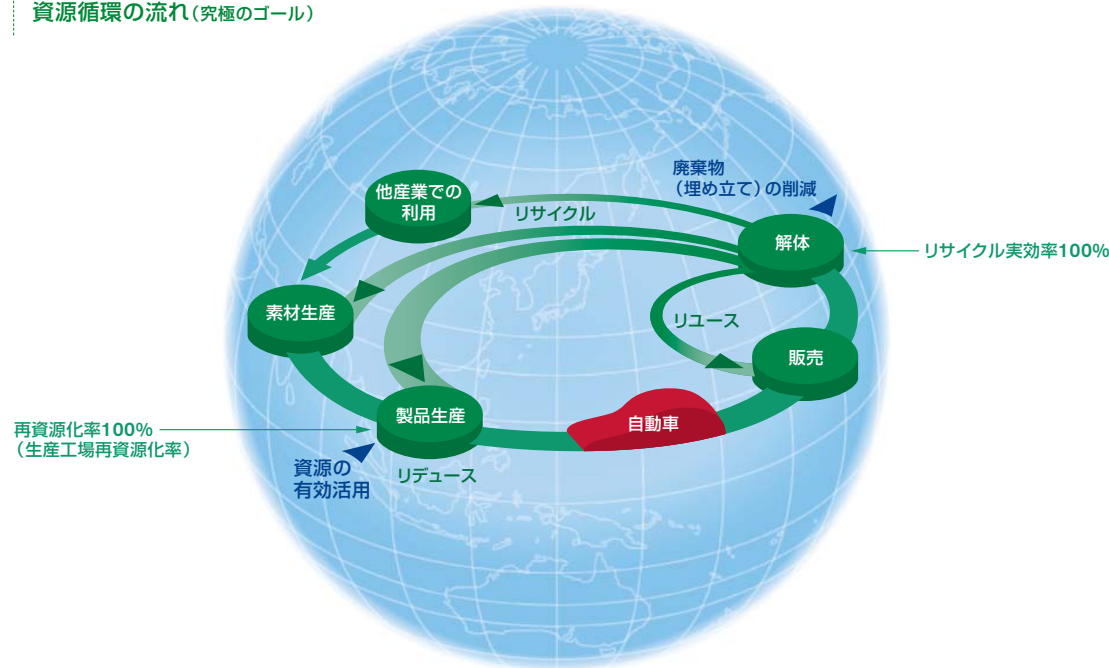
はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

## 地球環境の保全 083

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

これらの取り組みにより、日産は「再資源化率を100%にする」という究極のゴールを目指します。使用済み自動車については、グローバルでリサイクル実効率95%達成に向けた取り組みを進めています。また、持続可能な社会の実現には、社会の多くの方々との連携が不可欠です。日産は資源の有効活用を進めていくうえで、企業の枠を超えたパートナーシップの構築を重視しています。そして、その相乗効果が生み出す、資源循環という大きな輪へつなげていきたいと考えています。

### 資源循環の流れ(究極のゴール)



### リサイクル設計の取り組み(開発段階)

#### 開発から使用後まで、クルマのライフサイクルに配慮した設計を重視

地球上の限りある資源を有効に活用しながら、より環境に配慮したクルマをつくることは、持続可能なモビリティ社会を実現するうえで不可避の課題です。日産では、新型車の設計段階から使用済み後までをトータルで考えた設計・開発に力を注ぎ、環境負荷物質の使用の回避とリサイクルのしやすさにも配慮したクルマづくりに取り組んでいます。日本では2005年以降、すべての新型車でリサイクル可能率95%以上を達成しており、より高い目標に向かって開発を進めています。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

## 地球環境の保全 083

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

さらに、設計の初期からクルマのリサイクル率やリサイクル時のコストを試算できるリサイクルシミュレーションシステム「オペラ (OPERA)」をアライアンスパートナーのルノーとともに開発し、設計プロセスからリサイクル性の向上を目指しています。

### リサイクル可能率95%以上の達成：「スカイライン」の例



### ペットボトルのキャップを回収し、自動車部品にリサイクル

資源を大切にしたいクルマづくりのために、社員全員が参画可能な活動として、日本国内の事業所および一部の関連会社から廃棄されるペットボトルのキャップを回収し、クルマの部品材料として再生する活動を2008年1月からスタートしています。ペットボトルのキャップはクルマの部品にも多く使用されているポリプロピレンという樹脂からできており、地域によっては廃棄物として処理されていました。限りある貴重な資源を最大限に活用する方法のひとつとして、クルマの材料として再生するための仕組みを協力会社と連携し構築しました。私たち日産が目指す「可能な限りクルマからクルマにリサイクルする」活動として取り組むとともに、社員に資源を大切にするマインドを育てるための活動として確実に根づくよう進めていきます。



ペットボトル専用の回収容器

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
<b>地球環境の保全</b>	<b>083</b>
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 資源の有効活用（生産・物流段階）

### 生産過程での廃棄物削減を徹底し、再資源化率※100%を目指す

日産は生産過程における廃棄物を最小化するために、リデュース・リユース・リサイクルの3R活動を積極的に推進しています。「日産・グリーンプログラム2010」では、日本において再資源化率100%の達成、グローバルでは各国の自動車業界のベストレベルを目指した活動に取り組んでいます。その結果、日本では国内4工場と1事業所および国内連結3社が再資源化率100%を達成できました。

※再資源化率：廃棄物発生量のうち、熱回収を含めて再資源化し、活用した廃棄物の割合

### リターナブルパレットなどを使用した容器・梱包材の削減

日産は廃棄物となっていた梱包用の木製パレットを、スチールやプラスチックなどの素材に変更し、パレットのリターナブル化を早くから進めてきました。2001年からはルノーとのリターナブルパレットの共用化体制を推進しており、ほぼグローバルで切り替えを完了しています。さらにアジアでは中国などでも、リターナブルパレットを採用しています。また、部品の梱包方法の見直しを図り、荷物の体積を削減し、梱包材の使用量を削減する活動にも取り組み、紙やビニールなどを素材としていた緩衝材についても、リデュース・リサイクルの視点から、材料の開発・採用をサプライヤーとともに進めています。

## 市場および販売会社におけるリサイクル活動（サービス・使用済み段階）

### 販売会社での環境保全への取り組み「日産グリーンショップ」認定制度

日本国内のすべての販売会社（2008年3月時点で185社、約3,200店）では、お客さまにもっとも近い立場として責任ある環境への配慮を実践するため、ISO14001に準じた日産独自の環境マネジメントシステム「日産グリーンショップ」認定制度を基盤とした環境保全活動を展開しています。各社に環境の担当・統括責任者を配置し、確立された責任体制の下、環境関連法規への対応、使用済み自動車や廃棄物の適正な処理および環境設備管理、お客さまへのPRなどを行っています。



日産グリーンショップ認定ステッカー

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

## 地球環境の保全 083

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

### 限りある資源の有効利用を促進する「ニッサングリーンパーツ」

日産では、使用済み自動車から回収した部品や、修理の際に交換した部品を、回収・品質確認などを行ったうえで、販売会社において、修理用のリサイクル部品「ニッサングリーンパーツ」として販売しています。現在取り扱っている部品は、洗浄して品質を確認した「リユース(中古)部品」と、分解整備して消耗部品の交換を行った「リビルト部品」の2種類、計42品目があります。2007年度の売上高は21.2億円を超えました。

### 使用済みアルミホイールを再生素材として再利用

日産自動車独自の取り組みのひとつに、アルミホイールの回収・リサイクルがあります。日本全国のリサイクル事業者と協力し、日産車のアルミホイールだけを分別回収。不純物の少ない高品位のアルミ再生素材として、金属の質を下げずに、サスペンションなど重要な部品に再利用しています。現在、月平均で約100トンのアルミホイールを回収し、リサイクルしています。

### 使用済み自動車の適正な処理・リサイクルのために、解体実証研究を推進

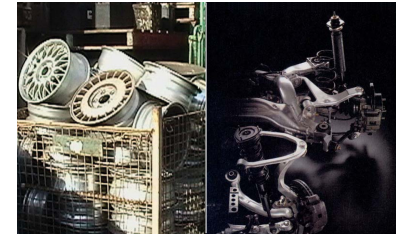
日産は使用済み自動車の適正な処理とリサイクル率向上のために、より効果的な解体方法を開発する実証実験・研究を行っています。すでにこの研究によって得られた成果は、廃油・廃液や鉛などの環境負荷物質、エアバッグ処理装置などに用いられ、現在も高付加価値材料の再利用を目指した、さらなるリサイクル実効率向上への研究が進められています。

また、解体技術の向上と同時に、研究の成果を開発部門にもフィードバックして、解体しやすいクルマの設計や材料設計などに反映しています。

### 業界全体でリサイクル業務の効率化を推進し、自動車リサイクル法に対応

2005年1月に、日本で自動車リサイクル法が施行され、自動車メーカーにシュレッダーダストとエアバッグ類、フロン類の引き取りとリサイクルが義務づけられました。

日産自動車は、自動車リサイクル法に対応し、シュレッダーダストのリサイクル業務の効率的な運用のため、自動車メーカーなど11社とリサイクル促進チーム「ART(エイ・アール・ティ)\*」を結成。ARTのリーダーとして社会と連携しながら、業界全体でリサイクル業務の効率化を推進しています。



使用済みアルミホイールの再生利用によるサスペンション部品



解体実証実験風景

#### 3品目の再資源化実績の概要 (2007年4月～2008年3月実績)

シュレッダーダスト	引取量	134,935.7t
	再資源化量	97,195.7t
	再資源化率	72.0%
エアバッグ類	引取重量	48,248.8kg
	再資源化重量	45,481.5kg
	再資源化率	94.3%
フロン類	引取量	164,261kg
払い戻しを受けた受託金総額		¥6,092,098,207
再資源化などに要した費用総額		¥5,956,720,099

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
<b>地球環境の保全</b>	<b>083</b>
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

2007年4月～2008年3月の日産自動車におけるシュレッダーダストの再資源化率は72.0%でした。この結果は、2010年度法定基準(50%)はもとより、2015年度法定基準(70%)をも上回るものです。また、エアバッグ類の再資源化率も、法定基準の85%を上回る94.3%を達成、フロン類については164,261kgを引き取り、適正な処理を行っています。

※ART : Automobile shredder residue Recycling promotion Team

## シュレッダーダストを再資源化

日産は、自動車リサイクル法の制定以前からシュレッダーダストの再資源化に取り組んできました。シュレッダーダストは発熱量が大きく、熱回収する際の温度調節が課題でしたが、技術的にこれを克服。追浜工場の処理炉を一部改良して、2003年秋より、自動車メーカーとしては世界で初めて、自社工場内の既設炉を利用してシュレッダーダストの熱回収による再資源化を実現しました。自動車リサイクル法の施行後は、月間約400トンのシュレッダーダストを処理。燃焼時に発生するエネルギーを蒸気に換え、工場内の塗装工程で有効利用しています。

## アライアンスでリサイクル実効率95%達成に向けた活動を推進

欧州では2000年10月にELV指令が発効され、製造事業者または販売会社(ディストリビューター)は使用済み自動車の回収とリサイクルについて責任を負うことになりました。日産インターナショナル社とフランスのルノー本社は、アライアンスのシナジー効果が得られる地域において、共同でEU各国の使用済み自動車の回収・リサイクル網の構築、EU各国販売会社への支援を行っています。

## 多様な課題に 대응

日産の環境理念である「人とクルマと自然の共生」は、私たちが描く理想の社会像です。私たちは商品や企業活動を生態系(エコシステム)の中に位置づけて、現在日産が取り組むべき3つの重要課題を設定しました。その一方で、求められるものはつねに進化しています。私たちは、「人とクルマと自然の共生」に立ち返って新たな課題を探求し、多様な課題の解決に向けて取り組んでいきます。



[http://www.nissan-global.com/JP/TECHNOLOGY/A\\_RECYCLE/R\\_FEE](http://www.nissan-global.com/JP/TECHNOLOGY/A_RECYCLE/R_FEE)

リサイクルに関する最新の実績は、上記のウェブサイトをご覧ください。



シュレッダーダスト再資源化施設(追浜工場)



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
<b>地球環境の保全</b>	<b>083</b>
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

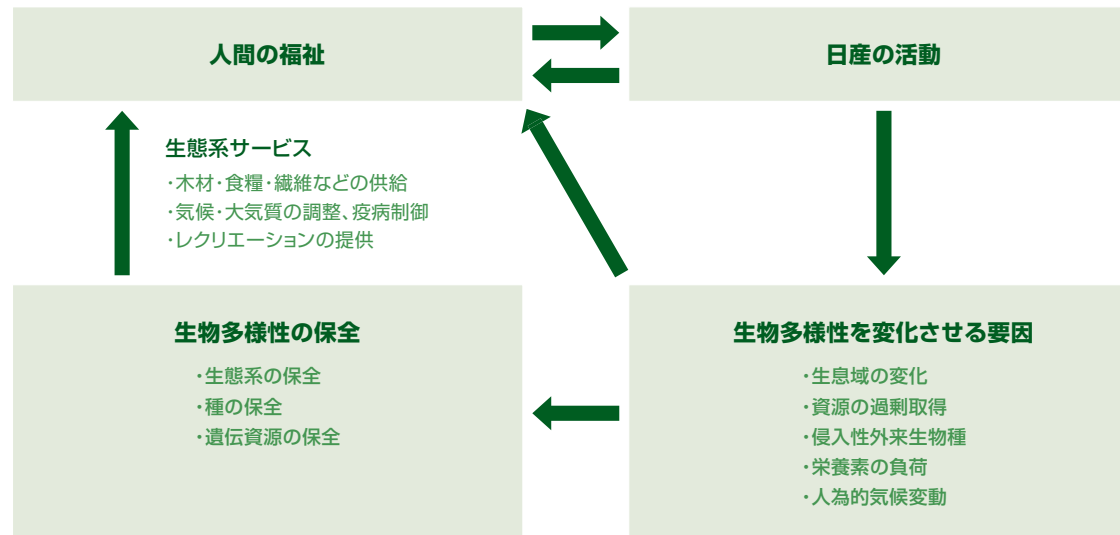
## 水資源の枯渇

2000年の国連ミレニアム・サミットで採択された「ミレニアム開発宣言」に沿ってまとめられた「ミレニアム開発目標」の7つ目のゴール「環境の持続可能性の確保」の中では、「2015年までに安全な飲料水を継続的に利用できない人びとの割合を半減する」というターゲットが掲げられています。日産としても、クルマの生産に使用する水については、使用量の削減や排水の再利用などにより、使用量を抑制する配慮を行っています。

## 生物多様性の保全

「生物の多様性に関する条約」は、1992年リオ・デ・ジャネイロ（ブラジル）で開催された国連環境開発会議（地球サミット）で採択され、条約締約国ごとに取り組みが進められています。また2005年3月には国連を中心とした世界の研究者により「ミレニアム生態系評価」が発表され、生態系の変化が人間の生活の豊かさにとどのような影響を及ぼすかが示されました。日産では「ミレニアム生態系評価」で示されたフレームワークに基づき、日産と生物多様性の関係を以下のように考えています。今後、その中で日産が取り組むべき課題を探索していきます。

### 生物多様性と日産の関係



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073

## 地球環境の保全 083

安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

### 国連大学高等研究所との連携

気候変動、生物多様性保全、水資源を含む地球規模の環境問題の現状および将来を正しく把握し、そこで自動車メーカーが果たすべき役割を明らかにすることは、日産にとって非常に重要なことであると考えています。そしてこのような大きな課題を理解するためには、外部の有識者の方々との連携が不可欠となります。日産は国連機関のシンクタンクとしてミレニアム生態系評価や地球環境概況などのプロジェクトにおいて中心的な役割を担っている国連大学高等研究所とともに、これらの課題についての論議を進めています。

### 「日産プリンス大分の森」育成活動

日産プリンス大分販売株式会社では、「地域・社会に貢献」という企業理念の一環として、「プリンス大分の森」づくりに取り組んでいます。大分県由布市付近の丘陵を大分県庁、森林組合、地主の方との共同で開墾から植林・育成するもので、地域の方々とともに、社員がボランティア参加して活動を行っています。地域環境保護のために、社員と地域が協働で取り組むことによりコミュニケーションを図り、親しみを感じていただける販売店を目指しています。



地元地域の方々と取り組む「プリンス大分の森」づくり

### Messages from Our Stakeholders ステークホルダーからのメッセージ

#### サステナビリティを通じたブランド力向上



ランドーアソシエイツ(米国)  
チーフストラテジーオフィサー  
ラッセル H. マイヤー 氏

日産は、掲げた目標を達成しながら事業とブランド力向上に成功してきました。CO<sub>2</sub>排出量削減などを掲げた環境戦略「ニッサン・グリーンプログラム2010」で環境を重視する企業と認められ、顧客の視点に立った独自のサステナビリティ構想でブランド価値をさらに高めています。

日産には、サステナビリティへの取り組みを通じてブランド価値を向上させる短期的、長期的なビジョンがあります。たとえば、電気自動車の生産はすぐに成果が得られるアプローチ

です。同時に、クルマとドライバーの関係を考慮した取り組みなど、体系的なアプローチも探っているのです。

こうしたビジョンを実現するには、豊かな創造力と多くの企業や各国政府との協力が欠かせません。日産はCO<sub>2</sub>排出量を削減するために、考え抜かれた計画と目標を掲げ、真剣に取り組んでいます。こうした取り組みは現状を変えるための重要なステップであり、その結果、ブランド価値を高めるものだといえます。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
<b>安全への配慮</b>	<b>114</b>
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

Improving Safety

**安全への配慮**

交通事故のないクルマ社会へ



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
<b>安全への配慮</b>	<b>114</b>
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## Improving Safety

## 安全への配慮

## より安全なクルマ社会の実現のために

日産が目指しているのは、運転する人だけでなく、歩行者や他車の乗員を含めたモビリティ社会に関わるすべての人びとに価値を提供し、“走る楽しさと豊かさ”を実現するクルマづくりです。現実の世の中（リアルワールド）で起こりうる自動車事故のリスクの回避、万一の事故に際して被害を最小限にとどめる技術の改良・開発など、クルマの安全性の向上に全力で取り組んでいます。同時に、ドライバーの安全意識向上のための啓発活動やITS\*を活用した運転環境の改善など、自動車メーカーとしてさまざまな角度から、より安全なクルマ社会の実現を目指しています。

※ITS：Intelligent Transport Systems（高度道路交通システム）

## 安全を基本としたクルマづくり

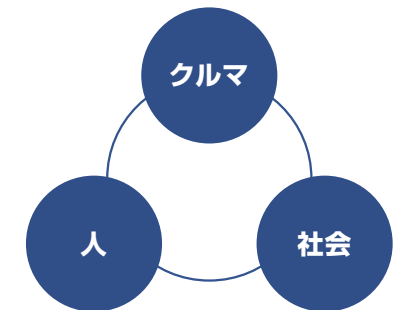
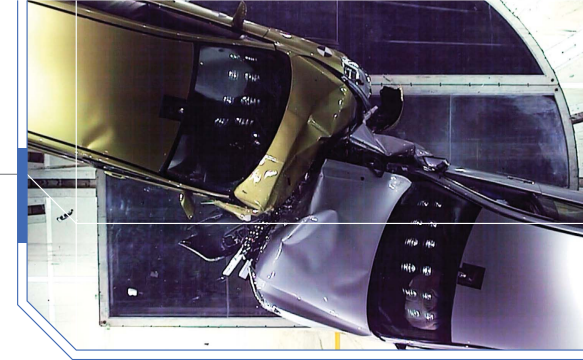
## 安全を支える確かな技術をリアルワールドに

世界中で毎年約100万人もの人びとが、交通事故により尊い命を失っています。日本における2007年の事故死亡者数は5,744人を数え、1953年以来初めて6,000人を下回ったものの、今後さらなる減少に向けた取り組みが求められています。

日産は、リアルワールドセーフティという考え方のもと、「2015年までに日産車の関わる日本での死亡・重傷者数を半減させる（1995年比）」という目標を掲げ、安全なクルマづくりに取り組んでいます。すでに、日本において日産車が関与した事故の1万台あたりの死亡・重傷者数は、2006年時点で1995年比の41%まで減少してきており、着実に成果を上げています。（（財）交通事故総合分析センター調べ）

また、リアルワールドで起きている交通事故データをグローバルに収集し、発生原因や傾向の科学的な分析を行っています。そしてさまざまな実験を通して課題を明確にし、安全技術の開発・改善を進めています。

私たち日産は、より安全なクルマ社会の実現に向け、「近い将来において死亡・重傷事故をゼロにすること」を究極の目標としています。



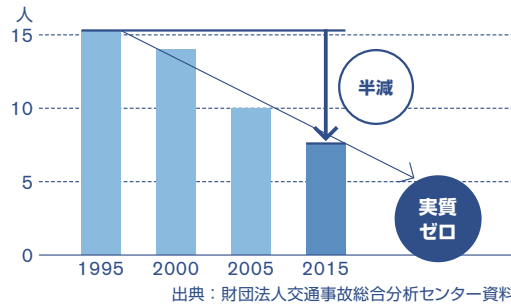
<http://www.nissan-global.com/JP/SAFETY/>

安全の取り組みに関する詳しい情報は、上記のウェブサイトに記載しています。あわせてご覧ください。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
<b>安全への配慮</b>	<b>114</b>
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

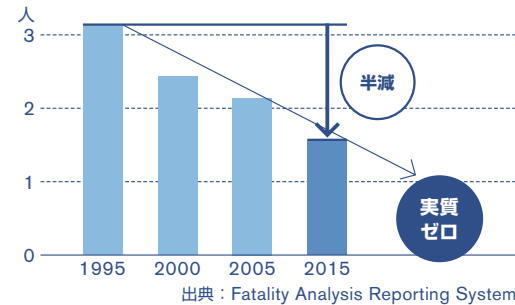
## 日本

日産車1万台あたりの死亡・重傷者数



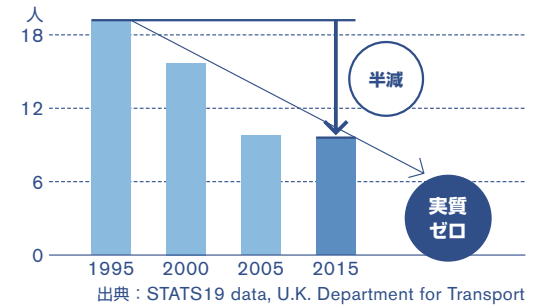
## 米国

日産車1万台あたりの死者数



## 欧州(英国)

日産車1万台あたりの死亡・重傷者数



### 「セーフティ・シールド」の視点から安全技術を開発

日産では、「セーフティ・シールド」という独自の安全に対する考え方に基づき、クルマがおかれている状態を「危険が顕在化していない」状態から「衝突後」に至るまでの6つの段階としてとらえ、「クルマが人を守る」技術の開発に取り組んでいます。

開発にあたっては、運転の主体となる人の視点に立ち、それぞれの状態において発生する危険要因から、さまざまなバリア機能を働かせ、少しでも危険に近づけないよう、ドライバーの運転を支援することに主眼をおいています。さらに万一衝突の避けられない状況に遭遇した場合でも、クルマ自体のシステムが作動し、被害を軽減させる技術を提供します。



SAFETY SHIELD

#### 危険が顕在化していない

- ディスタンスコントロールアシスト (インテリジェントベダル)
- インテリジェントクルーズコントロール (全車速追従・ナビ協調機能付)
- アクティブAFS
- アラウンドビューモニター

いつでも安心して運転できるよう  
ドライバーをサポートする技術

#### 危険が顕在化している

- レンデバーチャープリベンション
- レンデバーチャワーニング
- 4輪アクティブステア

危険な状態になりそうなときも  
安全な状態に戻すよう  
ドライバーをサポートする技術

#### 衝突するかもしれない

- ABS (アンチロックブレーキシステム)
- ブレーキアシスト
- VDC (ビークルダイナミクスコントロール)

#### 衝突が避けられない

- インテリジェントブレーキアシスト
- 前席緊急ブレーキ感応型プリクラッシュシートベルト

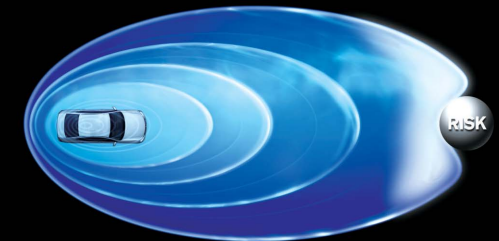
#### 衝突

- ソーンボディ
- SRSエアバッグシステム
- アクティブヘッドレスト
- ポップアップエンジンフード

万一衝突が避けられないときに  
被害を最小限にとどめる技術

#### 衝突後

- ヘルプネット



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
<b>安全への配慮</b>	<b>114</b>
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

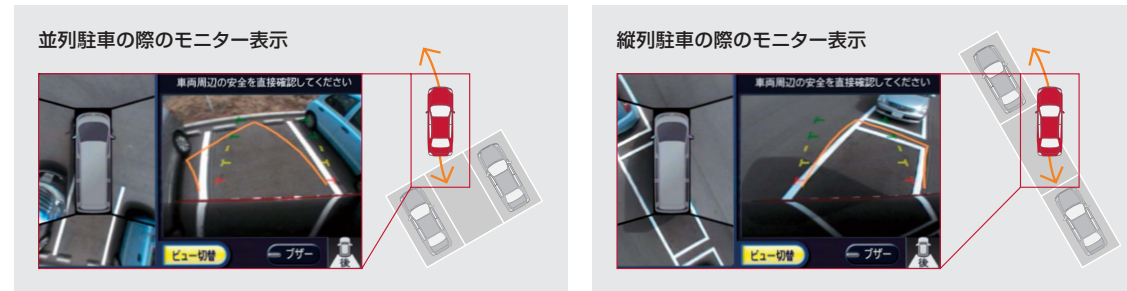
## 新技術紹介

### いつでも安心して運転できるようドライバーをサポートします

#### アラウンドビューモニター

車両の前後左右4カ所に取り付けたカメラからの映像を合成し、自車を中心に車両上方から見下ろしたような映像をナビゲーションモニターに表示するシステムを世界で初めて実用化しました。これによりパーキングスペースと自車の位置関係を簡単に把握できるので、縦列駐車などのコース取りや車庫入れもスマートに行うことができます。

日本において2007年10月に発売した「エルグランド」に世界で初めて搭載し、北米においても2007年12月に発売した「インフィニティ EX35」に搭載しています。



#### ディスタンスコントロールアシスト(インテリジェントペダル) / インテリジェントクルーズコントロール(全車速追従・ナビ協調機能付)

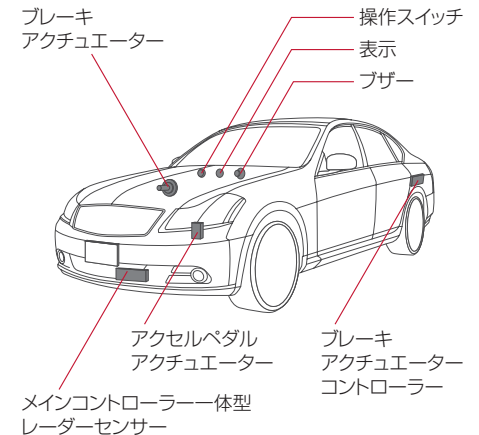
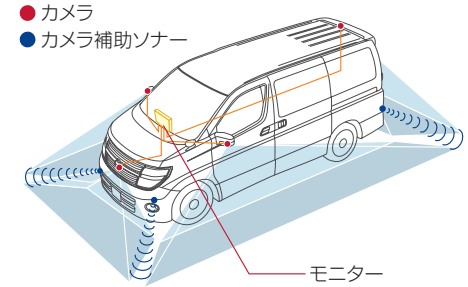
先行車両との車間距離をレーダーセンサーによって検出し、先行車との車間距離や相対速度に応じてシステムがブレーキ制御やペダル操作をサポートし、ドライバーの車間距離の維持を支援する世界初の技術です。たとえば先行車に近づいたとき、ドライバーがアクセルペダルを戻すとシステムが滑らかにブレーキをかけて減速します。また、ドライバーのブレーキ操作が必要とシステムが判断すると表示と音でドライバーへ報知するとともに、アクセルペダルを戻す方向に力を発生させ、ブレーキペダルへの踏み替えを支援します。

2007年12月に日本で販売を開始した「フーガ」にはこのシステムに加え、ナビゲーションシステムからの情報をもとに、前方のカーブの大きさに応じて緩やかに減速し、カーブ路を出て直線路になると、再びドライバーが設定していた車速まで滑らかに加速する、世界初のナビ協調機能を追加した「インテリジェントクルーズコントロール(全車速追従・ナビ協調機能付)」も実用化し、搭載しています。



<http://www.nissan-global.com/JP/SAFETY/INTRODUCTION/COMFORTABLE/>

ほかに、アクティブAFS、サイドブラインドモニターなどがあります。詳しくは、上記のウェブサイトをご覧ください。

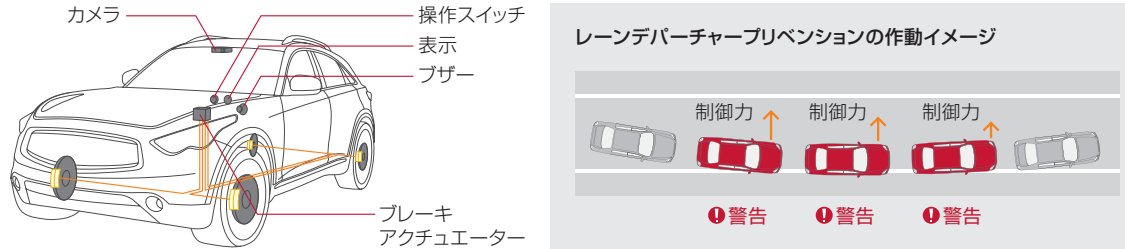


はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
<b>安全への配慮</b>	<b>114</b>
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 危険な状態になりそうなときも安全な状態に戻すようドライバーをサポートします

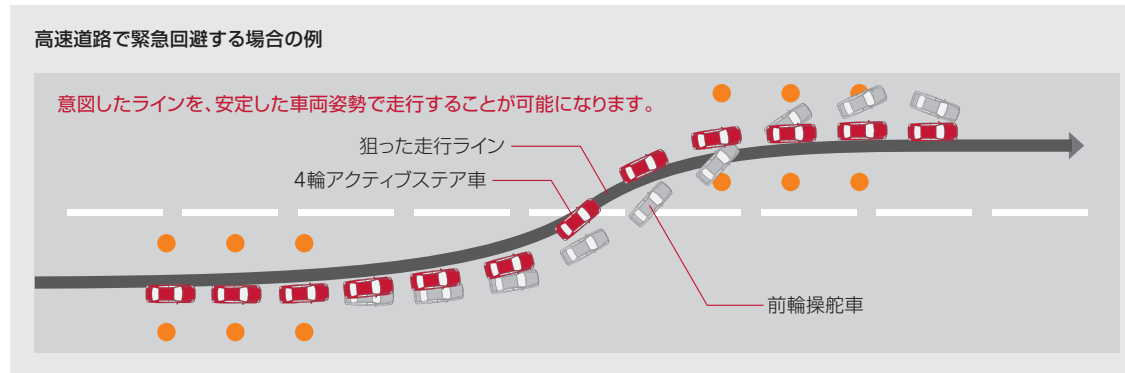
### レーンデパーチャープリベンション

レーンデパーチャープリベンションは、ドライバーが車両の車線逸脱を防ごうとする操作を支援するシステムです。ルーフコンソール内に配置されたカメラで、自車前方のレーンマーカースとの相対位置を検出し、車両が車線から逸脱する可能性があるときシステムが判断した場合は、インストルメントパネルへの表示とブザー音で警報しつつ、車両の向きを変える力を発生させて車線の逸脱を回避するドライバーの操作を支援します。



### 4輪アクティブステア

4輪アクティブステアは、状況に応じて4つの車輪すべての舵角をコントロールします。「フーガ」に採用したリアアクティブステアをベースに、前輪アクティブ操舵機能を追加したもので、高速での安定性と応答性向上および低速でのステアリング操作負荷を軽減します。たとえば、高速道路で緊急回避する場合など、ドライバーが意図したラインを安定した車両姿勢で走行可能にします。また、車速に応じてギア比を変え、ステアリング操作の負荷を軽減しました。駐停車する際のステアリング操作量では、従来比約30%の低減を可能にしています。



<http://www.nissan-global.com/JP/SAFETY/INTRODUCTION/RECOVER/>

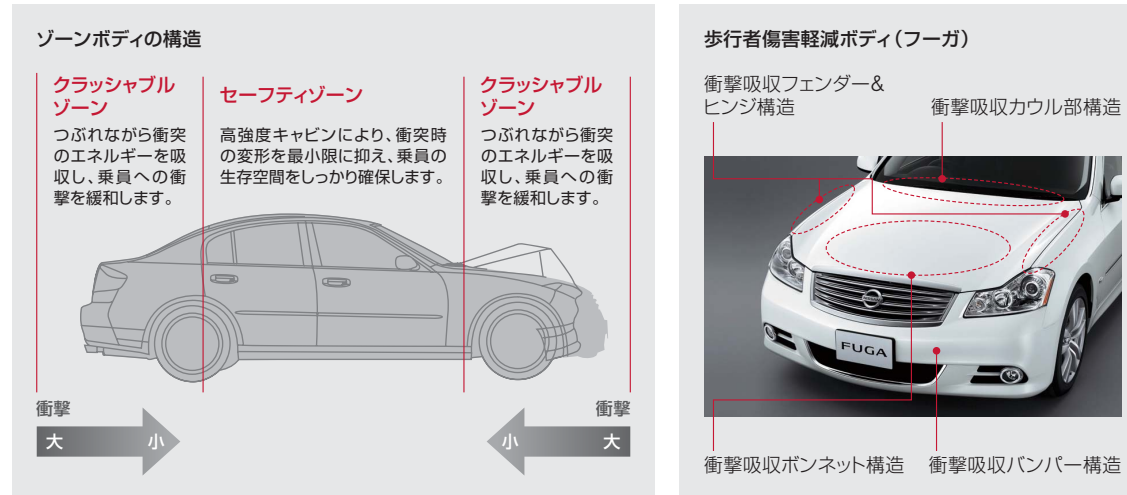
ほかに、レーンデパーチャーワーニングなどがあります。詳しくは、上記のウェブサイトをご覧ください。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
<b>安全への配慮</b>	<b>114</b>
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 万が一衝突が避けられないときに被害を最小限にとどめます

### ゾーンボディ

日産のゾーンボディは「クラッシュアブルゾーン（衝撃吸収ボディ）」で衝突エネルギーを吸収し、「セーフティゾーン（高強度キャビン）」で乗員を守ります。構造については各国の安全基準に適合させるだけでなく、実際の事故分析結果に基づき、つねに社内基準の見直しを図っています。また、歩行者との衝突時に歩行者と触れる部品を変形・脱落しやすくすることで、衝突エネルギーを吸収して傷害の軽減を図る「歩行者障害軽減ボディ」を採用しています。



### ポップアップエンジンフード

ポップアップエンジンフードは、歩行者がクルマと衝突したときに受ける頭部への衝撃を緩和する技術です。衝突の際にエンジンフードの後端を瞬時に持ち上げることで、エンジンフードとフード下の部品の間空間をつくり、頭部への衝撃を和らげます。2007年10月発売の「スカイライン クーペ」から搭載が始まっています。



<http://www.nissan-global.com/JP/SAFETY/INTRODUCTION/UNAVOIDABLE/>

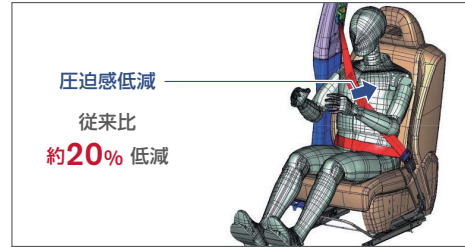
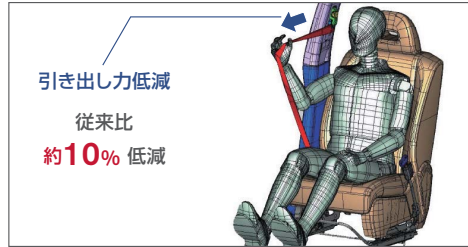
ほかに、インテリジェントブレーキアシスト、前席緊急ブレーキ感応型プリクラッシュシートベルト、SRSカーテンエアバッグ、アクティブヘッドレストなどがあります。詳しくは、上記のウェブサイトをご覧ください。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
<b>安全への配慮</b>	<b>114</b>
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 低フリクションシートベルト

シートベルトの装着は、SRSエアバッグなど他の安全装置の効果を高めるためにも非常に重要です。日産は、シートベルトの着用促進の取り組みをこれまでも積極的に進めてきました。日産の低フリクションシートベルトは、ウェビング（シートベルトの帯部分）をやわらかくすることで、引き出し時の抵抗を従来比で約10%低減し、シートベルトを引き出すときに必要な力を低減させました。同時に、シートベルト着用時の圧迫感を抑え、快適性を向上させたことで着用促進に貢献します。



## クルマ社会への取り組み

### 社会との幅広い連携を通して、安全なモビリティ社会を創造

日産はより安全なクルマ社会の実現を目指して、クルマの安全性を向上させるさまざまな技術の開発に取り組んでいます。さらに、クルマ単独では対処が難しい見えにくい相手（出会い頭や歩行者など）に対応するため、官公庁や大学、他企業とも広く連携し、ITSを活用した実証実験を進めています。また、ドライバー・歩行者に対する交通安全活動などにも積極的に取り組み、死亡・重傷者数をゼロにすることを目指しています。

### ITSを利用した交通事故低減と渋滞緩和を目指す「SKYプロジェクト※」

日産は2006年10月から神奈川県において、「人」「道路」「車両」を情報でつなぐITSを活用し、交通事故低減や渋滞緩和への貢献を目指した「SKYプロジェクト」の実証実験を行っています。SKYプロジェクトは、道路上にある通信設備などのインフラとクルマを連携させ、周辺車両の状況や自車を取り巻く交通環境の情報を利用して、クルマ単独では対応が難しい見えにくい相手に対する交通事故の低減を目指しています。また、カーウイングス会員の車両およびタクシーの走行情報を収集し、日産独自の高度なロジックを用いて加工した交通情報を利用して、従来よりもさらに精度を高めた目的地最速ルート



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
<b>安全への配慮</b>	<b>114</b>
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

ドライバーへ提供し、交通渋滞の緩和を促進します。この実験の特徴は、一般のお客さまに日常の使用過程でシステムの受容性を評価していただくもので、現在2,000人以上の参加を得て行われています。

※SKYプロジェクト(スカイプロジェクト) : Start ITS from Kanagawa, Yokohamaプロジェクト

## ITSによる安全運転支援、事故防止技術への取り組み

日産は、SKYプロジェクトの発展に向けた、さまざまな実験に取り組んでいます。2007年3月には、クルマと信号機を通信でつなく、信号機協調ITSの検証実験を日産のテクニカルセンター構内で開始しました。この実験では、道路横断歩行者優先の信号機を活用した歩行者事故低減のほか、信号情報注意喚起システムの搭載により信号見落としが原因の交差点事故を低減する、といった可能性について研究しています。

また、クルマやそのドライバーと、歩行者が所持する携帯電話を通信させ、クルマ単独では対応が難しい「見えにくい場所にいる歩行者」に対する交通事故の低減を目指すシステムを開発しています。

さらに、寒冷地でのスリップ事故低減を目指した、スリップ地点情報提供システムを開発。2007年11月からの5ヵ月間、北海道警察本部の協力を得て、札幌市周辺に住むカーウイングス会員参加のもと実証実験を行いました。このシステムは、走行している車両のABS(アンチロックブレーキシステム)が作動した場合にその情報をカーウイングスの通信によってセンターで収集し、その周辺を走るクルマのナビ画面上にスリップ地点として表示し、あわせて音声で注意喚起します。また、北海道警察本部の協力を得て、冬季事故地点情報も同様にドライバーへ提供しました。

このほかにも、国土交通省の「先進安全自動車推進計画」に基づき、車両間の相互通信(車車間通信)を利用した先進安全自動車「日産ASV-4」を開発しました。日産ASV-4は、車車間通信を用いた注意喚起システムによって、出会い頭事故などの相手が見えにくい状況においても、ドライバーがいち早く危険を回避するために行動することが可能となります。

## 飲酒運転根絶に向けた技術開発

飲酒運転によって引き起こされる事故は、世界的にその深刻度が年々増えています。日産は飲酒運転の根絶に向けて、ドライバーに飲酒したら運転しないよううながす機能や、さまざまなアルコール検出手段と飲酒運転を防止する技術の開発に積極的に取り組んでいます。

日産が開発した飲酒運転防止コンセプトカーは、クルマがドライバーの状態を評価し、飲酒運転をしている可能性があるかと判断した場合に、必要な注意をうながすための検出方法と報知手段を備えています。



携帯電話から歩行者を検知するシステムの実証実験

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
<b>安全への配慮</b>	<b>114</b>
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

アルコールの検出には、アルコール臭気センサーをシフトレバーに組み込み、ドライバーがレバーに触れた際に手の平の汗に含まれるアルコールを検出。アルコールが検知された場合、音声とカーナビ画面への表示によってドライバーへ警報するとともにシフトロックし、クルマを発進させないようにうながします。また、車室内に配置したアルコール臭気センサーによってアルコールが検知された場合、音声とカーナビ画面への表示により警報を行います。

また、メーター内に装備したカメラによってドライバーの顔をモニターします。居眠り状態など飲酒運転の可能性がある場合、音声とカーナビ画面への表示によって警報するほか、シートベルトを巻き上げるなどして、より強く警報を行います。

日産は、本コンセプトカーによって得られた知見から、さまざまなアルコール検出手段と警報システムについて技術開発と検証実験を進めています。

### 飲酒運転の根絶に向けたさまざまな取り組み

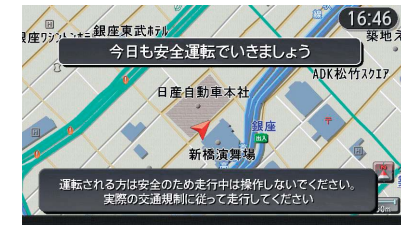
日産は、飲酒運転に対するさまざまな取り組みを積極的に推進しています。2007年8月から2008年1月には、福岡県北九州市、栃木県県庁および上三川町、神奈川県厚木市の各自治体と連携し、エンジン始動時にドライバーの呼気中のアルコール濃度を計測し、規定値を超える場合にはエンジンを始動できないようにする装置を日常業務で使用するクルマに装着し、使い勝手や検出の信頼性などについてモニター調査をトライアルで実施しました。

さらに、産業医科大学産業保健学部（北九州市八幡西区）とともに、飲酒により体内に含まれるアルコールが、生理・心理・行動にどう影響するかを調べる共同研究を実施。本研究では、アルコールによる認知ミス、判断ミス、操作ミスがどのように発生するかを解明することによって、飲酒による運転操作の乱れを早く正確に検出する技術の精度向上につなげていきます。

また、ドライバーに「飲酒したら運転しない」ようにうながすため、カーウイングスナビゲーション（HDD方式）の画面上に、夕刻から夜間（17:30～翌5:00）にエンジンを始動させると約5秒間「お酒を飲んだら、運転はやめましょう」というメッセージを表示させる機能を付加しました。早朝から日中（5:00～17:30）についても、安全運転をうながすメッセージを表示する機能を持たせています。



運転席アルコール臭気センサー



安全運転をうながすメッセージをナビゲーション画面に表示

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
<b>安全への配慮</b>	<b>114</b>
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 地域に根ざした交通安全啓発活動「ハローセーフティキャンペーン」

日産は、春・秋の全国交通安全運動と夏休み期間中の年3回、交通安全活動「ハローセーフティキャンペーン」を毎年実施しています。2007年度は、子どもと高齢者向けの安全啓発に加えて「飲酒運転の根絶」「日常生活にある危険に気づかせ、回避能力が身につく交通安全教育」「シートベルト、チャイルドシートの正しい着用」を重要課題としました。親子で約束を交わし、お子さまとの約束を思い返すことで飲酒運転防止につなげる「おやくそくコースター」を(財)全日本交通安全協会に14万個提供し、全国1,400地区で行われたイベントなどで紹介しました。

また、後席ベルト着用率低迷の現状を踏まえ、シートベルトのタンクとバックルに貼り付ける「シートベルト着用促進シール」を製作し、6都道県に計75,000枚を配布しました。さらに、内閣府などの主催による交通安全フェアに、夕暮れ時・夜間の視認性を高める反射材と、子どもの登下校時における防犯性を高める携帯型防犯ブザーを組み合わせた「反射材ストラップ(防犯ブザー付)」12,000個を提供しました。また、夕暮れ時のヘッドライト早期点灯を呼びかける「夕方はみんなでピカリ」を実施し、関係団体とともに視認性向上の啓発活動を行いました。

## 中国自動車技術研究センターと歩行者保護共同研究を実施

日産は2005年7月から2年半にわたり、中国自動車技術研究センター(CATARC)と「歩行者保護共同研究プロジェクト」を実施してきました。この研究は、これまで中国では調査されたことのないマイクロ事故データの収集・分析により、事故削減、被害軽減の対策を明確化し、歩行者保護に係る国際法規の中国での適用の妥当性を検討すると同時に、中国政府が導入を予定している歩行者保護法規の基礎をつくることを目的としたプロジェクトです。

2008年1月に開催された成果報告会では、本プロジェクトへの評価とともに、国家発展改革委員会、公安部などの関係当局より、日産の協力に対する深い謝意が表明されました。

日産はこれまでも、道路交通安全セミナー、日産セーフティドライビングフォーラム、青少年向け安全教育やイベントの開催、安全法規の作成チームへの参画などに取り組んでおり、今後も中国での交通事故被害者の低減に向けた貢献活動を推進していきます。



夕暮れ時のヘッドライト早期点灯を呼びかける啓発グッズを製作



「歩行者保護共同研究プロジェクト」の成果報告会

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
<b>安全への配慮</b>	<b>114</b>
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 子どもたちを事故から守る、米国での安全推進活動

米国では自動車事故が子どもの最大の死因であり、2006年の統計によると、米国全土で毎日6人の子どもたち（15歳未満）が交通事故で亡くなっています。これは転落や水難、火災、中毒、銃などによる事故死者の合計を上回る数字です。原因のひとつが、チャイルドシートの8割以上が不適切な使い方をされているという現実です。北米日産は自動車メーカーとして、こうした被害を少しでも軽減させるため、「クエスト・フォー・セーフティ」や「スナッグ\*・キッズ」というプログラムを通じて、安全確保に取り組んできました。

「スナッグ・キッズ」は日産やインフィニティのクルマをご利用の皆さまに、それぞれの車種に合うチャイルドシートの情報を提供する、独自のオンライン・ガイドです。日産やインフィニティの各ウェブサイト上で、さまざまなメーカーによるチャイルドシートのリストや、正しい装着の仕方に関するアドバイスなどを提供しています。「クエスト・フォー・セーフティ」プログラムは、チャイルドシートの安全性への関心が低い地域の保護者への啓発活動として、日産が1997年から実施しているものです。英語とスペイン語による無料の安全セミナーを開催し、チャイルドシートの正しい使い方を保護者に説明したり、チャイルドシートを選ぶ際の簡単な参考資料として「クエスト・フォー・セーフティ・リファレンス・カード」を配布しています。

\*スナッグ：ジャストサイズで居心地が良いこと

## 飲酒運転撲滅に取り組む、チャリティのためのウォーキング・プログラム

米国運輸省の高速道路安全局によると、死亡事故の41%が飲酒運転に関係しています。北米日産社は2005年から、飲酒運転の撲滅に取り組むNPOのMADD (Mothers Against Drunk Driving) が毎年実施している、「Strides for Change 5K」というウォーキング・プログラムの全米スポンサーになっています。このイベントは、飲酒運転撲滅のための呼びかけや募金活動、被害者支援、未成年者の飲酒防止をうながすことを目的に、地域社会が中心となって、5kmの距離を楽しみながらウォーキングするというものです。日産はスポンサーとして、そして子どもの安全を守る取り組みの一環としてこのイベントに参加。安全技術の資格を持つ日産社員が、チャイルドシートの使い方の実演を行ったり、ウォーキングの参加者に適切なシートを選ぶためのガイドを配布したりしています。また、全米各地の日産社員もチームを組んで歩き、募金を呼びかけています。飲酒運転撲滅を掲げるMADDと、安全への取り組みを推進する日産が協力することにより、このウォーキングは交通事故の防止に対する社会の意識向上や資金集めに役立てられています。「Strides for Change 5K」には毎年1万4,000人以上が参加し、総額180万ドル以上もの募金を集めています。日産は自動車メーカーとして、こうした啓発活動を通して、運転時の判断がどのような結果をもたらすかをドライバーにつねに意識してもらうことが重要だと考えています。



保護者にチャイルドシートの正しい使い方をうながす「スナッグ・キッズ」プログラム（米国）



飲酒運転撲滅を目指すチャリティウォーキング・プログラム（米国）

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
<b>安全への配慮</b>	<b>114</b>
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

Messages from Our Stakeholders  
ステークホルダーからのメッセージ

安全な交通社会をともに築くために



MADDナショナル(米国)  
プレジデント  
グリーン バーチ 氏

飲酒運転の撲滅に取り組むMADD (Mothers Against Drunk Driving) は、チャリティのためのウォーキング・プログラム「Strides for Change」を毎年実施しています。北米日産会社には2007年も引き続き全米スポンサーとしてご支援いただきました。そのおかげで2007年は30を超える都市で参加者が集まり、9万マイル以上を歩きました。その一歩一歩が飲酒運転という暴力的な犯罪の被害者たちとMADDを支え、未成年者の飲酒防止に役立っています。

調査によると、飲酒運転による事故から身を守るにはシートベルトの着用がもっとも効果的とされていますが、残念ながら正しく装着されていなかったために命を落とす子どもが多いのが実情です。日産はその危険性を訴える啓発活動に多大な努力を払っています。「Strides for Change」では、チャイルドシート  
の安全な使い方もお教えしています。

日産とMADDは手を携え、多くの家族が大切な子どもたちを守り、1人でも多くの命を救えるよう活動を続けています。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012 024
日産CSR重点9分野	027
日産CSRスコアカード	
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
<b>社員一人ひとりが考える サステナビリティ</b>	<b>126</b>
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

Our Views

## 社員一人ひとりが考える サステナビリティ



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114

## 社員一人ひとりが考えるサステナビリティ 126

パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## Our Views

# 社員一人ひとりが考えるサステナビリティ

ここでは経営陣や社員から寄せられた、自身の実体験や日ごろの業務を通じて考えている「サステナビリティ」への想いをご紹介します。



日産自動車株式会社 (日本)  
執行役員  
LCV事業本部 LCVプログラムダイレクター  
日産ライトトラック株式会社 (日本)  
社長  
東風汽车有限公司 (中国)  
董事  
**アンディ パーマー**

日産は、小型商用車 (LCV) 部門を将来の事業の柱として育て上げることに成功しました。世界的に事業を拡大している時期に、サステナビリティや企業の社会的責任という問題に目を向けるのはなぜでしょうか。それは社会における自らの役割を考える責任があるからです。お客さまも日産がCSRに配慮することを望んでおり、社員の間でもCSR活動への参加意欲が高まっています。2006年にLCV事業本部が業績好調により表彰された際、社員たちは賞金を「コスモス会」という団体に贈りたいと申し出ました。コスモス会は、日産東京本社近くの病院でがんと闘う子どもたちの母親が設立した組織です。自分たちの成功を他の恵まれない人びとと分かち合えることは私たちの喜びでもあります。企業としての社会的責任はもちろんのこと、事業の成功によって病気の子どもたちを笑顔にできる、そんな想いが私たち一人ひとりの原動力になっています。



日産自動車株式会社 (日本)  
市場情報室  
執行役員  
**星野 朝子**

クルマという商品の競争力は、どれだけ多くのお客さまに日産車を愛していただけたか、価値を感じていただけたかということで測定することができます。それに対して、企業が「サステナビリティ」という側面から継続して愛され続けるためには、日産はどうあればよいのか、それはどのような指標で測定が可能なのか。これはまさに、世界中の市場情報を日々分析し、さまざまな部署に提案を行っている私にとって大きな課題です。

「魅力的なクルマを売ればよい」という発想では、決して企業が長期的に競争優位に立つことはできません。「お客さまに魅力的なクルマを提供し続けられる力」をフルに発揮するためには、関連するステークホルダーや社会そのものとの関わりを強固にしていく活動が不可欠だと思います。そのためには、まず信頼関係の構築。その次に「愛すべき日産らしさ」の提供ではないか、と考えています。





はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
<b>社員一人ひとりが考える サステナビリティ</b>	<b>126</b>
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135



日産自動車株式会社(日本)  
技術開発本部 技術企画部  
エキスパートリーダー

**広田 寿男**

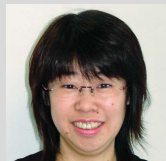
科学技術の進歩は私たちの生活を便利で豊かなものにしてくれますが、一方で、エネルギー消費の増大による自然環境への影響も大きくなりつつあります。このままでは私たちの生活は立ち行かなくなるかもしれません。子どもたちや次の世代の人たちのためにも自然環境を守っていくことが大切です。中でも、大気中のCO<sub>2</sub>の増加を抑制することが今もっとも重要な課題です。開発部門ではクルマからのCO<sub>2</sub>排出削減で高い目標を設定しており、エンジンの燃費低減や車両軽量化、バイオ燃料対応や電動車両など代替エネルギー技術の開発、さらにエコ運転や渋滞回避の技術に総力を挙げて取り組んでいます。これらの技術を社会に広めていくことで、サステナブルなモビリティを実現したいと考えています。



日産自動車株式会社(日本)  
生産事業本部 NPW推進部

**大宮 克彦**

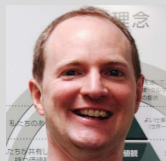
私が先輩から教わり、また後輩に伝えてきたことのひとつに「日産のモノづくりのノウハウ」があります。これを生かして、日産発祥の地である神奈川県内で小学生を対象とした「モノづくりキャラバン」を実施しています。これまで小学5年生、約4,700名が参加しました。モノをつくったり、触ったりすることが大好きな子どもの心をどう揺さぶり、興味を引き出すかということを、私はいつも真剣に考えています。子どもたちが時折見せる「なんだこれ?」「見逃さないぞ」といったキラキラした眼差しに触れるたび、大きな喜びを感じます。未来を担う子どもたちにモノづくりの楽しさを感じてもらえるよう、このプログラムをさらに良いものとし、長く続けていきたいと考えています。



日産自動車株式会社(日本)  
トータル カスタマー サティスファクション本部  
サプライヤー品質保証グループ 課長

**保坂 麻佐子**

クルマは数万点もの部品で構成されています。お客さまに高品質の製品を提供し続けていくためには、それらの部品を供給するサプライヤーとWin-Win(互いに利益を得る)の関係を構築し、ともに発展することが必須です。すなわち、サプライヤーを含めた周囲との「共生」という発想が重要であり、私はそれをつねに念頭において業務を進めています。そうした発想によって、お客さまに高品質な製品をご提供することができるだけでなく、企業としての社会的責任を果たし、日産が今後も持続的成長を遂げていくものと確信しています。



ジヤトコ株式会社  
人事部

**リチャード ゴッツ**

ジヤトコは今、急速にグローバル化を進めています。激化する競争の中では、グローバルに事業を進めなければ生き残れません。そしてグローバル化のシナジー効果を生み出すためには、異なる背景を持つ者同士がお互いの文化や習慣、考え方を理解し、尊重することが必要です。そのため私は各国の拠点で使用できる、世界共通の方針やプロセスづくりを進めています。社員一人ひとりが性別や国籍などに関わらず、グローバルな発想を持ち、ダイバーシティに富んだ環境で意欲的に仕事ができるように、このプロジェクトに取り組んでいきたいと思っています。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
<b>社員一人ひとりが考える サステナビリティ</b>	<b>126</b>
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135



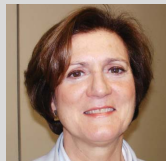
北米日産会社(米国)  
ITS・安全担当シニアエンジニア  
渉外  
**サラ ヒブル**

米国では近年、事故防止や衝突回避の技術がクルマの安全性を高めるとして注目されています。日産の「レーンデパーチャープリベンション」や「フォワードコリジョンワーニング」もその例で、こうした安全技術の開発と普及に携わる仕事に、私は大きなやりがいを感じています。次世代の日産車は、車両事故の大幅削減という「セーフティ・シールド」の目標に貢献できるはずで、急速な技術革新の時代にあつて、こうした技術を市場に浸透させるチームの一員であることは誇りであり、そうした努力が人びとの生活を豊かにすると信じています。



メキシコ日産自動車会社  
シバック工場 環境担当  
**アドルフォ アブルト**

20数年前、国連は「われら共有の未来」という報告書を発表し、生態系破壊の進行を防ぐためには、人類が商業活動や生活様式を変えなくてはならないと警告しました。今では、企業が社会的責任を果たすためには、「持続可能な開発」の追求が必須のものとなっています。私はメキシコ日産で10年近く「持続可能な開発」に関わる仕事をしています。環境ISO (ISO 14001規格) 認証を取得したことや、クリーン産業、環境保全の優良企業としてメキシコ政府から表彰されたことは、私たちの取り組みが正しいことの証であると思います。



日産モーター・イベリカ会社(スペイン)  
生産・情報システムマネジャー  
**マリア ドロレス グラネス バヨナ**

私が携わる「情報システム」の役割は、目標達成に必要なツールを企業に提供することです。欧州日産の情報システム部門と日産スペイン生産部門では、スペインのバルセロナ、アビラの両工場における生産体制の改善を目指す“Shift\_NSIO”イニシアティブを共同で立ち上げました。私たちの目標は、フル稼働に向けた生産最大化、弾力的な生産システム、1ラインで複数モデルあるいは2ラインで1モデルなど状況に応じて柔軟に対応できる生産体制の実現です。こうした取り組みがクルマの納期短縮を可能にし、日産の持続可能な成長につながると考えています。



日産(中国)投資有限公司  
北京研究開発部  
環境・安全技術渉外  
**谷 碩**

中国は今や世界第2位の自動車大国となり、都市部での渋滞に起因する大気汚染や、燃料不足などの問題を抱えています。こうした深刻な環境問題に直面している国に生活している私は、自動車環境法規の担当者として自分の仕事の大切さと責任の重さを感じています。中国が持続可能な自動車社会を築いていくには、自動車の環境インパクトをより小さく抑えていく必要があります。先進技術を駆使した環境に優しい自動車が一瞬も早く中国に導入され普及するよう、新たな発想を中国からどんどん発信していきたいと思っています。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
<b>社員一人ひとりが考える サステナビリティ</b>	<b>126</b>
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135



インド日産会社  
マーケティング・販売ダイレクター  
**ニーラジ ガーグ**

これまで20年あまり、インド国内や海外で自動車産業に携わってきました。インドのような競争の激しい市場で生き残れるのは、鍵となるプレーヤーだけだと痛感しています。企業がインドで生き残るためには、革新する可能性と、ステークホルダーとの信頼関係を築く能力が必要です。ここ数年間はインド日産で事業プランニングに携わっていますが、多文化から生じるさまざまな要望に的確に応えつつ、事業において先駆的なアプローチを取ることができれば、サステナビリティは必ず後からついてくるものだと確信しています。



ユニバーサル・モーターズ社(フィリピン)  
取締役副社長  
**エリザベス リー**

ユニバーサル・モーターズ社は、フィリピンの貧しい人びとの生活を豊かにする活動に取り組んでいます。たとえば、日産の商用バン「アーバン」の購入者がシャトルバスによる輸送ビジネスを立ち上げて、借入金を返済できるというパートナーシップ・プログラムを導入しています。また「アーバン」を1台販売するごとに提携財団に寄付を行い、小規模ビジネスの設立資金を提供しています。クルマの購入者に起業や経営の基礎を教える学校も設立しました。すでに支援した家族は1,850、雇用創出は3,300人にのぼり、この功績に対してアロヨ大統領から表彰を受けました。



日産プリンス大分販売株式会社(日本)  
CS推進室 室長  
**堤 正博**

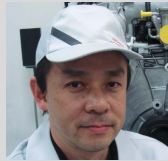
日産プリンス大分販売(株)は、「地域・社会貢献」を企業理念のひとつとして掲げ、さまざまな活動を進めています。その内容は、環境美化、交通安全の啓発、子育て支援、福祉機器の寄贈など多岐にわたり、年間計画を作成し実施しています。環境美化のひとつに「日産プリンス大分の森」づくりというボランティア活動があります。大分県由布市湯布院町の丘陵1.2ヘクタールを開墾、植樹し、森の育成を図る取り組みで、年間700名が参加しています。地域・社会貢献の原点とは、私たち一人ひとりが自らの問題としてとらえ、積極的に活動に参加することにあると考えています。これからも社員一同、楽しみながら息の長い活動を展開していきます。



北京運通インフィニティ(中国)  
販売課 課長  
**張 元**

急速な経済成長を遂げている中国は、「インフィニティ」の市場として非常に重要です。中国市場の勢いとともに、北京運通インフィニティも成長を続けています。私たちは、短い期間で数多くの業績を上げてきたことに誇りを感じています。中国の消費者にふさわしい、ニーズに応じたダイナミックな製品と洗練されたサービスこそが、私たちが提供する価値であると考えています。中国で1人でも多くのお客さまにインフィニティブランドの高級車の魅力を体験していただき、中国での「高級車」のコンセプトを変えていくことが目標です。

はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
<b>社員一人ひとりが考える サステナビリティ</b>	<b>126</b>
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135



日産自動車株式会社 (日本)  
横浜工場 第一製造部 組立課  
工長  
**斯波 勝則**

私たち横浜工場の社員は、日産の歴史に残るエンジンの立ち上げから生産まで行ってきました。今後もマザー工場として日産ブランドをさらに高めていきたいと考えています。今回担当する「GT-R」向けVR38型エンジンの生産では、ゴミ・ホコリの一切ない徹底された環境下で、まさに「GT-R」の心臓部づくりにふさわしく、1人の職人が投入から完成まで一貫して行います。私たちには、「匠」というべき職人集団をつくり上げた自負があります。「常勝職人がつくる常勝エンジン」という目標を掲げて、日産のフラッグシップエンジンである「GT-Rエンジン」が「日本の最高峰」から「世界の最高峰」と呼ばれるよう、今後も邁進していきます。



英国日産自動車製造会社  
サンダーランド工場  
メンテナンススーパーバイザー  
**バーニー ポイントン**

日産のサンダーランド工場には風力発電設備があります。先ごろ8基目のタービンが設置され、これにより年間電力使用量の約6%を風力発電でまかなうとともに、CO<sub>2</sub>排出量を4,000トン削減できる見通しです。工場には省エネ対策を実行する複数の専門委員会があり、週末の低エネルギー体制、非生産時の自動停止、空気漏れの削減や省エネ型機械の導入といった課題に取り組んでいます。その結果、工場全体のエネルギー・コストが大幅に削減されました。また環境対策の一環として、2007年に工場で発生した廃棄物の92.5%を再利用しました。



北米日産会社 (米国)  
キャントン工場  
車体・プレス加工 マネジャー  
**エリック パーセル**

米国キャントン工場が、日産のLCV (小型商用車) ラインアップ拡充の一翼を担うことになり、とても楽しみにしています。米国では小型トラック市場が縮小する一方、LCV市場はきわめて堅調に推移しており、LCV市場への参入は適切な対応といえます。私たち技術者が「日産ウェイ」の精神と行動に則って設計部門などと緊密に連携することで、信頼性や耐久性に優れた、コスト効率の良い高品質のクルマを生産できると信じています。それが日産の長期的な持続可能性や社員の達成感にもつながることでしょう。キャントン工場が日産のLCV生産の拠点となることを誇りに思っています。



南アフリカ日産自動車会社  
ロスリン工場  
生産管理本部長  
**イノック モトセペ**

生産管理者にとって、お客さまにご満足いただける製品をつくることは何よりも大切なことです。そのため、組立に必要な量の部品を必要な時間・場所に供給して、生産目標の達成に努めています。部品の供給体制を簡素化して製造ラインの流れを円滑にしたり、在庫を定期的にチェックして必要な量の部品をすぐに使えるようにすることで、不良品の発生を防いでいます。南アフリカ日産では継続的な改善や活発な話し合いを心がけており、生産体制をフルサポートしながらチーム一丸となって業務にあたっています。こうした努力が報われるのは、お客さまが私たちのクルマに満足する、その瞬間なのです。

## パフォーマンスデータ



	2005年度	2006年度	2007年度
連結従業員数	183,356人	186,336人	180,535人
個人株主数	218,620人	195,550人	249,000人
株価収益率 (PER)	12.2	13.3	7.8
ボラティリティ (株価変動率)	16.5%	22.4%	36.8%
法人税等の支払額	2,291億円	2,689億円	1,649億円
研究開発費 (売上高比率)	4,476億円 (4.7%)	4,648億円 (4.4%)	4,575億円 (4.2%)
設備投資額 (売上高比率)	4,750億円 (5.0%)	5,090億円 (4.9%)	4,289億円 (4.0%)
災害支援時の会社からの支出	1,000万円 (日産自動車 (株) 単独)	1,000万円 (日産自動車 (株) 単独)	650万円 (日産自動車 (株) 単独)
	6,239万円 (北米日産カトリーナ被災地)	318万円 (日産自動車とインドネシア日産の 社員募金：ジャワ島中部地震被災地)	557万円 (日産自動車社員と日産労組の募金： 能登半島地震・新潟中越沖地震)
日産自動車 (株) 従業員数	33,025人	32,746人	31,453人
平均年齢	41.2歳	41.5歳	41.4歳
平均勤続年数	19.9年	20.1年	19.9年
平均年間給与*1	7,299,136円	7,226,628円	7,138,692円
障害者雇用率	約1.9%	約2.0%	約2.1%
育児休職取得者数	71人	98人	148人
介護休職取得者数	4人	4人	5人
社員1人あたりの年間教育時間	約35時間	約35時間	約35.5時間
健康者率*2	72.22%	70.95%	65.31%*3
組合員総数	29,624人	30,521人	29,025人

\*1：平均年間給与は部長を除く一般従業員。賞とおよび基準外賞金を含む \*2：健康診断受診社員における病的所見のない社員の割合 \*3：2007年度より算出基準を変更

### ■ 地域別連結従業員数 (2008年3月末現在)

日本	88,413人
北米	28,943人
欧州	15,080人
一般海外地域	48,099人
連結従業員数	180,535人

### ■ 労働組合の状況

日産自動車 (株) の従業員は全日産自動車労働組合に加入し、同組合は全日産・一般業種労働組合連合会を上部団体とし、全日本自動車産業労働組合総連合会を通じ、日本労働組合総連合会に加盟しています。労使関係は安定しており、2008年3月末現在の組合員総数は29,025名。このほかに、一部の従業員が加入する組合として全日本金属情報機器労働組合日産自動車支部があり、組合員数は2008年3月末現在1名。

なお、日本国内のグループ各社においては大半の企業で会社別労働組合が存在し、全日産・一般業種労働組合連合会を上部団体としています。

また、海外のグループ各社では、メキシコにおいてはメキシコ労働者総同盟を上部団体とする労働組合および独立系の労働組合、英国においては合同機械電気労組など、各国の労働環境に即した労働組合が存在します。

■ 研究開発拠点：12カ国・地域 (日本、米国、英国、台湾、中国、タイ、インド、南アフリカ、メキシコ、ブラジル、スペイン、ベルギー)

■ デザイン拠点：4カ国・地域 (日本、米国、英国、台湾に計6カ所)

■ 車両生産工場：16カ国・地域 (日本、米国、英国、スペイン、台湾、中国、タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシア、メキシコ、ブラジル、イラン、南アフリカ、ケニア、エジプト)

### ■ 車種別販売台数(トップ5)

日本 (台)

車名	2007年度 (2007/4-2008/3)
セレナ	78,307
ティーダ (ティーダ ラディオ含む)	63,987
ノート	58,409
モコ	57,392
マーチ	48,829



セレナ

米国 (台)

車名	2007年度 (2007/4-2008/3)
アルティマ	287,140
セントラ	106,063
ティーダ	82,757
ムラーノ	75,414
インフィニティ G	72,428



アルティマ

欧州 (台)

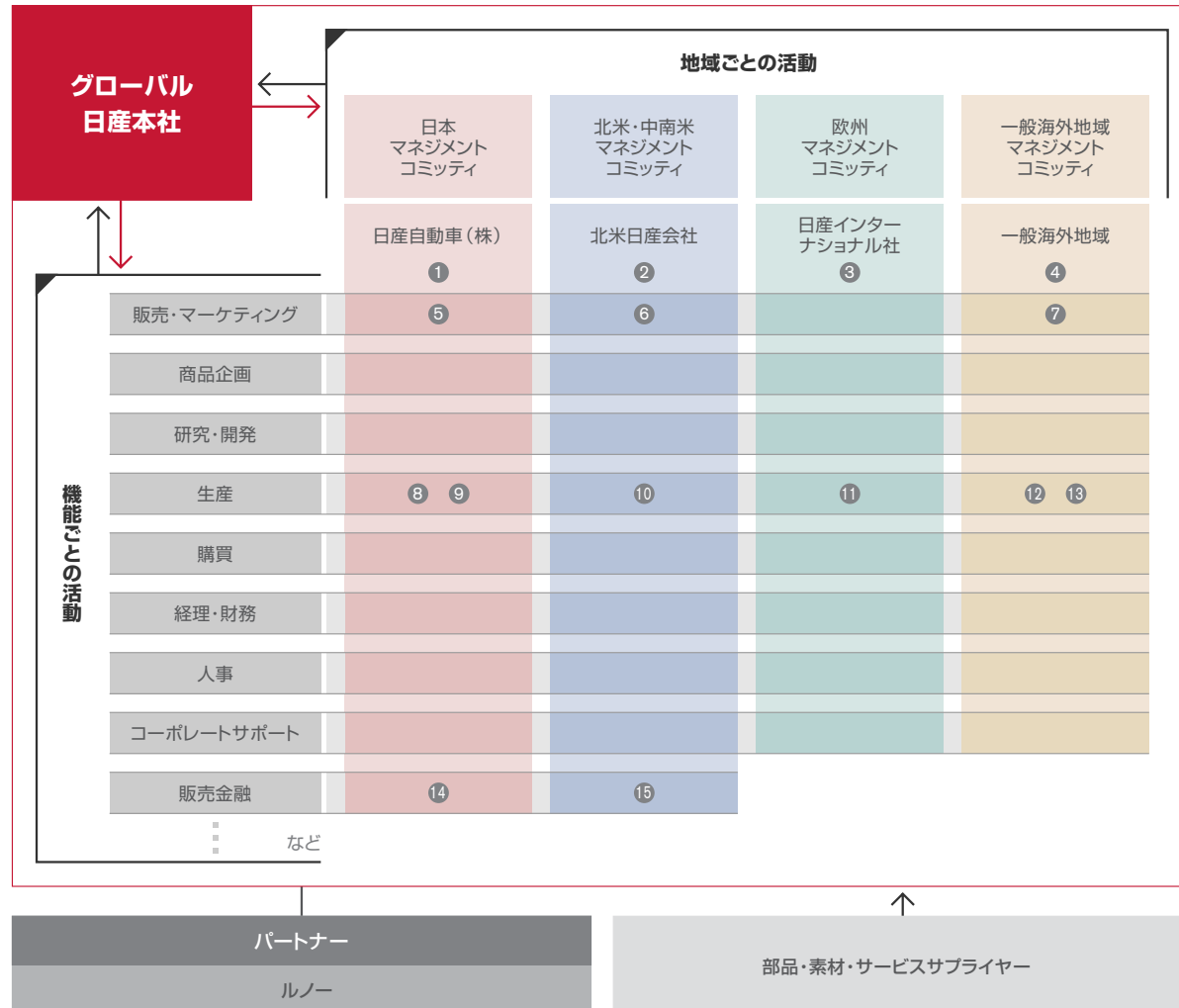
車名	2007年度 (2007/4-2008/3)
キャシュカイ	157,404
ノート	99,924
マイクラ (マイクラ C+C含む)	99,156
X-TRAIL	55,901
ナバラ	53,081



キャシュカイ

「日本」「北米・中南米」「欧州」「一般海外地域」の4地域それぞれのマネジメントコミッティ(経営委員会)が管轄する「地域ごとの活動」と、研究・開発・購買・生産といった各部門が世界的に展開する「機能ごとの活動」を有機的に統合した組織としています。そして、この地域ごとの活動と機能ごとの活動に対し、世界的な本社機構である「グローバル日産本社」が、組織横断的な見地から付加価値を与えることで、グローバルに一体となったグループ運営を行っています。

■ グループ運営連携



本社/統括会社/地域会社	販売金融会社
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 日産自動車(株)</li> <li>② 北米日産会社</li> <li>③ 日産インターナショナル社</li> <li>④ アジア・パシフィック日産会社 中東日産会社 東南アジア日産会社</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>⑭ (株)日産フィナンシャルサービス</li> <li>⑮ 米国日産販売金融会社 エヌアールファイナンスメキシコ</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p>

車両製造・販売会社/販売会社	部品製造会社
<ul style="list-style-type: none"> <li>⑥ カナダ日産自動車会社</li> <li>⑦ 裕隆日産汽車股份有限公司</li> <li>⑩ メキシコ日産自動車会社</li> <li>⑫ 南アフリカ日産自動車会社 東風汽車有限公司</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>⑨ 愛知機械工業(株) ジヤトコ(株) カルソニックカンセイ(株)</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p>

車両製造会社	日本国内販売会社
<ul style="list-style-type: none"> <li>⑧ 日産車体(株)</li> <li>⑪ 英国日産自動車製造会社 日産モトル・イペリカ会社</li> <li>⑬ サイアムニッサンオートモービル会社</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>⑤ 愛知日産自動車(株) 日産特販(株) 日産プリンス東京販売(株)</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p>

## 事業等のリスク

事業等のリスクに関する情報は以下のとおり。有価証券報告書（2007年3月期）に掲載したものと同様の内容です。

### 【経済状況】

当社グループの製品の需要は、製品を販売している国または地域の経済状況の影響を受けている。したがって、日本はもとより、当社グループの主要な市場である北米、欧州、一般海外地域における景気、およびそれにとまなう需要の変動については正確な予測に努めているが、予測を超えた変動があるときは、当社グループの業績および財務状況に影響を及ぼす可能性がある。

### 【国際的活動および海外進出に関するリスク】

当社グループの海外での生産および販売活動は、米国や欧州、一般海外地域で行われている。これらの海外市場への事業進出の際には以下に掲げるようなリスクの検討を十分行っている。しかしながら、予期しないリスクが発生したときは、当社グループの業績および財務状況に影響を及ぼす可能性がある。

- ・ 不利な政治または経済要因
- ・ 法律または規則の変更
- ・ 潜在的な不利な税影響
- ・ ストライキ等の労働争議
- ・ 人材の採用と確保の難しさ
- ・ テロ、戦争、その他の要因による社会的混乱

### 【研究開発活動】

当社グループの技術は、世の中のニーズに即し、有用かつ現実的で使いやすいものでなくてはならない。当社グループは、将来の世の中のニーズを予測し、優先順位をつけ、新技術に投資している。しかし、予測を超えた環境の変化や、世の中のニーズの変化により、最終的にお客さまにその新技術が受け入れられない可能性がある。

### 【製品の欠陥】

当社グループは、製品の安全を最優先の課題として開発・製造から販売サービスまで最善の努力を傾けている。製造物にかかる賠償責任については保険に加入しているが、保険でカバーされないリスクもあり、また顧客の安全のため大規模なリコールを実施した場合には多額のコストが発生する等、当社グループの業績と財務状況に影響が及ぶ可能性がある。

### 【為替レートの変動】

当社グループは海外各国に輸出を行っている。一般的に他の通貨に対する円高は当社グループの業績に悪影響を及ぼし、反対に、円安は当社グループの業績に好影響をもたらすことになる。また、当社グループが生産を行う地域の通貨価値が上昇した場合、それらの地域の生産コストや調達コストを押し上げ、当社グループの競争力の低下をもたらす可能性がある。

### 【通貨ならびに金利リスクヘッジ】

当社グループは外貨建債権債務の為替変動のリスク回避、有利子負債の金利変動リスク回避および、コモディティの価格変動リスク回避を目的とし、デリバティブ取引を行うことがある。こうしたデリバティブ取引によりリスクを回避することができる一方で、為替変動、金利変動等によってもたらされる利益を享受できないという可能性がある。また、これらデリバティブ取引を行う場合は信用度の高い金融機関を相手に行うが、万が一それらの金融機関が倒産するような場合には、当社グループの業績と財務状況に影響を及ぼす可能性がある。

### 【重要な訴訟等】

現在、当社およびグループ関連会社を相手とした訴訟については、当社側の主張・予測と相違する結果となるリスクもあり、当社グループの業績と財務状況に影響を及ぼす可能性がある。

### 【公的規制】

自動車業界は、排出ガス基準、ガソリン燃費基準、あるいは騒音等、環境や安全に係る規制の影響を受けやすく、これらの規制は今後よりいっそう厳格になる傾向にある。これら法規制を順守するために投資等の多大な出費が必要となり、これらのコストの増加は当社グループの業績と財務状況に影響を及ぼす可能性がある。

### 【知的財産保護の限界】

当社グループは、他社製品と差異化できる技術とノウハウを保持している。これらの技術とノウハウは今後の当社グループの発展には不可欠なものである。これらの資産の保護については最善の努力を傾注しているが、特定の地域では知的財産権による完全な保護が困難であったり、または限定的にしか保護されない状況にある。当社は2004年4月より、このような特定の地域での知的財産を保護し、日産の知的活動の成果を守る活動を強化すること、さらには新たな知的財産を抽出することを狙いとして、知的資産統括室を設け、日産ブランドの保護・創造活動を行っているが、第三者が当社グループの知的財産を使用して類似した製品を製造することを防止できない可能性がある。

### 【自然災害】

日本を本拠とする当社グループにとって、現在そして今後も最大のリスクのひとつであり続けるものに地震リスクがある。当社グループでは、地震リスクマネジメント基本方針を設定するとともに、最高経営責任者（CEO）をトップとするグローバルベースの地震対策組織を設置している。また、工場などの建屋や設備などの耐震補強を積極的に推進している。しかし、大規模な地震により、操業を中断するような場合は、当社グループの業績と財務状況に影響を及ぼす可能性がある。

### 【販売金融事業のリスク】

販売金融事業は重要なコアビジネスのひとつである。当社グループの販売金融部門は、徹底したリスク管理により高い収益性と健全な財務状態を維持しながら、自動車販売を強力にサポートしている。しかし、販売金融には、金利変動リスク、残存価格リスク、信用リスク等のリスクが避けられない。これらのリスクが当社グループの業績と財務状況に影響を及ぼす可能性がある。

### 【取引先の信用リスク】

当社グループは数多くの取引先と取引を行っている。当社グループは毎年、調達先については調達先の財務情報をもとに独自の格付けを行っており、またその他の取引先についても信用リスクに備えている。しかし、倒産のような予期せぬ事態により債権回収に支障が発生した場合等、当社グループの業績と財務状況に影響を及ぼす可能性がある。

### 【退職給付債務】

当社グループの従業員退職給付費用および債務は、割引率等数値計算上で設定される前提条件や年金資産の期待収益率に基づいて算出されている。実際の結果が前提条件と異なる場合、または前提条件が変更された場合、その影響は累積され、将来にわたって定期的に認識されるため、一般的には将来期間において認識される費用および計上される債務に影響を及ぼすことになる。

### 【原材料および部品の購入】

当社グループは、多数の取引先から原材料および部品を購入している。当社グループがコントロールできない市況変動ならびにその取引先が継続的に原材料および部品を確保できるかどうか等は、当社グループの業績と財務状況に影響を及ぼす可能性がある。



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134

## Third-Party Evaluation

## 第三者意見書

2007年度における日産自動車のCSR活動について、主にマネジメントとコミュニケーションという2つの側面から振り返り、考察してみたい。

まずマネジメントであるが、今後の推進方針である「日産CSRマネジメントウェイ」の構築を高く評価したい。「日産CSRマネジメントウェイ」は、得てして表面的な内容になりがちな同種の方針類と異なり、次に挙げる2つが実現への確実性を与えている。

第1点としては、管理指標である「CSRスコアカード」について、社会の声やニーズの変化を自社の事業環境の動きとともに取り入れ、更新を進めていることである。2点目として、この更新にあたって近年議論されているマテリアリティ(重要性)の概念について独自の視点を盛り込んだ手法を用い、CSR担当部門が関連する部門を交えて測定を行ったことである。

そして、この実現にさらなる担保を与えているのが「CSR ステアリング コミッティ」の存在である。CSRスコアカードの更新とマテリアリティ分析の作業が、CSR ステアリング コミッティの場で新たな気づきを与えて健全な議論を誘発させ、ひいては自社が取るべき方向性についての共通意識を醸成させることに資している。

一方、今後求められる点としては、この方針の確実かつグローバルレベルでの進展である。今回のサステナビリティレポートで調達分野についての言及がされているが、CSR重点9分野のうち他の8分野についても同種の活動が実施され、公開されることが望ましい。

続いてコミュニケーションについてであるが、社外への情報発信については評価されうる状態であろう。顧客や株主・投資家、地域社会、将来世代に対するコミュニケーションに関しては従来からも取り組みが進められていたうえに、2007年度は上述のとおりビジネスパートナー(サプライヤー)に対するコミュニケーションにおいても一定の成果を認めることができる。

一方で、社内、つまり自社やグループに対するコミュニケーションは急務である。全世界で連結ベース18万人にも及ぶ社員一人ひとりへの意識浸透は並大抵のことでないことは理解できる。しかし、この18万人こそが社外のステークホルダーと日産自動車とをつなぐ接点であり、日産CSRマネジメントウェイ成功の鍵を握るのが、社員の理解に尽きるのは自明の理である。

今年度より、日産自動車では新たな中期経営計画をスタートさせるとのことである。この新中期経営計画と日産CSRマネジメントウェイとが相互に作用し、社会の動きを先取りし、社会とともに持続的な発展の軌道を進むことを期待してやまない。



経済人コーポラ卓会議日本委員会  
専務理事 事務局長

関西学院大学大学院  
経営戦略研究科 准教授

石田 寛



はじめに	001
CEOメッセージ	002
CSR対談	006
日産のCSR	011
日産独自のCSR推進手法 「日産CSRマネジメントウェイ」	012
日産CSR重点9分野	024
日産CSRスコアカード	027
ステークホルダー エンゲージメント2007	031
事業活動報告・ コーポレートガバナンス	032
2007年度決算概況・ 新中期経営計画「日産GT 2012」	033
コーポレートガバナンス	038
ステークホルダーへの価値の向上	046
お客さまのために	047
株主・投資家の皆さまとともに	055
社員とともに	058
ビジネスパートナーとともに	067
社会とともに	073
地球環境の保全	083
安全への配慮	114
社員一人ひとりが考える サステナビリティ	126
パフォーマンスデータ	132
事業等のリスク	134
第三者意見書	135

## 社会的責任投資 (SRI) への組み入れ

財務面だけでなく、環境や社会性の観点から企業を評価し、投資対象を選ぶSRI (Socially Responsible Investment) が注目されています。日産は、英国のFTSE、日本のモーニングスター社会的責任投資株価指数などのSRIインデックスに組み入れられています。(2008年6月現在)



FTSE4Good

### FTSE4Goodグローバル100・インデックス

英国のフィナンシャル・タイムズと  
ロンドン証券取引所が共同出資する  
独立企業のFTSE社が開発。



モーニングスター社会的責任投資株価指数  
Morningstar Socially Responsible Investment Index

モーニングスター社会的責任投資  
株価指数 (MS-SRI)

## 報告範囲

本レポートでは、日産のグローバルな方針や取り組み、考え方を中心にご紹介しています。地域性のある取り組みについては、該当する地域名の記載等により、その旨を本文中でお伝えしています。

## 対象期間

2007年度 (2007年4月～2008年3月) を中心に、同期間の前後の活動内容も含めて記載しています。

## 第三者認証について

サステナビリティレポートの第三者認証については、グローバルに普遍的な手法が確立されているとはいえ、本来の目的である報告書の信頼確保という段階には至っていないことを勘案し、導入を見送っています。

## 参考にしたガイドライン

本レポートは、GRI「持続可能性報告のガイドライン」、環境省「環境報告書ガイドライン」を参考にしています。さらに、ガイドラインでの報告対象以外の活動についても幅広くご紹介しています。

## 見直しに関する注意事項

このサステナビリティレポートの記載内容には、歴史的事実や、当社の将来に関わる計画、目標およびそれに基づく事業計画や考え方が含まれていません。実際の業績は、さまざまな要因により、これらの見直しとは大きく異なる結果となり得ることをご承知おきください。日産の事業活動やその展開だけでなく、世界経済の動向や自動車産業を取り巻く情勢の変化、地球環境の変化なども、実際の業績に大きな影響を与え得る要因となります。

発行後に誤記や誤植が確認された場合には、その正誤情報を以下のウェブサイト上にて、ご案内いたします。

<http://www.nissan-global.com/JP/COMPANY/CSR>

## [ お問い合わせ先 ]

### 日産自動車株式会社

〒104-8023  
東京都中央区銀座六丁目17番1号  
グローバルコミュニケーション・CSR本部  
広報・CSR部 CSRグループ  
Tel : 03-5565-2132 Fax : 03-3546-2669  
E-mail : NISSAN\_SR@mail.nissan.co.jp